

博士論文

江戸前期天和年間における染織品の実態研究  
—三井文庫本『宗感覚帳』・『染代覚帳』の染織史的考察を基に—

平成 25 年 9 月

日本女子大学大学院  
人間生活学研究科生活環境学専攻

沢尾 絵

## 目次

### 序論

1. 研究の背景	・ ・ ・ 1
2. 従来の研究	・ ・ ・ 2
3. 研究目的および研究方法	・ ・ ・ 4
4. 論文の構成	・ ・ ・ 5

### 第1章 本研究の主となる史料（資料）とその背景

・ ・ ・ 9

1. 越後屋呉服店について	
(1) 三井家の商売の始まり	
(2) 創業者三井高利と越後屋呉服店	
(3) 同時期の文献に見る越後屋呉服店の繁栄	・ ・ ・ 10
2. 『宗感覚帳』（三井文庫所蔵）	・ ・ ・ 12
3. 『染代覚帳』（三井文庫所蔵）	・ ・ ・ 14
4. 同時期の井原西鶴の作品	・ ・ ・ 16
(1) 井原西鶴	
(2) 研究対象とする西鶴作品	
5. 小袖雛形本	・ ・ ・ 17
(1) 小袖雛形本とその役割	
(2) 研究対象とする小袖雛形本	・ ・ ・ 19

### 第2章 『宗感覚帳』にみる江戸時代前期の染織品と価格

・ ・ 70

1. はじめに	
2. 『宗感覚帳』と西鶴作品の染織品と価格の比較	
3. 考察	・ ・ ・ 71
(1) 毛類	・ ・ ・ 72
(2) 縹子	・ ・ ・ 74
(3) 紬	・ ・ ・ 76
(4) 綸子	・ ・ ・ 77
(5) 竜文／龍門	
(6) 紗綾	・ ・ ・ 78

(7) 縮緬	・ ・ ・ 79
(8) 羽二重	
(9) ビロード	
(10) その他	・ ・ ・ 80
4. 結語	・ ・ ・ 83
 第3章 『染代覚帳』記載の染色価格	・ ・ ・ 97
1. はじめに	
2. 『染代覚帳』の内容	
(1) 小紋と五所紋付	・ ・ ・ 98
(2) 無地染	・ ・ ・ 99
(3) 特定の技法を示す染の名称	
(4) その他の染色名称	・ ・ ・ 100
(5) 染色の追加料金ほか	
3. 価格に関する考察	
(1) 価格単位	
(2) 染代金[染価格]の考察	・ ・ ・ 101
(3) 天和年間における『染代覚帳』の価格の位置づけ	・ ・ ・ 102
(4) 西鶴作品による検討	・ ・ ・ 103
4. 結語	・ ・ ・ 105
 第4章 『染代覚帳』記載の染色名称	・ ・ ・ 111
1. はじめに	
2. 五所紋付、小紋、小紋五所紋	
(1) 五所紋付と小紋	
(2) 風俗画による検討	・ ・ ・ 113
3. 『染代覚帳』の地色の考察	・ ・ ・ 131
(1) 『染代覚帳』の無地染の名称	
(2) 『染代覚帳』と小袖雛形本の比較考察	
(2)-1 『染代覚帳』と小袖雛形本の系統色	・ ・ ・ 132
(2)-2 『染代覚帳』と小袖雛形本の色系統の比較考察	・ ・ ・ 135

4. 特定の技法を示す染色名称	・ ・ ・ 137
(1) 『染代覚帳』記載の特定の染色技法	
(2) 小袖雛形本の特定の技法を示す染色名称との比較	・ ・ ・ 139
5. そのほかの染色名称	・ ・ ・ 141
6. 染色の追加料金と反物の変更代金	・ ・ ・ 143
7. 結語	・ ・ ・ 144
第5章 結論	・ ・ ・ 150
図表一覧	・ ・ ・ 157
参考文献	・ ・ ・ 161
要旨	・ ・ ・ 167
Summary	・ ・ ・ 169
謝辞	・ ・ ・ 172



## 序論

### 1. 研究の背景

江戸時代の染織品に関する研究は、現存する小袖関連の染織資料・絵画資料・文献をもとに、小袖の形態に関する経年的変遷や各時代の意匠形式・文様・染織技法を解明することを主眼として行われてきた。

小袖服飾および染織史の確立の第一歩は、現存する遺品資料の調査によるものであった。小袖の形態上の変遷については昭和 34 年に前川<sup>1)</sup>が着装形式や布地・仕立て方から検討を行った。また、神谷<sup>2)</sup>は昭和 46 年に現存する仕立て替えのないような男物の小袖を基礎資料として各部の寸法を計測し、得られた寸法変化から、桃山期から江戸後期にわたる小袖の形態上の変遷を明らかにし、以来これが小袖の形態上の変遷を考える上での基本とされる。しかしながら小袖は染織品という性質上、仕立て替えを繰り返しながら、衣服として用途を満たさなくなるまで着られた消耗品であった。生活必需品であるがために、支配階級などの社会的地位の高い人物の遺品でない限り、特に貴重であるという認識もなかった。こうした理由から、他の工芸品と比べて現存資料が少なく、調査対象となり得る資料を更に限られたものとしてきた。

そこで、不足する現存資料を補う研究対象とされてきたのが絵画資料と小袖雛形本である。戦国期以降の肖像画からは支配階級である武将やその妻子の服飾を、また、江戸時代初期、元和・寛永期に隆盛を極めた近世初期風俗画からは、歌舞伎や遊里を題材とした華やかな風俗を知ることができ、これまでも度々研究対象とされてきた。しかし描かれた画面からの情報では、多くの場合は地質や染織技法まで知ることは困難である。また、初期風俗画の多くは画者の落款がないために正確な制作年代が明らかでなく、あるいは粉本である可能性にも留意しなければならない。しかし少なくとも絵画資料は、その当時までには存在していた小袖の形態・意匠形式・文様表現を視覚的に捉え、染織技法についてある程度まで推察できるという利点もある。そこで当時の服飾を知るための資料として活用する場合には、画面構成の要素や景観年代など絵画史の側面から導かれたおおよその制作年代や画者の情報を頼りに、研究対象として可能かどうかの選択が必要とされる。

絵画と同様、小袖服飾の研究に欠かせない小袖雛形本は、出版文化が花開いた江戸時代前期に武家層や富裕町人階級が呉服屋で小袖を注文する際に参考に

する、あるいは単なる鑑賞用に作られた、いわばデザインブックと考えられている。現存する寛文年間以降の小袖雛形本に含まれる図案の中には、現存する小袖と意匠表現の類似したものも見られ、その資料的価値の高さが研究者の間で認識されて久しい。小袖雛形本は、画者や出版元、出版年が明らかなものも多いため、当時流行した意匠形式や文様の題材を具体的に知ることができるのである。

以上のように、小袖服飾および染織の歴史は、限られた現存資料、絵画、小袖雛形本を中心として、これを裏付ける文献資料を用いながらほぼ確立されてきたのである。

## 2. 従来の研究

ここでは、江戸時代前期の染織品に関わる先行研究を、小袖の形態変遷、文様・意匠形式、染色、染織技法といった着眼点に大別し具体的に把握しておきたい。

まず、紀年銘のある貴重な染織資料を用いた研究としては、切畑<sup>3)</sup>による寛永期の小袖裂打敷の調査研究がわずかにあげられる。文様や意匠形式の研究は、初期風俗画や小袖雛形本を資料とする場合が多い。江戸時代前期の始まりである近世初期、元和・寛永期（1624～44）頃については、橋本<sup>4)5)</sup>、佐藤<sup>6)</sup>、倉盛<sup>7)</sup>、筆者・小笠原<sup>8)</sup>、末久<sup>9)</sup>が当時隆盛した初期風俗画に注目し、ここに描かれる人物の小袖文様や意匠形式について言及している。万治・寛文期（1658～73）以降になると、初期風俗画よりも小袖雛形本による文様研究の事例が多い。

小袖雛形本を資料とした研究は、恵美須屋<sup>10)</sup>による寛文期の小袖文様の分析が最も早く、その後、三橋（上野）<sup>11)12)13)</sup>により小袖雛形本の資料としての体系的研究が行われると更に注目されるようになった。小寺<sup>14)</sup>は、小袖に込められた寓意文様について早い時期に指摘した。その後、西田<sup>15)16)</sup>、岡田<sup>17)</sup>、奥村<sup>18)</sup>、佐藤<sup>19)</sup>、河原<sup>20)</sup>、前原<sup>21)</sup>、馬場<sup>22)</sup>、岡林・横川<sup>23)</sup>らは、小袖雛形本に表れる個別の文様を研究対象とし、その意味や意匠形式（文様配置）の傾向、文様の経年的な様式展開について言及している。他にも、岡松<sup>24)25)</sup>、清水<sup>26)</sup>らによる江戸時代前期から元禄期の浴衣の歴史やデザインの研究、長崎<sup>27)</sup>の寛文期以降の小袖雛形本と小袖の様式変化との関連性、筆者<sup>28)</sup>の刺繍に関する研究などがある。そのほかに、小袖雛形本発生以前の肉筆図案帳として、呉服商雁金屋関連

資料をもとにした研究が挙げられる。馬場<sup>29)30)31)</sup>の東福門院注文の小袖研究、塚本<sup>32)33)34)35)</sup>、花房<sup>36)37)38)39)</sup>の『衣裳図案帳』の文様・人名研究などである。また、藤井<sup>40)41)</sup>は小袖文様を俳諧・演劇に探り、口井<sup>42)</sup>は小袖や染織品に表れる文様を浮世絵や歌舞伎と室町時代の祭礼・芸能と関連付けて考察を行った。また河上<sup>43)</sup>は、江戸時代前期の京都における小袖の流行について、雁金屋の注文記録と島原の遊女が好んだ小袖との共通性、寛文の『御ひいなかた』との関連性について述べた。

近年では河上<sup>44)</sup>らにより、小袖雛形本を中心的資料として江戸時代前期の小袖の復元的研究も行われた。復元された4領の小袖のうち江戸時代前期を対象としたのは2領で、1領は東福門院が着用した最高級の寛文小袖形式を雁金屋の台帳（寛文4年〈1664〉）をもとに、もう1領は天和の禁令後の染色の動向を踏まえ、小袖雛形本『当世流行雛形』（天和4年〈1684〉）をもとにした復元であった。その際、江戸時代前期の明らかにされていない染色技法の一つである正平染の復元が試みられた。

奢侈禁止令などの禁令法規に注目し、武士、百姓、町人、職人に及ぶ階層の服飾事情に関する研究も行われている。中屋<sup>45)</sup>は南部藩の衣服令を、西村（中村）<sup>46)47)48)49)50)</sup>は岡山藩・鳥取藩・盛岡藩などの身分秩序と衣服規制との関係の研究、江戸幕府による衣服規制に関する小袖表の価格や違反者に対する制裁の研究を行った。これら禁令法規と服飾の関係からは分限相応を良しとする幕府の考え方が明らかとなっている。

町人服飾については、井原西鶴の文学作品を通じた服飾の研究が行われている。横川<sup>51)52)</sup>は、町人物に描写された人々の装いを意図や態度（精神的構造）の表出と捉え、町人服飾の全体像がどのように認識されていたのかを詳細に検討した上で、小袖、着物、衣裳、衣類といった総称的な用語を西鶴が正しく捉えて使用していた可能性を示唆した。

以上、これまで行われてきた江戸時代前期の服飾・染織史における研究成果をまとめると、形態・技法の時系列的な変遷の一時期としての位置づけ、初期風俗画による元和・寛永期の小袖の文様・意匠形式の特徴、小袖雛形本に基づく寛文期の意匠形式・各種文様表現の特徴の確立・意味づけなどが大半を占める。他に、禁令や文学作品を資料とした町人服飾の研究なども一部挙げられる。しかしながら、研究対象となってきた資料の多くが上層部の人々に関するもの

に限られており、結果として得られるのは支配者階級や遊女など社会的に特別な立場とされる人々に関する見解に限られたものであった。つまり明らかにされてきたのは、当時の最高級品に施された最先端の文様・最高水準の染織技術に関する見解なのである。このような実情を把握した上で、江戸時代前期後半、すなわち 1600 年代最後の四半世紀の特徴として明らかとなっていることをまとめると、次の 2 点に集約される。まず第 1 に、小袖雛形本に見られるような大胆な意匠形式の寛文小袖から、多色の染が可能な友禅染の小袖への移行期である。第 2 に、第 1 の特徴に関わる大きな要因として天和 3 年（1683）の奢侈禁止令があり、この禁令が小袖染織に多大な影響を与えたということである。しかしながら神谷<sup>53)</sup>が調査研究をまとめた際に指摘したように、元禄期に至る 1600 年代後半の約 30 年一万治・寛文・延宝・天和・貞享期頃一は、年紀の明らかな小袖の現存資料が見当たらず、江戸時代・天和年間頃を対象とした研究はこれまで進められなかったのが実情で、それ故に友禅染への移行期という漠然とした捉え方しか成されていなかったといえる。また、より身分の低い、下級武士や町人層といった社会の基盤を支えていた大半の人々が身に着けた小袖およびそれ以外の染織品に関する研究は、禁令や井原西鶴の作品を資料とする以外に手立てが見当たらなかったのが現状である。

### 3. 研究目的および研究方法

本研究では、これまで染織資料として紹介されることのなかった、公益財団法人三井文庫所蔵の呉服関係資料『宗感覚帳』および『染代覚帳』を新たな研究資料とし、現存資料の空白期である江戸時代前期・天和年間を中心に、当時実際に存在した染織品について、その名称・技法・価格・受容の状況を具体的に明らかにしていく。

『宗感覚帳』・『染代覚帳』はいずれも、天和 3 年（1683）あるいは同年頃に、呉服に関わる人物が商品（染織品）の名称および染色価格・反物価格を墨書で記した記録である。反物価格は染織品の品質を表すため、生活者の経済的背景を具体的に知る尺度となる。しかし呉服店で扱った染織品の価格に関する同様の史料はこれまで類を見ず、既存の染織史研究において顧みられることは禁令を通しての考察以外に例を見ない。そこで本研究においては、『宗感覚帳』と『染代覚帳』に記載された染織品の名称や価格に注目し、17 世紀最後の四半世紀、

どのような人々により、いかにして受容されていたのかという点について詳細に明らかにしていく。

比較検討のための資料として、当時の人々の生活を克明に描写していることで知られる井原西鶴の好色物・町人物 7 作品をとりあげ、作品中で扱われる服飾・染織品と価格に関する記述を網羅的に取り上げ詳細に検討する。また、価格については、当時の経済的側面考察を行うために、物価に関する研究をまとめた『15～17 世紀における物価変動の研究』<sup>54)</sup>『唐船輸出入品数量一覧』<sup>55)</sup>なども検討材料とする。

染織品の名称の考察に際しては、西鶴作品のほか、同時期の小袖雛形本に見られる染色名称をはじめ、同時期の染色技法書・指南書、百科事典などに収載される名称や解説を参考資料とし、本論の中で随時例証して行く。

また、染織品は実際にあらゆる階層の人々が身に着けたものであるという観点から、また現存資料に変わる視覚的資料として、同時期に描かれた絵画資料を検討資料に加える。以上の方法で染織品の価格と名称を総合的に検証することにより、史料に記録された染織品を、江戸時代前期に人々に受容されていた“生きた”染織品として具体的に捉え、明確にしていくことを本研究の目的とする。

#### 4. 論文の構成

本論文は序論と本論（第 1 章から第 4 章）、結論（第 5 章）から成る。

第 1 章では、江戸時代前期・延宝年間に開業した三井家の越後屋呉服店について、創業期から天和期頃までの動向を明確にする。次に本研究において中心的資料となる三井文庫所蔵史料『宗感覚帳』と『染代覚帳』の書誌学的見解と内容を述べる。本研究ではこの 2 種類の史料を価格や染織名称など様々な観点から考察することで江戸時代前期の染織品にまつわる価格や受容状況を明らかにしていく。そこで、同時期の井原西鶴の作品と小袖雛形本を検討資料として取り上げる。これらの検討資料の書誌学的情報および全内容についても本章で述べる。

第 2 章では、『宗感覚帳』に記された反物の名称と価格を通して、江戸時代前期の染織品の価格と受容状況について明らかにする。考察に際し、同時期に書かれた井原西鶴の町人物・好色物の染織品に関する記述を網羅的に抜き出し、

この中から『宗感覚帳』記載の染織名称と対照させて検討することで、実際の使用状況を具体的に捉える。また、当該時期には既に輸入染織品が多く出回っていた。そこで『萬金産業袋』<sup>56)</sup>、『唐船輸出入品数量一覧』、初期風俗画、雛形本の記述から輸入反物の実態についても考察する。

第3章・第4章では、『染代覚帳』に記載される染色・加工名称、価格について考察を行うことで、天和年間当時の染色に関わる実態を探っていく。第3章では『染代覚帳』の記載事項を項目ごとに分類し、内容の把握を行う。また、記載される染代価格に焦点をあて、井原西鶴の作品に描かれる町人の経済感覚や近い時代の物価などとの比較から、『染代覚帳』の使用者層を検討する<sup>57)</sup>。第4章では、『染代覚帳』に記載される染色・加工名称について同時期の小袖雛形本、初期風俗画、染色技法書、西鶴作品の記述、禁令などと対照しながら多角的な検証を行う<sup>58)59)</sup>。これにより、『染代覚帳』に収載される染色名称の特色、解明されていない技法の考察、記載される商品の使用者層の特色などを明らかにする。

第5章結論では、第2章から第4章で得られた新知見をふまえて、江戸時代前期・天和年間を中心とした染織品・染色品の実態や価格について、総括的な見解を述べるとともに、今後の課題について述べる。

---

註

<sup>1)</sup>前川喜重子「日本服飾史上における小袖の位置」福井大学学芸部紀要Ⅲ社会科学 9号、pp.69-80、1959年

<sup>2)</sup>神谷栄子『小袖』「日本の美術第67号」至文堂、1971年

<sup>3)</sup>切畑健「元和・寛永銘小袖裂打敷（真珠庵蔵）について—江戸時代前期の染織資料—」『MUSEUM』376号、pp.18-26、東京国立博物館、1982年

<sup>4)</sup>橋本澄子「相応寺屏風にみる小袖意匠—上—」『MUSEUM』、No.273、pp.27-30、東京国立博物館、1973年

<sup>5)</sup>橋本澄子「相応寺屏風にみる小袖意匠—下—」『MUSEUM』、No.277、pp.14-21、東京国立博物館、1974年

<sup>6)</sup>佐藤泰子「『松浦屏風』にみられる小袖もようについて」『文化女子大学研究紀要』2号、pp.60-69、1970年

<sup>7)</sup>倉盛三千代「江戸時代前期の遊女の服飾形態について」『和歌山大学教育学部紀要(人文科学)』23号、pp.71-85、1973年

<sup>8)</sup>筆者・小笠原小枝「小袖文様考—邸内遊楽図屏風（サントリー美術館蔵）を中心に—」『日本女子大学家政学部紀要』47号、pp.95-105、1999年

- 
- 9) 小出（末久）真理子「近世初期における小袖意匠形式の変遷」『日本家政学会誌』、日本家政学会、Vol.63、pp.73-85、2012年
- 10) 恵美須屋ツル「寛文時代の小袖―「新撰御ひながた」に関する研究―」和洋女子大学紀要2号、pp.14-20、1957年
- 11) 三橋佐江子「模様雛形本集成」『天理大学学報』39号、pp.304-323、1962年
- 12) 同上、40号、pp.84-103、1963年
- 13) 同上、41号、pp.115-135、1963年
- 14) 小寺三枝「小袖文様の発想法―寓意性について―」『お茶の水女子大学人文科学紀要』17巻、pp.19-124、1964年
- 15) 西田政恵「近世前期の小袖文様に於ける王朝風の考察―御簾文様小袖について―」『学葉（金沢女子短期大学紀要）』10号、pp.43-61、1968年
- 16) 西田政恵「小袖雛形の文様構成―日常的主題の展開―」『学葉（金沢女子短期大学紀要）』13号、pp.31-45、1971年
- 17) 岡田陽子「小袖にみられる雪模様について」『服飾美学』9号、pp.65-82、1980年
- 18) 奥村萬亀子「寛文小袖の成立について」『京都府立大学学術報告理学・生活科学』31号、pp.39-50、1980年
- 19) 佐藤泰子「近世模様小袖考―模様配置に関する考察―」『文化女子大学研究紀要』11号、pp.163-179、1980年
- 20) 河原由紀子「近世小袖文様水車について」『金城学院大学論集家政学編』20号、pp.99-102、1980年
- 21) 前原祥子「工芸にみる文様その2 近世小袖の文様―雛形本を中心として―」『武蔵野女子大学紀要』22号、pp.123-135、1986年
- 22) 馬場まみ「寛文小袖の文様表現に関する一考察」『日本服飾学会誌』10号、pp.70-77、1991年
- 23) 岡林裕子、横川公子「小袖に見る松文様の展開―小袖雛形本を中心として―」『衣の民俗館・日本風俗史学会中部支部研究紀要』13号、pp.1-18、2003年
- 24) 岡松恵「夜着における猿紋様―万治から元禄期の小袖模様雛形本を資料として―」『服飾美学』45号、pp.37-54、2007年
- 25) 岡松恵・清水久美子「浴衣の歴史とデザイン―寛文から元禄期の雛形本を中心に―」『日本服飾学会誌』20号、pp.18-26、2001年
- 26) 清水久美子・岡松恵「浴衣の歴史とデザイン―江戸時代前期を中心に―」20号、pp.9-17、2001年
- 27) 長崎巖「染織資料としての小袖雛形本」『MUSEUM』373号、pp.20-30、東京国立博物館、1982年
- 28) 拙稿「刺繍―小袖雛形本にみる「すぬい」について―」『日本女子大学大学院紀要（家政学研究科・人間生活学研究科）』12号、pp.69-80、2005年
- 29) 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』に関する研究―その一・小袖にみる文様・加工技法などの分析および延宝期の服飾について―」『風俗』31巻第4号、pp.46-65、1993年
- 30) 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』記載小袖に関する一考察―実物遺品資料との対比を通して―」『日本服飾学会誌』14号、pp.27-34、1995年
- 31) 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』に関する研究―その二・帷子にみる文様・加工技法などの分析および延宝期の服飾について―」『風俗』35巻第3号、pp.32-50、1996年
- 32) 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治4年・寛文3年）の研究（一）―しきうつしによる復元の試み―」『群馬県立女子大学紀要』第28号、2007年
- 33) 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治4年・寛文3年）の研究（二）―下前図復元と背・上前・下前連結図―」『群馬県立女子大学紀要』第29号、2008年
- 34) 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治4年・寛文3年）の研究（三）―年次別復元一覧表と文様の漸次以降的整理案―」『群馬県立女子大学紀要』第30号、2009年
- 35) 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治4年・寛文3年）の研究（四）―方連結図、見頃連結図、図内文字の読み―」『群馬県立女子大学紀要』第31号、2010年
- 36) 花房美紀「江戸時代前期の小袖意匠における「嶋」文様の変遷―雁金屋関連資料を中心に―」『服飾美学』34号、pp.17-32、2002年
- 37) 花房美紀「雁金屋関連資料『衣裳図案帳』にみられる二条姫の小袖意匠について」『服飾美学』35号、pp.17-32、2002年

- 
- 38) 花房美紀「雁金屋関連資料『衣裳図案帳』における人名の特定について—小袖意匠との関連から—」『奈良女子大学大学院人間文化研究科年俵』17号、pp.55-65、2002年
- 39) 花房美紀「雁金屋関連資料における小袖の「筋」文様について」『美術史』156号、pp.315-332、2004年
- 40) 藤井享子「「菊に蜘蛛の巣」文様とその周辺—近世前期小袖文様の主題を巡る一考察—」『服飾美学』35号、pp.1-16、2002年
- 41) 藤井享子「蝶に薄文様とその周辺—近世前期小袖文様を中心に—」『服飾美学』38号、pp.19-36、2004年
- 42) 口井知子「江戸における花車の流行とその起源」『民族藝術』22巻、pp.65-71、2006年
- 43) 河上繁樹「女院御所と島原 江戸時代前期における小袖をめぐる」『美術フォーラム 21』15号、pp.116-119、2007年
- 44) 河上繁樹研究代表「江戸時代の小袖に関する復元的研究」『関西学院大学アート・インスティテュート』中間報告書、研究成果報告書、2009年
- 45) 中屋弘子「盛岡短期大学研究報告」第14号、pp.24-40、1963年
- 46) 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—岡山藩の場合—」『岡山大学教育学部研究集録』32号、pp.131-153、1971年
- 47) 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—鳥取藩の場合—」『岡山大学教育学部研究集録』33号、pp.139-175、1972年
- 48) 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—盛岡藩の場合(1)(2)—」『岡山大学教育学部研究集録』46号、pp.97-122、47号、pp.97-110、1977年
- 49) 中村綏子「江戸時代幕府法における衣服規制の変遷」『岡山大学教育学部研究集録』48号、pp.41-56、1978年
- 50) 中村綏子「江戸時代幕府法における」『岡山大学教育学部研究集録』第49号、pp.133-149、1978年
- 51) 横川公子「西鶴町人物における服飾」『金蘭短期大学研究誌』20号、1989年
- 52) 横川公子「西鶴町人物における服飾 - 2 - 」『風俗』第29巻、pp.1-24、1990年
- 53) 註2に同じ、p.35
- 54) 『15～17世紀における物価変動の研究』京都大学近世物価史研究会編、読史会、1962年
- 55) 永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833年』創文社、1987年
- 56) 三宅也来『万金産業袋』享保17年(1732)序
- 57) 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察(上)—江戸時代前期の染色価格について—」『MUSEUM』635号、pp.7-23、東京国立博物館、2011年
- 58) 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察(下)—染色および加工名称について—」『MUSEUM』636号、pp.7-21、東京国立博物館、2012年
- 59) 拙稿「江戸時代前期の染色名称の考察—小袖雛形本と『染代覚帳』を中心に—」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第18号、pp.151-159、2012年



## 第 1 章 本研究の主となる資料（史料）とその背景

本研究では三井文庫が所蔵する 2 種の史料『宗感覚帳』および『染代覚帳』を染織史における新しい資料として提示し、これを詳細に研究することで天和年間当時の染織事情を明らかにしていく。本章ではまず、江戸時代前期に創業した三井家の越後屋呉服店とその前身を踏まえ、『宗感覚帳』と『染代覚帳』について、書誌学的考察を含め詳しく述べる。また、これらの資料の内容をより深く解釈するために、比較検討資料として用いる井原西鶴の作品および小袖雛形本について、資料としての特性と意義という観点からまとめていく。

### 1. 越後屋呉服店について

三井文庫編『三井事業史』<sup>1)</sup>では、江戸時代初期以降の三井家の創業から財閥解体までが、膨大な資料に基づいて明らかにされた。その本篇第 1 巻では、享保 7 年（1722）に作成された三井家の家譜である『家伝記』と事業発展の経過を記した『商売記』より、三井家の家祖からの歴史、越後屋呉服店創業者三井高利、創業期越後屋呉服店の動向について知ることができる<sup>2)</sup>。この『三井事業史』本編第 1 巻より、当時の越後屋に関して紹介する。

#### （1）三井家の商売の始まり

三井家の家祖は三井越後守といい、近江国で六角佐々木氏に属する武士であったとされるが、商人へと転じたのは多くの武士と同様、戦国動乱期の天正から慶長期であった。越後屋呉服店を創業した三井高利の父、則兵衛（道鏡）は伊勢松坂の本町で質と酒・味噌などを扱い始めた。これが三井家の商売の始まりで、則兵衛の息子 4 人はそれぞれ、早くから京御池町、江戸本町 1 丁目・2 丁目で小間物屋や呉服店を開いた。後に商人としての三井家の基礎を築きあげた四男高利は長兄俊次の店で商売の基礎を学んだのであった。

#### （2）創業者三井高利と越後屋呉服店

三井高利は元和 8（1622）年、伊勢松坂に生まれ、寛永 12（1635）年、14 歳で江戸日本橋本町 4 丁目の長兄俊次の店に勤め始めたが、27 歳の時に郷里の松坂へ戻った。結婚した高利は松坂で大名や村を相手に金融業を始め、

大成功を収めた。高利はこの利益を資金とし、延宝元年（1673）に江戸日本橋本町 1 丁目にて越後屋呉服店を開店し、同時に京に仕入れ店を設け、長男高平に任せた。京では西陣織物だけでなく、長崎に入ってくる唐反物などの仕入れも行った。越後屋が始めた京で買い付けを行い江戸で売るという方法は当時としては新しかった。高利は、「直仕入」により価格を下げ、掛け値なしの「店前売り」<sup>3)</sup>（現金売り）、反物の切り売りや仕立てを行うことで商売繁盛への道を開いていった。

しかし、越後屋の成功は同業の呉服仲間の反感を呼んだ。当時の呉服屋は地縁的な結びつきが強く、町単位で呉服屋仲間を作り武家屋敷への掛売りを主として行っていた。しかし、数多い町人層の購買力が増加し始めたと同じ頃、現金売りという新商法の越後屋が新規参入、成功することは受け入れがたく、本町の呉服屋仲間は天和元年（1681）、一斉に越後屋との取引を停止したり、京における買付の妨害を行った。しかし、三井越後屋はこれらの妨害に屈するどころか、内部の結束を強化して売上高をますます伸ばしていった。そして本町 1 丁目店は天和 2 年（1682）に駿河町への移転を果たし、翌年には 2 丁目店も合流した。移転後間もない越後屋の発展については『宗感覺帳』に残された月別売上高の推移より、移転前に比べ 60 パーセント増、天和 3 年正月から 7 月までの売上高は延宝初年（1673）の開店当初と比べると約 5 倍であるという<sup>3)</sup>。

以上、越後屋呉服店の創業期の様子や事業発展の経過を辿ると、三井家は商人に転じて間もなく、1600 年代前半より呉服や小間物などを扱う商売を始めて商人としての下地を築いてきた。そして商人の家庭に生まれた三井高利は、若い頃より自然に身に着けた商才を十分に発揮して金融業の成功で得た資金を基に越後屋呉服店を創業した。呉服店は独自の新しい商法で成功し、他店とは一線を画す繁盛ぶりであった。

### （3）同時期の文献に見る越後屋呉服店の繁栄

このような越後屋呉服店開業後の知名度の高さは、三井家の史料以外の他の文献にも見出すことができる。例えば、『京羽二重織留』（元禄 2 年〈1689〉）<sup>4)</sup> 卷六「人名部」には、諸職に携わる人々の名が蒐集されている。この中で、両替屋の項には新町通二條下ル町に「越後や次郎兵衛」の名があり、江戸本町四丁目呉服棚の項には「三井三郎左衛門」、同じく薬師町には「三井八郎右

衛門」の名が挙げられている。また、越後屋呉服店の繁盛ぶりを、井原西鶴が『日本永代蔵』（貞享5年〈1688〉）巻一ノ四「昔は掛算今は當座銀」で次のように記している。

・・・三井九郎右衛門といふ男、手金の光、むかし小判の駿河町と云所に、面九間に四十間に、棟高く長屋作りして、新棚を出し、萬現銀売に、かけねなしと相定め、四十余人利発手代を追まはし、一人一色の役目。たとへば、金襴類一人。日野・郡内絹類一人。羽二重一人、沙綾類一人。紅類一人。麻袴類一人。毛織類一人。此ごとく手わけをして、天鳶兎一寸四方、段子毛貫袋になる程。緋繻子鍔印長。龍門の袖覆輪かた々々にても、物の自由に売渡ぬ。殊更、俄か目見の熨斗目・いそぎの羽織などは、其使をまたせ、数十人の手前細工立ならび、即座に仕立、これを渡しぬ。さによつて家栄へ、毎日金子五十両づゝ、ならしに商売しけるとなり。世の重宝是ぞかし。此亭主を見るに、目鼻手足あつて、外の人にかはつた所もなく、家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべし、いろは付の引出しに、唐国・和朝の絹布をたゝみこみ、品々の時代絹。中将姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿弥陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の敷蒲団、林和靖が括頭巾、三条小鍛冶が刀袋、何によらず、ないといふ物なし。萬有帳めでたし。<sup>5)</sup>

ここでは、本来の三井八郎右衛門の名を三井九郎右衛門に置き換えているが、店の規模、手代の人数、越後屋の特徴である現銀売り・掛値なしの商売といった内容は駿河町に移転後の越後屋呉服店の特徴である。

越後屋呉服店は創業後間もない頃から外来染織品にも注目し、入手ルートを確認していた。山脇は『長崎の唐人貿易』において三井家を輸入商の越後屋と位置付け、長崎における絹の直買を積極的に行っていた事を指摘している<sup>6)</sup>。越後屋はこの、長崎経由の輸入染織品の入手ルートを確認する一方で、京・大坂・堺の長崎問屋を通じても輸入反物を入手していたという<sup>7)</sup>。上述の西鶴作品に描かれる高級織物や外来染織品の豊富な品揃えは実際に行われていたのである。越後屋がその豊富な品揃えの努力と店頭販売という革新的な商売方法により、他店の追随を許さない強固な立場を瞬く間に築いていったのであった。

## 2. 『宗感覺帳』(三井文庫所蔵)

縦 9.7cm×横 20.5cm、全 51 丁、18 の項目から成る『宗感覺帳』(図版 1～13) は、越後屋呉服店を創業した三井高利の 6 男三井高好により記された。高好は寛文 2 年(1662)に伊勢松坂で生まれ、元禄 17 年(1704)に 43 歳で没しており、宗感とは三井高好の法名である。本史料については既に、吉田・西坂により詳細な史料紹介、書誌学的考察、経営面を中心とした検討が行われた<sup>8)</sup>。その中で、『宗感覺帳』が当該期の三井経営の重要な一次史料として位置づけられること、天和 3 年から元禄 3 年(1683～90)の記録であることが明らかにされた。また、記載地については、高好の当時の所在地に関する記録との考察から、項目により江戸と京の 2 箇所が示され、奉公人、売場、本町呉服仲間といった視点からの詳細な検討も行われた。しかしながら、この史料紹介においても、またその後も、『宗感覺帳』を染織史の観点から研究した例はこれまでになく、本研究において天和年間当時の染織資料として初めて取り上げることになる。

三井高好は延宝 5 年(1677)、16 歳の頃より江戸本町の三井店勤務を始めた。兄高治は『商売記』の中で、高好が天和 3 年(1683)の店舗の駿河町移転に関して尽力し、江戸店においても商才を発揮したことを評価している。また元禄 4 年(1691)以降になると、高好は主に京において江戸で販売する呉服物の仕入を担当し、江戸と京を行き来していたことも確認されている<sup>9)</sup>。高好は、京で仕入れ江戸で店売りするという越後屋呉服店の経営方針を支えた重要な一人として、呉服関係の商品に精通する人物であったことが窺える。

『宗感覺帳』の全 18 項目は褒美金留、子五月五日褒美留、亥七月店落残、寅二月合力、遣之定、《呉服物相場書上》、年内仕入方覚、殿様買、諸治丸、午四月 本店遣之定、綿店人数十六人と積り壺ヶ年分目録、両替店八人年中遣目録、元禄三年午四月 本店人数立定・綿店人数定・両替店人数定・《亥正月より七月まで売高》、甲府様為替願申時書立、《本町四丁目須藤善右衛門屋敷・堀留川口与さ》から成る<sup>10)</sup>。本研究ではこの中に 4 項目の染織関連の記録があることに注目し、特に価格が記されている「亥七月店落残」(図版 2～4) および「呉服物相場書上」(図版 5〈11 丁裏〉～図版 13〈18 丁裏〉)の記載内容について、染織名称と価格の面から考察を行う。

「亥七月店落残」および「呉服物相場書上」の 2 項目についてよりの確に捉えるために、これらの表題について解説を加えたい。吉田らが上述の史料

紹介において、「亥七月店落残」は江戸での、「呉服物相場書上」は京での記録の可能性を挙げているため、これを前提とする。記載内容は史料紹介で明らかにされているため、その内容<sup>11)</sup>と原文をもとに表にまとめた(表 1-1①、②)。まずは「亥七月店落残」の店落という言葉の解釈であるが、私見では同時期の文献などから見出すことができず、当時一般的に使用されていない言葉だった可能性がある。そのため現段階では、越後屋の内部あるいは高好のような仕事に従事する同業者の間でのみ使用された言葉であったと解釈する。また、記載された内容に注目すると、商品価値(価格)を合計した記述に次ぎ、具体的な商品群を「〇〇るい(〇〇は染織品の種類を示す語)」や反物の単位を示す語などを記述している。また、6 丁裏には「戌ノ七月より極月分残り物有」とあり、これは前年の天和 2 年(1682)の江戸店での売れ残りを示すことがわかる。これらの記述から「店落」は「棚卸」または「売れ残り」と同義であり、「亥七月店落残」は「天和 3 年 7 月の売れ残りを書き出した一覧」と考えられる。売れ残りの一覧からは越後屋呉服店に並べられた全ての商品を知ることはできないが、例えば万唐物(表 1-1①)の項目の存在は、長崎経由で仕入れた輸入染織品が京を経て江戸店にもたらされ、実際に販売され市井に出回っていた染織品の名称を具体的に知る手がかりとなる。

次に、京において記された《呉服物相場書上》であるが、この表題は実際に『宗感覚帳』中に記されているものではなく、吉田らによる史料紹介においてその内容を示すために付記されたものである。記載内容は、当時の呉服関係の商品である糸および反物類で、季節(春・盆前・秋など)による価格が記されているものも多くある。そこで本論文ではこの《呉服物相場書上》の表題をそのまま用いることとする。価格の単位は当時銀経済圏の上方で使用された匁・分であることから、銀貨使用の関西圏における相場とみて間違いない。各種染織品の名称と価格は高好が京で仕入れる、あるいは売り値を決める際に書きとめたものと考えられる。また、京で仕入れ江戸で店売りするという当時の越後屋の営業形態から、記載されている染織品は京で仕入れた後に江戸へと運ばれ販売されたと考えられる。「亥七月店落残」と同様に、実際には江戸の人々の手にも渡っていたといえる。つまり、高好がいずれの地において呉服関連の名称を記録したとしても、京で仕入れて江戸に出ていた商品の記録であるという事実は変わらない。

反物の記述に関しては、八尋、三丈物、一間などの長さに関する特記事項

があるものとないものがある。長さの記載が特にないものは通常の反物 1 反分の価格で、通常とは異なるものに八尋、三丈物など書き加えたのであろう。この「呉服物相場書上」の存在により、同じ商品でも季節により価格の変動があることがわかる点は非常に興味深く、仕入れの価格を記録したとするならば、少しでも安価におさえようとした高好の意図が感じられる。

このような染織品の名称と価格に関する記録は、客にもっとも近い立場である呉服屋の主人が残したという明らかな由来を持つ点、記載時期と筆者が明らかな上に染織品の価格が明らかであるという点においても非常に稀な資料といえる。序論で言及したように、江戸時代前期の天和年間頃が年紀の明らかな現存資料の空白期とされる現状において、染織品の名称が記される『宗感覚帳』を本研究において新しい手がかりとして研究資料に加えることで、これまで不明とされてきた天和年間の染織事情を解明していく第 1 歩となり得るのである。

### 3. 『染代覚帳』（三井文庫所蔵）

『宗感覚帳』とともに本研究の中心資料として位置付ける『染代覚帳』は、本研究において初めて提示する史料であるため、研究の前段階としてまずは筆者による書誌学的考察、解読した内容および多少の解釈をまとめる。

三井文庫所蔵の『染代覚帳』（図版 14～29）は縦 26.5 cm、横 18 cm、14 丁から成る和綴本で、多様な種類の染色・加工名称及びその価格が記されている。表紙に貼られている和紙片に『染代覚帳』の墨書があり（図版 14）、7 丁表に「天和三年亥極月」（図版 21）、奥書には「天和三年亥十二月朔日今以写之」（図版 28）とあるのに続き、「甲子ノ正月九日片岡瀧之助」（図版 29）と記されていることから、甲子すなわち天和 4 年に片岡瀧之助によって写されたことがわかる。表紙の筆跡は本文や片岡瀧之助の署名とは異なるため、後に綴じて題をつけたものと見られるが、記された貨幣単位が匁・分・厘（銀貨使用）であることから、この史料が天和 3 年（1683）当時に上方の呉服屋で扱った染物の代金を写した事は確かである。『染代覚帳』そのものの伝来に関する詳細な記録は三井文庫内に残されていないが、背表紙に貼られている「昭和 6 年 11 月 13 日寄託」の付箋および 1 丁表の兔印と「志んまちみつ井け」の二種類の朱印からある程度の推測が可能である。

三井高利を家祖とした三井家は、高利直系の男子の家系六本家と娘婿を含む養子の家系五連家により構成され、当初より呉服商や両替商として財をなしたことで知られる。幕末の事業不振やその後の財政の安定などを経て、三井 11 家が再編成され今日に至っている。1 丁表の「志んまちみつ井け」の印記は、男子の家系 6 本家（北・伊皿子・新町・室町・南・小石川）の一つ、京の新町三井家を示す。新町というのは通称で、居住の町名に因んで付けられたものである。

江戸時代中期の新興商人である三井家は豪商として、また上流生活者として遊芸や教養など文化活動に積極的に参加してきた。現代に伝えられる三井家のコレクションの数々は代々の三井家当主らにより収集されたもので、文書類などの収集品には、その当主が愛用した印記が残されることが多い。『染代覚帳』と同じ印記は、新町三井家 8 代の宗辰文庫を有するカリフォルニア州立大学バークレー校が所蔵する江戸版本『狂歌伊勢海』に見られる<sup>12)</sup>。また 9 代三井高堅（1867～1945）の拓本コレクション「聴氷閣コレクション」中の拓本帖の中に同じ兔印が見られるという<sup>13)</sup>。このことから、『染代覚帳』が、新町三井家 8 代または 9 代のコレクションにあたり、その後昭和 6 年（1931）11 月 13 日に三井文庫に寄託されたことがわかる。

研究を始めるにあたり、『染代覚帳』を新たな研究資料として扱うために、まずは全内容を読み下し、記載事項を表にまとめて基礎資料とした（表 1-2）。本表は『染代覚帳』の記載事項を忠実に提示することを重視し、1 丁から 14 丁まで原本の構成通りに整理している。冒頭から 7 丁表までは絹紬染代の部、7 丁裏から 14 丁表までは木綿麻布の部、最終 14 丁表から裏にかけて紀年と写した人物の署名の順となっている。地質に続く、染色・加工名称の表記は原本の通りである。また、価格は漢数字を算用数字に改めての記載とした。尚、通し番号については第 3・4 章における研究の便宜上、筆者が付け加えた。

『染代覚帳』は『宗感覚帳』とは異なり、越後屋呉服店において記録・使用された史料ではない。しかしながら、紀年が明らかな染織史料の空白期はその存在自体が貴重である。『染代覚帳』の場合、写した人物の署名と紀年が明らかであり、その内容も非常に専門的な染色名称を中心に構成され、関西圏での記録を示す貨幣単位が収められている。またもう一步踏み込んで解釈すると、二部構成の内容が絹紬と木綿・麻布に大別されることも注目に値す

る（表 1-2〈p.40〉参照）。何故なら、絹紬や木綿・麻布は、天和 3 年(1683)2 月の禁令において、百姓・町人・その妻子が着るものと定められており<sup>14)</sup>、『染代覚帳』が写されたのはそのすぐ後に当たるからだ。つまり『染代覚帳』の研究をすることにより、現存資料の空白期で実態が不明とされる天和期の町人層を対象とした染織史の実態が見えてくることになるのである。染織史に新たな展開を見出す『染代覚帳』についても『宗感覚帳』と同様に本研究の中心的資料として位置づける。尚、本資料の具体的な内容説明と解釈については研究の各章にて行う。

#### 4. 同時期の井原西鶴の作品

##### (1) 井原西鶴

井原西鶴は、江戸時代前期、松尾芭蕉の俳諧、近松門左衛門の浄瑠璃と並んで浮世草子という新しい文芸の世界を確立した。彼の生年を明記する資料はないが、寛永 19 年（1642）に大坂難波で生まれたとされる。これは、元禄 6 年（1693）8 月 10 日に 52 歳で没したことを記す墓碑や『西鶴置土産』の巻頭の記述から遡るなどして推測されている生年である<sup>15)</sup>。その出自や家庭環境についても不明な点が多いのは、現代とは異なり文芸の社会的地位が低いこと、また西鶴が町人の出であることが理由として挙げられている<sup>16)</sup>。

一般に西鶴は元禄文化の担い手として位置づけられることが多い。しかし、寛永から正保期に幼少期を過ごして 10 代に俳諧を学び始め、成人したのが寛文 2 年である。34 歳で妻を亡くして商人を隠退後、天和 2 年（1682）に初めて好色物の第 1 作である『好色一代男』を出版し、それ以降立て続けに好色物・町人物と言われる作品を世に出した。その半生を振り返ると、西鶴が元禄以前の江戸時代前期の社会に生きて当時の文化を蓄積し、天和期以降の作品に反映させていったのだと考えられる。

##### (2) 研究対象とする西鶴作品

井原西鶴は、町人や遊女を主題とした作品を数多く書き残し、その中で丁寧な服飾描写を行っている。

これまですでに、西鶴作品を題材として描かれている服飾に関する研究は行われてきた。横川は、町人物（『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』）



に描写された人々の装いを意図や態度（精神的構造）の表出と捉え、町人服飾の全体像がどのように認識されていたのかを詳細に検討した上で、小袖、着物、衣裳、衣服、衣類といった総称的な用語を西鶴が正しく町人生活を捉えて使用していた可能性を示唆している<sup>17)</sup>。また、江戸時代における服飾の特色を、町人服飾の成立と捉え、分限相応の服飾、女性の服飾、服飾における致富、禁令における町人服飾と分限思想といった観点から論じている<sup>18)</sup>。こうした研究により、登場人物の社会的立場と服飾品の関係は捉えやすくなり、西鶴が作品中に当時の衣生活を的確に取り込んでいる事が理解されるのである。

このような研究に対して、本研究では呉服資料という視点を通して西鶴作品中に描かれる染織品の名称を網羅的に検証する、という点において新しい試みであるといえる。本研究においては、江戸時代前期の染織・服飾事情を総合的に捉えるために、『宗感覚帳』・『染代覚帳』とほぼ同時期に書かれた代表的な好色物 4 作『好色一代男』（天和 2・1682 年）、『好色五人女』（貞享 3・1686 年）、『好色一代女』（貞享 3・1686 年）、『男色大鑑』（貞享 4・1687）および町人物 3 作『日本永代蔵』（貞享 5・1688）、『世間胸算用』（元禄 5・1692 年）、『西鶴織留』（元禄 7・1694 年）の計 7 作を研究対象とする<sup>19)</sup>。

呉服関係資料である『宗感覚帳』・『染代覚帳』には価格についての記載事項があるため、この点を含めて検討することにより、染織品の受容と価値を実感として捉えられる。そこで上述の 7 作品に記載される染織品に関する記述を全て抜き出し表にまとめた（表 1-3①～⑦）。この表 1-3 では、西鶴作品の好色物と町人物を時系列に並べ、各巻と題目、登場人物、染織品を含む記述を前後関係が把握できるように抜き出している。登場人物と服飾を構成する染織品の名称が捉えられる本表を西鶴作品の染織描写の基礎資料として、2 章以降に活用していく。

## 5. 小袖雛形本

### （1）小袖雛形本とその役割

日本における印刷技術の始まりは、豊臣秀吉の朝鮮出兵による技術者や銅活字の印刷術の輸入によるものであった。次いで木活字も行われるようになっていたが、江戸時代の寛永年間（1624～44）頃に入り、読者層の拡大と共

に製版印刷が主流となっていた。版木は摩耗していくが、それでも1枚の版木で一般に3千部程度刷ることができ、それ以前に比べると出版部数は格段の差であった。読者が増えると、本の製版を行う出版本屋が増え、客と直接対応するいわゆる本屋も増えていった。今田洋三は、後に天明年間まで続く鱗形屋が江戸大伝馬町3丁目に登場した万治3年(1660)頃から、浄瑠璃本や枕絵本を扱う本屋が店を構えるようになったこと、貞享4年(1687)刊行の『江戸鹿乃子』(静嘉堂文庫本)に江戸の書商がまとまって紹介されていること、またこの中に京に本店を持つ店名を多く含むことに注目し、寛永期に京に始まった出版業が大坂、江戸へと広がりを見せ発達した事を指摘している<sup>20)</sup>。加えて、元禄9年(1696)刊の書籍目録である『増益書籍目録大全』に収録されている書名が7800点に及ぶことから、当時の出版文化の急激な発達ぶりにも言及している<sup>21)</sup>。

前項で資料として掲げた井原西鶴の浮世草子と同様、小袖雛形本もこのような出版事情を背景に刊行された種々の木版刷りのうちの、小袖に関する雛形本である。もともと小袖に関する図案帳は、すでに序論で述べた通り、江戸初期・慶長(1596-1615)頃の雁金屋の染物台帳のように注文衣装の文様を墨書で記録したり、肉筆の呉服注文控えである図案帳<sup>22)</sup>が先行して作成されていた。現存する雛形本に関して、上野は「小袖雛形本集成(1) 解題」において、こうした図案帳に続き、婦女子の躰け書である『女鑑秘伝書』(慶安3〈1650〉)や『女諸礼集』(万治3〈1660〉)などがあり、それに続く位置づけとして小袖雛形本をあげている。さらに氏は同書において、現存する小袖雛形本を改題再販や改編再版を除き、版木の種類を限定して数えた結果120余種の雛形本が存在していると報告し、現存する小袖雛形本の上限は、寛文6・7年(1666・1667)の『御ひいなかた』で、下限が文政3年(1820)刊行の『万歳ひいなかた』としている<sup>23)</sup>(表1-4参照)。

これら小袖雛形本の役割は小袖模様のデザインブックであった。個々の小袖雛形本はそれぞれに主題を持つものが多く、大抵の場合は序の内容で各雛形本の方針を明確にしている。たとえば、天和3年(1683)の奢侈禁止令を受けて、新しい染や技法を提案する『当世早流雛形』<sup>24)</sup>、宮崎友禅斎について言及し、友禅染が一世を風靡している様子を伝えてこれをテーマとする『友禅ひいなかた』<sup>25)</sup>などが挙げられる。こうした小袖雛形本の存在は、常に時勢を踏まえた刊行が行われていたことを示すものである。そしてその図案は、

時代の最先端の文様や意匠表現を染屋や職人などの技術者や呉服屋に提供する、あるいは武家の子女や富裕町人層といった経済的に余裕のある家において小袖を注文する際の参考として、様々に使用されていたのである。

## （２）研究対象とする小袖雛形本

本研究では染織史における天和期頃の実情を明らかにすることを第一の目的としている。前項で述べたように、小袖雛形本は各々に主題を設けているだけでなく体裁も様々である。大抵の場合は各丁に小袖の背面の雛形を置きその中に小袖文様を表しており、図案のみで言葉書きが皆無のものもあるが、多くは推奨する小袖の地色・文様・技法等についての言葉書きが添えられている。本論第３章では、江戸時代前期の染色名称の考察のための資料として、言葉書きの添えられた小袖雛形本を研究対象とした（表 1-5）。ここで『源氏ひいなかた』（貞享４年〈1687〉）迄を対象としたのは、続く貞享５年（1688）刊行の『友禅ひいなかた』以降、友禅染による文様染が多くなり、各種の染色技法を示す名称がそれまでと比べ格段に減少するからである。特に天和３年（1683）の奢侈禁止令<sup>26)</sup>の前後にその変化が顕著であり、同じ頃、小袖雛形本の文様表現の技法に関する記述も、繡・鹿子・金紗・上絵から染文様へと転換していく様子が見られる。よって本研究では友禅染を主体として構成される『友禅ひいなかた』を染織史における江戸時代中期への転換点と位置付け、貞享４年（1687）迄を江戸時代前期の資料として取り上げた。

序論でも述べたように、これまで小袖雛形本を資料とした研究では、描かれた文様からその意匠形式の特徴や文様の意味を考察する、あるいは各図に添えられた言葉書きを参考に技法の解明などを行うといった手法がとられてきた。いずれにおいても小袖雛形本の文字資料となる言葉書きについては、必要箇所を抽出する場合が多い。本研究では第４章において『染代覚帳』の染色名称と小袖雛形本に使用される小袖の地色との比較を行うことで、着用者層による色系統の違いを考察する。これを前提に、研究対象とする表 1-5 の小袖雛形本について全ての言葉書きを抽出してまとめ、これを文字資料として表 1-6（①～⑨）とした。江戸時代前期の小袖雛形本に記載された全ての言葉書きをまとめた例はこれまでにない。西鶴作品と同じく、天和年間の染織史を考察する具体的な文字資料という視点から小袖雛形本を活用することで、『染代覚帳』の内容をより深く解釈する一助となる。

以上述べてきたように、本研究では新しい染織史料『宗感覚帳』・『染代覚帳』を提示し、中心資料とする。その内容を読み解き天和年間の染織品の実態を捉えること、この 2 資料が当該期の染織史研究における資料的価値を持つことを明らかにするために、井原西鶴の作品や小袖雛形本を改めてとりあげ、比較・対照しながら考察していく。本章においてまとめた『宗感覚帳』、『染代覚帳』、西鶴作品や小袖雛形本からの服飾・染織（色）描写に関する文字資料は第 2 章以降の研究への活用のみならず、天和年間の染織史の実態を把握するための基礎資料として今後も活用していくことができる。

図版 1『宗感覺帳』表紙

図版 2「亥七月店落残」4 丁裏～5 丁表

図版 3「亥七月店落残」5 丁裏～6 丁表

図版 4「亥七月店落残」6 丁裏～7 丁表

図版 5 「呉服物相場書上」 10 丁裏～11 丁表

図版 6 「呉服物相場書上」 11 丁裏～12 丁表

図版 7 「呉服物相場書上」 11 丁裏～12 丁表

図版 8 「呉服物相場書上」 13 丁裏～14 丁表



図版 9 「呉服物相場書上」 14 丁裏～15 丁表

図版 10 「呉服物相場書上」 15 丁裏～16 丁表

図版 11 「呉服物相場書上」 16 丁裏～17 丁表

図版 12 「呉服物相場書上」 17 丁裏～18 丁表

図版 13 「呉服物相場書上」 18 丁裏～19 丁表

表 1－1 ①「亥七月店落残」 ※原文にて記載

註) 本表は吉田伸之・西坂靖「宗感覚帳―創業期三井越後屋呉服店の動向―」(『三井家文庫論叢』第 24 号、pp.262～263)より筆者作成

②「呉服物相場書上」 ※原文にて記載



註) 本表は吉田伸之・西坂靖「宗感覚帳―創業期三井越後屋呉服店の動向―」(『三井家文庫論叢』第 24 号、pp.266～272)より筆者作成

図版 14 『染代覚帳』表紙

図版 15 『染代覚帳』1 丁表



図版 16 『染代覚帳』 1 丁裏～2 丁表

図版 17 『染代覚帳』 2 丁裏～3 丁表

図版 18 『染代覚帳』 3 丁裏～4 丁表

図版 19 『染代覚帳』 4 丁裏～5 丁表

図版 20 『染代覚帳』 5 丁裏～6 丁表

図版 21 『染代覚帳』 6 丁裏～7 丁表

図版 22 『染代覚帳』 7 丁裏～8 丁表

図版 23 『染代覚帳』 8 丁裏～9 丁表

図版 24 『染代覚帳』 9 丁裏～10 丁表

図版 25 『染代覚帳』 10 丁裏～11 丁表

図版 26 『染代覚帳』 11 丁裏～12 丁表

図版 27 『染代覚帳』 12 丁裏～13 丁表

図版 28 『染代覚帳』 13 丁裏～14 丁表

図版 29 『染代覚帳』 14 丁裏

表 1－2 『染代覚帳』一覧 ※原文にて記載



註) 本表は『染代覚帳』原本より筆者作成

※表中の□は判読不明の字を示す

表 1－3 井原西鶴 服飾・染織描写一覧 ※原文にて記載

①「好色一代男」(天和 2 年〈1682〉)

②「好色五人女」(貞享 3 年〈1686〉)

③「好色一代女」(貞享 3 年 〈1686〉)

④「男色大鑑」(貞享 4 年 〈1687〉)

⑤「日本永代蔵」(貞享 5 年 〈1688〉)

⑥「世間胸算用」(元禄 5 年 〈1692〉)

⑦「西鶴織留」(元禄 7 年 〈1694〉)

註) 本表は『染代覚帳』原本より筆者作成。出展については、第 1 章註 14(p.67)掲載

表 1－5 小袖雛形本一覧 ※原文にて記載



註) 本表は小袖雛形本集成(1)～(4)1 解題(本文 p.67 註 19)  
を参照し、筆者作成

表 1－5 江戸時代前期刊行の小袖雛形本 ※原文にて記載

註) 本表は筆者作成。番号は表 1－6 に対応する。



表 1－6 ※原文にて記載

①四季模様諸礼繪鑑 万治 3 年(1660)刊か 東京国立博物館所蔵

註) 本表は『四季諸礼模様繪鑑』より筆者作成

②御ひいなかた 寛文 6・7 年(1666・1667) 小袖雛形本集成収載





註) 本表は『御ひいなかた』より筆者作成

③御雛形萬女集（延宝・天和頃）1673～1684 東大総合図書館所蔵

註) 本表は『御雛形萬女集』より筆者作成

⑥新板 小袖御ひいなかた 延宝 5 年(1677) 小袖雛形本集成収載



註)本表は『新板小袖御ひいなかた』より筆者作成

⑤新撰御ひいなかた 天和元年か(1681年か) 大丸松坂屋染織参考館所蔵

註)本表は『新撰小袖御ひいなかた』より筆者作成

⑥新板當風御ひいなかた(当世早流雛形)天和 4 年(1684)

註)本表は『新板當風御ひいなかた』より筆者作成

⑦今様御ひいなかた 貞享 2 年(1685)刊 高田装束研究所／大丸松坂屋染織参考館

註)本表は『今様御ひいなかた』より筆者作成

⑧諸国御ひいなかた 貞享 3 年(1686)小袖雛形本集成収載







註) 本表は『諸国御ひいなかた』より筆者作成

⑨源氏ひいなかた 貞享 4 年(1687) 小袖雛形本集成収載



註) 本表は『源氏ひいなかた』より筆者作成

註

- 1) 『三井事業史』は 1971 年刊行開始、2001 年全篇完結。本篇 3 巻 5 冊、資料編 4 巻 5 冊からなる。三井家の創業以降 300 年の事業展開を資料に即してまとめており、資料篇には江戸・明治期の重要史料が多数収載される。
- 2) 『三井事業史』第 1 巻、pp.3・21、三井文庫、1981 年
- 3) 同上、pp.31～35
- 4) 『京羽二重織留』（元禄 2・1689）は『京羽二重』貞享 2 年（1685）に収載されなかった名跡として伏見大津の奉行役屋敷及び附近の名所などを沿えて出版された。『京羽二重』は京の略歴、縦横の町筋、名所、旧跡ほか諸大名の御屋敷付呉服所や京在住諸師諸芸の住所姓名などを網羅した書物である。
- 5) 井原西鶴『日本永代蔵』巻一ノ四 昔は掛算今は當座銀（『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p. 49、1960 年）
- 6) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964 年  
三井家の輸入反物の直買は越後屋本家の名を伏せて行われ、越後屋は長崎商売でも大手筋であったという。
- 7) 前掲書註 6) p.264～p.265
- 8) 吉田伸之・西坂靖『『宗感覚帳』一創業期三井越後屋の動向一』『三井文庫論叢』24 号、pp. 243・297、1990 年
- 9) 前掲書註 8) pp.245～250
- 10) 《 》内の表題は、史料の内容から上述注 7 の史料紹介において付けられたものであるが、本研究では呉服物相場書上についても「 」の表記とした。
- 11) 前掲書 6) pp.262～263、pp.266～271
- 12) アメリカ・カリフォルニア州立大学 パークレー校の所蔵する三井家旧蔵本には、新町三井家八代三井宗辰収集の宗辰文庫 2 万 2000 点が含まれる。（『カリフォルニア大学パークレー校所蔵 三井文庫旧蔵 江戸版本書目』ゆまに書房、書誌書目シリーズ、1990 年）
- 13) 『三井家文化人名録』三井文庫、2002 年
- 14) 天和三年亥年二月 町中之者共衣服之儀御触書  
百姓町人之衣服、絹紬木綿麻布、以此内、応分限、妻子共ニ可着用之事  
(『徳川禁令考』前集第 5、pp.355～356、創文社、1959 年)
- 15) 野間光辰『西鶴年譜考證』p.45、中央公論社、1983 年
- 16) 谷脇理央、西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社、1993 年
- 17) 横川公子「西鶴町人物における服飾」『金蘭短期大学研究誌』20 号、pp.1・25、1989 年
- 18) 横川公子「西鶴町人物における服飾」風俗、第 29 巻 第 4 号、pp.1・24、1990 年
- 19) 西鶴作品の出典については次の通り。  
『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』  
(『西鶴集 上』日本古典文学大系 47、岩波書店、1957 年)  
『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』  
(『西鶴集 下』日本古典文学大系 48、岩波書店、1960 年)  
『男色大鑑』(新編日本古典文学全集 67『井原西鶴集②』小学館、1996 年)
- 20) 今田洋三『江戸の出版資本』(西山松之助編『江戸町人の研究』第 3 巻、1973 年、吉川弘文館、pp.114～115)
- 21) 今田洋三『印刷・出版』(『日本古文書学講座 8 近世編Ⅲ』pp.166～167、雄山閣出版、1980 年)
- 22) 『雁金屋雛形帖』(万治 4・寛文 3 年) 大阪市立美術館所蔵
- 23) 上野佐江子『小袖雛形本集成 (1) 解題』pp.11・14、学習研究社、1974 年
- 24) 『当世早流雛形』天和 4 年 (1684) (『小袖雛形本集成 (1)』、学習研究社、1974 年)
- 25) 『友禅ひいなかた』貞享 5 年 (1688) (『小袖雛形本集成 (1)』、学習研究社、1974 年)
- 26) 天和 3 年 (1683) の禁令は次の通りである。  
一、金紗 一、縫 一、惣鹿子  
右の品、向後女之衣類ニ製禁之、惣而珍敷織物染物、新規に仕出候事、無用たるへし、小袖之表壱端ニ付而、式百目より高直ニ売買仕ましき者也、  
(『徳川禁令考』前集第 6、p.199、創文社、1959 年)

## 第2章 『宗感覚帳』にみる江戸時代前期の染織品の受容と価格

### 1. はじめに

本研究では『宗感覚帳』（天和3～元禄3〈1683～1690〉）に記載されている染織品の名称と価格について考察することで、江戸時代天和期頃の染織品とその受容の状況を明らかにしていくことを目的とする。考察に当たり、西鶴作品に描かれる服飾・染織品の名称を網羅的に抽出して比較検討し、当時の人々がどのような形で染織品を受容していたのか明らかにする。同時に、登場人物が身に着けている染織品を『宗感覚帳』に記された価格と対照することで、その価値を価格面から位置づける。

当時は江戸幕府による鎖国体制が進められていたが、一方で中国船やオランダ船により多くの染織品が海外から持ち込まれていた。これに関連し、越後屋呉服店が創業当初より輸入織物の入手に積極的であったことについては第1章第1項(3)でも述べた通りである。そこで、研究対象とした染織品の国産品・輸入品の判断の一助として『唐船輸出入品数量一覧』<sup>1)</sup>および『萬金産業袋』<sup>2)</sup>を参照した。『唐船輸出入品数量一覧』には本研究において対象とする1680年前後の種々の輸入反物価格が収載されているが、輸入反物の1反は、必ずしも日本の着分の1反と等しいわけではない<sup>3)</sup>。染織品の種類や国産・輸入品の別により反物の幅や長さが異なる可能性については常に配慮が必要で1反あたりの価格をそのまま日本の反物1反と同等なものとして位置づけることはできない。そこで本研究では、高好の記した「呉服物相場書上」の価格を最も客に近い資料とし、『唐船輸出入品数量一覧』については当時実際に日本に入っていた輸入染織品の名称を知る手がかりとする。尚、本文中の『唐船輸出入品数量一覧』からの染織品の名称については、主要なものに原典の名称を付した。

### 2. 『宗感覚帳』と西鶴作品の染織品と価格の比較

『宗感覚帳』「亥七月店落残」「呉服物相場書上」（表1-1①、②）と西鶴7作品の染織品に関する記述（表1-3①～⑦）を対照させ、その結果を表にまとめた（表2-1①～⑦）。西鶴作品は表2-1①より年代順に挙げ、項目については左から順に、巻・題目、登場人物、その登場人物の姿を描写する《染織品名称を含む記述》、染織品の《用途》、染織品を示す《注目用語》を順に列記して

おり、ここまでが西鶴作品から抜粋した内容である。続いて《注目用語》に該当する染織品を、1反あたりの価格が明らかな「呉服物相場書上」より抜粋し、《対照染織品》と《価格》の項に記した。「呉服物相場書上」に見られない染織品については「亥七月店落残」および『唐船輸出入品数量一覧』に収載される名称を参照し、《掲載文献》では出典を「呉」（「呉服物相場書上」）・「亥」（「亥七月店落残」）・「唐」（『唐船輸出入品数量一覧』）の表記で区別した。

表の作成に際しては、西鶴の個々の作品の性格（好色物・町人物）を考慮し、作品ごとに列記したため、同じ染織品の名称や掲載文献の参照価格が重複する箇所も見られるが、登場人物の立場や用途に至るまで網羅的に抽出することを優先した。なお、西鶴の作品中、肌小袖（白）や白き袷などのように、織物の種類を特定できないものは検討の対象外とし、西鶴作品以外に同じ染織品の名称が見られないものについては空欄（灰色塗りつぶし）で表した。また、前述の『日本永代蔵』巻一ノ四「昔は掛算今は當座銀」の記述<sup>4)</sup>については、特定の人物ではなく越後屋呉服店の品揃えを描写したものであるため分類の対象外とする。

表の作成により、西鶴作品に描かれる染織品は、登場人物の小袖類（着物や羽織）、帯・頭巾・巾着・足袋・腰巻（二布や襠）などの服飾品、贈答用の巻物、棧敷席などの敷物に使用される布として描かれていることが概観できた。そこで次の段階として価格に留意した考察を進めるため、西鶴作品の記述（表 2-1 ①～⑦）と「呉服物相場書上」（表 1-1②）に共通して見られる染織品の種類・価格・用途・着用者に注目した対照表を作成した（表 2-2）。抽出した染織品は 9 種類で、価格の高いものから順に並べている。ただし、羽二重については「呉服物相場書上」に価格が記載されず『世間胸算用』より抽出した参考価格を記したため対照表（表 2-2）の最終項目に付した。また、ビロードについては後述の通り『宗感覚帳』の[ひろうと]と西鶴作品中の[天鷲絨]とでは性質の異なるものであるため、別途の記載としている。

### 3. 考察

価格順に並べた表 2-2 記載の各染織品について輸入品または国産品の把握、どのような染織品であったのか、価格や受容状況はいかなるものであったのか、などの着眼点から考察を進めていく。反物 1 反当たりの幅や長さについては管

見の及ぶ限り近世では最も古い記録である『萬金産業袋』を参照した。

#### (1) 毛類

西鶴作品の中で毛類を表す名称は、毛氈、花氈、毛類、羅紗、猩々緋である。羅紗は日本では16世紀以降に南蛮船や紅毛船により舶載された。『唐船輸出品数量一覽』では、寛永14年(1637)の金羅紗[goude lakenen]550反の輸入が初見である。その後もほぼ途切れることなく輸入され、天和元年～3年(1681～83)の記録では大羅紗[laken]・小羅紗[laken rassen]のほか各色羅紗の名称が確認できる。「亥七月店落残」では、万唐物の中に毛類とあり、『日本永代蔵』巻一ノ四<sup>5)</sup>では越後屋呉服店の品揃えの中に毛織類という語が見られる。唐物という言葉については『貞丈雑記』<sup>6)</sup>により江戸時代における意味を知ることができる。それによれば、「から織物」と「からおり」とは別で、「から織物」が「から物」に同義である。つまり、唐物(唐織物)は輸入品で、唐織は日本で織られる織物のことであるから、「亥七月店落残」の万唐物は輸入品を意味することになる。

価格については「呉服物相場書上」により、羅紗の単価が破格であることがわかる。黒小羅紗が700匁、すゝ竹大羅紗、最も安価なすゝ竹小羅紗でも550匁である。『萬金産業袋』巻之四 衣服門の唐物類では、羅紗の幅が曲尺<sup>7)</sup>で4尺1寸位～4尺3、4寸とあることから、通常の反物とは幅が異なることがわかる。

西鶴作品の中で高価な羅紗を身に着けているのは7作品中ただ1人、『男色大鑑』の太夫竹中で、白羅紗の羽織として着用している。竹中は女方<sup>8)</sup>を演じる歌舞伎若衆で、当時このような役者は社会的地位が低くてもひいきの客からの引立てもあり、金銭的にはかなり潤っていたと考えられる。また、歌舞伎役者という特別な立場を意識して自己顕示欲の強い装いを好んだ可能性もある。次に『日本永代蔵』では、三文字屋が栄えたことを示す表現として、黄羅紗や紫羅紗のほかに猩々緋の百間続きがある事を例に挙げている。猩々緋は赤色の羅紗のことで、1間あたり150匁位である。『世間胸算用』に登場する江戸の大金持ちは、芝居の棧敷を2間借り、猩々緋の敷物を敷く。この当時棧敷料は1間につき丁銀10枚(430匁)で、この江戸の金持ちは棧敷席を4日間借りるのだからそれに比べれば猩々緋の価格は大した額面ではない。全般として、西鶴作品において羅紗や猩々緋を身辺に挙げるという事は、その人物が特別に裕福で



あることを示し、限られた人物や商売に大成功した人のみが使用できた高価な輸入品であったことがわかる。この事実を間接的に示す例として、『男色大鑑』では、近年の役者が唐織と共に毛類を着ることが身の程知らずとしており、分限不相応な贅沢に対する不快感を表現しているものと読み取れる。ここでの毛類という表現は総称的で、この役者が具体的に毛類の何を着たのかは書かれておらず、羅紗や猩々緋以外に、羅紗よりも毛足の短い羅背板の可能性もある。

『好色五人女』では、毛氈や花氈の敷物を野遊びや花見の敷物として使用する様子が描かれている。このような場面は、当時描かれた風俗画にも見ることができる。景観内容からほぼ元禄6年（1693）当時の中村座の状況を描いたとされる「歌舞伎図屏風」<sup>9)</sup>を例に挙げると、歌舞伎の舞台、棧敷席、出番を待つ役者の支度部屋など、至る所に花氈や毛氈が使用されていることがわかる。屋外に設けられた席では花氈や毛氈を敷いた上で客と若衆が戯れながら舞台の方へ眼を向ける（図1）。屋内の席では、縁の手すりに花氈や毛氈をかけて芝居見物をしている人々の姿も見られる（図2）。この場面では、床に敷く敷物としてではなく、人目につくようにすることで裕福であることを象徴的に示しているように見える。先に述べた江戸の大金持ちの芝居の棧敷席もこの歌舞伎図に描かれるような華やかで贅沢なものであったに違いない。

図1 歌舞伎図屏風 部分 東京国立博物館

図 2 歌舞伎図屏風 部分 東京国立博物館

毛氈や花氈の価格については「呉服物相場書上」には記されていないが、毛氈製造の技術導入が長崎において行われたのは江戸時代後期のことであり<sup>10)</sup>、『唐船輸出入反物一覧』では毛氈[alccatief]の名称があることから、西鶴作品に描写される毛氈や花氈は輸入品であったと考えられる。いずれにしても、毛類は歌舞伎若衆や成功した商人などのごく限られた、最も裕福な人々のための染織品であったことがわかる。

## (2) 縹子

縹子は西鶴作品の中で最も多く記される織物名称である。抽出数が 20 例（表 2-2）で、次に多く描写される縮緬の 10 例に比べても抜きん出て多いことが明らかである。抽出数が端的に需要の多さを示すと捉えるのは安易であるが、当時縹子の流通量が相当量に上り、執筆者である西鶴の目に留まったと推察される。

縹子は日本において、中国の製法にならって天正年間（1573-92）に京都西陣で織られるようになったと言われている。『萬金産業袋』では、縹子は唐物類と京織物類の双方に見られ、唐物に比べ京織物類の縹子は幅・長さ・色が様々で

あるという。『唐船輸出入品数量一覧』によると、寛永 18 年（1641）の安海船や福州船の舶載品の中に、縹子[satijnen]が記されており、天和 3 年（1683）頃には黒色や白色ほか様々な縹子を数百反輸入した記録が残る。「呉服物相場書上」によると、縹子の中で最も高価なのは白縹子・茶縹子・鼠縹子で、価格は 300～350 匁である。300 匁以上となると、毛類の羅背板と並ぶ価格となる。次が黒や花色の本縹子で 230 匁は秋の価格、盆前になると 190～200 匁程度に価格が下がる。しかし「呉服物相場書上」の縹子が輸入品なのか国産品なのか判断は困難である。

西鶴作品では色縹子、鹿子縹子、縹縹子といった様々な種類が見られる。その中で、『世間胸算用』の女房家ぬしが締めるむかしわたりの本縹子の帯のむかしわたりという表現は他の縹子類にはつけられておらず、この言葉は輸入反物でも当時珍重され始めた「古渡り」の織物を示すものと思われる。贅沢な女房家ぬしらしい装いである。

次に縹子の使い道と使用者の立場を見て行く。縹子を小袖類として身につける人々は複数描かれている。たとえば、『好色一代男』の太夫高橋は三番叟の縹紋を施した白縹子の小袖、太夫薫は白縹子の袷に狩野雪信による描絵小袖を着る。美人女郎初音は、こぼれ梅の散らし文様をつけたかば縹子の中着を着る。『好色五人女』に登場する裕福な家の少女たちは、百羽雀の切付を施した鼠縹子の小袖や墨形の文様の白縹子の肌着、孔雀の切付が網の刺縹に透けて見えるように刺縹した玉虫色の縹子小袖を着る。『男色大鑑』では松嶋半弥が浅黄縹子の袷を着て、玉村吉弥は大筋の縹縹子を着る。二人とも当代きっての歌舞伎女方の役者である。非の打ちどころのない 15、6 歳の美少女は、宝尽くしの切り付けをした黒縹子の大振袖を着ている。西鶴作品では、縹子地の小袖を着るのは経済的に余裕のある立場の人物ばかりである。その上、先染めの縹子地の小袖にはいずれも、手の込んだ技法で文様が施されている。また、初音が女郎であつても高級な縹子地を身に着けることができたのは、売れっ子の女郎であつたためといえる。

縹子地の帯は贅沢なお洒落を描写するのに必須の服飾品である。『好色一代男』では、茶屋女がだてなる茶縹子の幅広帯をはさみ結びにし、15、6 歳の美しい香具売りの少年は茶小紋の小袖に鹿子模様の縹子の帯を後ろで結ぶ。媚を売るためにおめかした蓮葉女は嶋縹子の二つ割を結ぶ。『好色五人女』では、花魁を敷いて花見をするほどの贅沢な夫人が鼠縹子に丸尽くしの帯を締める。『世間胸

算用』では、贅沢な女房家ぬしが、むかしわたりの本縹子の帯をしめる。ここでは、縹子の帯が一幅で1丈2尺、一筋につき銀2枚分、当時の価格にして86匁ほどの価格であることも記されている<sup>11)</sup>。また、『西鶴織留』では、老舗店の隠居（母）が近頃の女性の浪費について語る際、縹珍や白縹子の帯、さらに茶縹子の引敷を引き合いに出し、これらが人の知らない費えであるという。身の程知らずな贅沢に対しての不満をあらわにしている。

小袖や帯以外には、『好色一代男』で御所方の女性がかぶる黒縹子のきどく頭巾や足袋が見られる。このように、高価な縹子は毛類と同様に、一般庶民にとっては到底手の届かない贅沢な織物であった。西鶴の作品中で小袖として着用できるのは、人気の歌舞伎若女方や女郎、身なりを整える美少女たちであった。当時役者の社会的地位は低かったが、それにも関わらず歌舞伎役者が縹子を身に着けられたのは、高価な素材が身分の高い人々により独占されたわけではなく、金銭的に余裕があれば着ることができたと考えられる。または、人気の役者や女郎がひいきの客から贈られた小袖を着た可能性もある<sup>12)</sup>。また、帯や足袋についても同様で、高価な縹子地を服飾品として使用できたのは経済的に余裕のある人々であった。

### (3) 紵

紵は現在一般に、生絹縹子の織物を砧でよく打って光沢を出したものとされる<sup>13)</sup>。しかし江戸時代に紵が必ずしも縹子地であったとは限らない。『萬金産業袋』では紵を光綾と表記するとあり、『訓蒙図彙』でも綾[りょう、りん]の解説において光綾こうりょうの名がある<sup>14)</sup>。

『萬金産業袋』によると国産と輸入品では幅も長さも異なり、国産品は様々な色や縹、飛び紋がある一方で、輸入品としては白紵がもたらされているという。『唐船輸出入品数量一覧』でも紵[noeme]の輸入が確認できることから、国産と輸入品が同時に存在したことは確かである。「呉服物相場書上」では紵と縹子とは別の扱いで価格も異なる。春から盆前が67、8匁、秋になると75匁で、縹子よりも一段と安価である。紅染地の紵は紅染縹子と同じ35匁である。前出の毛類や縹子ほどではないが、やはり高価な織物といえる。

『好色五人女』では年のころ34、5歳、完璧とは言えないが十分に美しい既婚女性が3枚重ねるのが白紵、浅黄紵、桃紵の小袖で、最上衣の桃紵には描絵が施されている。紵は、「呉服物相場書上」と対照すると70匁前後であったこ

とがわかる。この女性は遊女などのように客を取る仕事をしているわけではないが、一般人としては贅沢である。『好色一代男』では、茶屋女が主人公世之介に欲しいとねだるのが白紬の着るものである。『世間胸算用』の問屋の女房は、白紬の足袋をはいている。地位の高くない遊女にとってはささやかな贅沢の対象として、裕福な町人女性にとっては着道楽に欠かせない足袋の紬地があったと思われる。

#### (4) 綸子

『唐船輸出入品数量一覧』によると、綸子[peling]は寛永14年(1637)以降その輸入が途切れることが無い。輸入量は非常に多く、正保元年(1644)の98220反をピークとし、以後も毎年数万反単位の記録があることから、相当の需要があったことが明らかである。『萬金産業袋』によると、綸子は綾子とも表記し、曲尺で幅2尺、丈3丈2尺～4丈1、2尺、染色せず白色のままで輸入されていたことがわかる。

「呉服物相場書上」に記される綸子の価格は「中 八尋綸子」が春、盆前、秋でそれぞれ63匁位、65、6匁、72、3匁、小綸子が45匁である(11丁表)。これとは別項目で、紅染地の綸子についても価格が記されており、こちらは20匁から40匁の幅がある(17丁表)。その使用状況であるが、『好色一代男』の世之介は、太夫に会いに行く仕立物屋の十蔵に緋綸子の褌を与え、十蔵に会う太夫は、肌着に白綸子の小袖を着ている。仕立物屋の十蔵には贅沢すぎる褌であり、特別な客を意識する太夫の心情が白綸子の小袖に表現された場面と言える。比丘尼は布子の上から黒綸子の帯を前結びにする。太夫三笠は白綸子の腰巻をつけている。『好色一代女』では若き日の主人公が江戸詰の大名の妾候補として殿に接見する際、黒綸子に惣鹿子を施した小袖を人から借りて身なりを整える。女ざかりの過ぎた器量の悪い女性は綸子の白無垢の小袖を着ている。『男色大鑑』では、非の打ちどころのない15、6歳の美少女が、白綸子につくばらの縫いとりで紫の網を刺繍で表した豪華な帯をしめる。このように綸子も縞子と同様、下着から小袖類、帯に至るまで活用範囲は様々である。

#### (5) 竜門／龍文

西鶴作品中では竜門あるいは龍門、「呉服物相場書上」では龍文の文字をあてる。『唐船輸出入品数量一覧』に該当する表記を見出すことは出来ないが、『萬

『金産業袋』では唐物類の部に分類されているため輸入織物と考えられる。ここでは龍紋または素紬と表記し、曲尺で幅 1 尺 5 寸、長さ 3 丈 2 尺～6、7 尺迄、特徴は飛紗綾に比べ柔らかでこれに劣り、染めた際に艶が思うように出ない、と説明している。越後屋呉服店の様子を描く『日本永代蔵』巻一ノ四の記述<sup>15)</sup>からは龍門が主要な品揃えの一つ、あるいは当時一般的によく知られた織物であったことが窺える。

「呉服物相場書上」からは、龍文はほぼ年間通して 41 匁、秋のみ 43 匁であり、綸子に次ぐ価格であることがわかる。西鶴作品では、『好色五人女』に登場する男前の清十郎の不断帯、『好色一代女』では今時の遊女が好む男性の帯が薄桃色の竜門、風呂屋女も竜門の二つ割を結ぶ。このように帯地としての使用例が多いが、唯一『男色大鑑』では、男性が黒地の龍門を着用している。竜門が決して安価な品ではない理由の一つに、これが輸入織物であることがあげられる。これまで見てきたような歌舞伎役者や若くて美しい女性といった華やかな登場人物の服飾には描かれていないという傾向が見られるのは、絹織物の魅力である艶に不足しているためと推察される。この解釈は、『萬金産業袋』で龍紋を素紬と表記する点においても矛盾しない。

#### (6) 紗綾

『唐船輸出入品数量一覧』によると、紗綾[pancics、panghsis]は 1600 年代前半、綸子に次ぐ輸入量であることが分かる。1600 年代後半になっても輸入量は減少することがなく、時には綸子をしのぐ 10 万反以上を輸入している。河上は綸子と紗綾・縮緬の平均輸入量に関して、寛永 13～15 (1636～38) 年には綸子の方が多く、その後 8 年間では逆転して紗綾・縮緬が多くなったこと、その理由として日本での紗綾・縮緬の生産増加を挙げている<sup>16)</sup>が、それでも大量に輸入され続けたのは、国産品では供給が十分ではなかったためであろう。『萬金産業袋』唐物類には、唐紗綾と飛沙綾の 2 項目がある<sup>17)</sup>。「呉服物相場書上」では各種紗綾と価格が確認でき、11 丁裏では八尋中紗綾が盆前 40 匁位、秋は 45 匁位、尺長の紗綾が 3 丈 2 尺から 3 丈 7、8 尺で価格帯は季節により異なり 27 匁～39 匁である。また、17 丁表にも八丈紗綾が 18 匁、三丈物は 16 匁とある。西鶴作品においては、『好色一代女』の茶屋女の腰巻が朝鮮紗綾、これまで黒縹子の大振袖や白綸子の帯で取り上げた『男色大鑑』の美少女は緋紗綾の腰巻(二幅)を着用している。相当量の輸入があったものの西鶴作品中の染織品描写の

例は少なく、用途も服飾の主役の着物「きるもの」ではなく、腰巻であった。

#### (7) 縮緬

縮緬は独特の皺により染料の吸着性が高いため、特に友禅染が登場する 1600 年代後半になると多用されるようになり、国内でも多く生産されるようになったと言われる。しかし『唐船輸出入品数量一覧』では寛永 14 年(1637)の記録にすでに縮緬[gilem]がみられ、1600 年代前半には毎年数千から数万反単位で輸入されていたことから、友禅染が始まる以前にかなりの需要があったことが分かる。『訓蒙図彙』巻之七では穀[こく]の解説において、「こめ 皺紗<sup>しゅうしや</sup>也 今の皺紗<sup>しゅうしや</sup> 俗云ちりめん」とある。『萬金産業袋』でも、唐織物と京織物の双方に縮緬が収載される<sup>18)</sup>。「呉服物相場書上」に記される縮緬は数種類あり、それぞれの価格が設定される。5 丈 7、8 尺十広縮緬但し幅 2 尺は、春 90 匁、秋には 115 匁(11 丁裏)、紅染地の縮緬は上が 28 匁、下が 25 匁(16 丁裏)、縮緬八尋は 20 匁、三丈物は 17 匁と 15 匁(17 丁表)である。価格が著しく高い十広縮緬幅 2 尺は、『萬金産業袋』の記述から八形に相当する優品といえる。対して、安価なものは中品あるいは長さが短いためと考えられる。ところで、縮緬も襦子と同様、天正年間(1573～1592 年)に日本に伝わり、その後西陣から各地へと技法が広まったとされる。「呉服物相場書上」12 丁表には、小ちりめん(春 37 匁 5 分、盆前同断、秋 41 匁 5 分)という名称が見られ、縮緬と似通っているように思われるが、今のところ同義と実証できない。

縮緬の使い道であるが、『好色一代男』では揚屋の客の緋縮緬の下帯や太鼓持ちの男たちがかぶる白縮緬の投頭巾、大臣の卵色の小袖、『好色五人女』や『好色一代女』では妾になるための借り着に含まれる緋縮緬の腰巻、『男色大鑑』では武士の十郎右衛門が紫縮緬の引つかへし、松嶋半弥は浅黄ちりめんの帽子を被る。また、太夫藤田は白小袖の上に紫縮緬の二つかさねを着ている。『西鶴織留』では、繁昌している目薬屋が、花色ちりめんの長羽織を着ている。大臣・武士・若女方といった社会的・経済的に優位な人々はもちろん、町人層も縮緬を身に着けることができた要因として、価格帯に幅があったことが挙げられる。

#### (8) 羽二重

羽二重は経糸が密な平織物で、光沢と柔らかさが特徴である。日本の特産品として輸出されていたのは明治時代以降のことで、江戸時代前期は相当量の輸

入があった。『唐船輸出入数量一覧』では寛永 19 年（1642）の 2174 反の羽二重 [fabita] の記載が初出で、以降輸入量は毎年増え、3 年後には 19130 反の輸入があったことがわかる。その後は輸入量の少ない時期もあるが、天和 2～3 年（1682～83）頃には中国羽二重を輸入していたことが分かる。一方で『毛吹草』では京の一條の特産品に新在家 羽二重が見られ、『萬金産業袋』では京織物類に羽二重、紋羽二重、嶋羽二重についての記載があり、羽二重は幅により広、本直り、中幅、<sup>なおり</sup>直、常幅と呼んだという。

価格については「呉服物相場書上」に羽二重の記載が見られず、1 反あたりの価格は不明である。しかし『世間胸算用』巻一では、贅沢な女房が 1 反 45 匁の羽二重の生地よりも高い染賃の小袖を好み浪費する、という場面が描かれる（表 1-3⑥）。つまり『世間胸算用』が書かれた元禄 5 年（1692）当時、羽二重は 1 反 45 匁もするかなりの贅沢品であったことがわかる。羽二重の使用例としては『好色一代女』の今時の遊女が好む男性客が、千筋染の着物に黒羽二重の紋付小袖を着るという描写があり、『男色大鑑』では武士十郎右衛門が両面を黒羽二重で仕立てた小袖を着ている。また、京の若女方藤田皆之丞が、普段着に人とは違い黒羽二重に白小袖を重ね着しているという。『西鶴織留』に登場する奉公女は、肌着に京羽二重の白無垢、上に甲斐国の絹の縞織小袖を着て縞子の帯を締める。しかしこの描写は、奉公の給金（半年 50 匁）と服装が釣り合わない例である。総じて羽二重は、若女方や武士が身なりを整え、洒落た姿であることを表現する際に描かれている。

#### (9) ビロード

織物のビロードが早い時期から輸入されていたことは、現存資料から既に指摘されている。河上は南部家伝来の胴服が 1500 年代後半以降の中国製とし、これと同種の現存資料として徳川家康所用の陣羽織、加賀前田家に伝わる名物裂を挙げている<sup>19)</sup>。また吉田も、慶長遣欧使節支倉常長が持ち帰った祭服を中国製と指摘しており<sup>20)</sup>、16 世紀後半には日本に中国製のビロードが入り、少なくとも一部の支配者層の間で着用されていたことは明らかである。織物のビロード [fluweel] の名称は『唐船輸出入品数量一覧』では、寛永 16 年（1639）より見られる。それによると、種類は豊富で黒・色もの・黒縞・金入り・無地・花模様ビロードなどがあり、毎年数十～数千反の輸入があったこと、延宝 7 年から天和 3 年（1679～1683）頃には黒色のほか、毛足が長い・並・短いビロード



などが主要なものであったことがわかる。既に述べたように、『日本永代蔵』巻一ノ四の越後屋呉服店の品揃えにも天鷲絨が見え、一寸四方で売買された<sup>21)</sup>という事からここに記される天鷲絨は織物のビロードでかなりの高級品であったことが窺える。また、「亥七月店落残」の万唐物の中に「ひろうと」という名称が記されていることから、越後屋呉服店で輸入品のビロードを扱っていたことは確かである。

ビロードの名称は他に、『訓蒙図彙』巻之七の絨[じう]の解説にびろうど・天鷲絨の記述として見られ、これが毛織で細かな毛羽があることを記している<sup>22)</sup>。また、『萬金産業袋』唐物類の天鷲絨についても同様に、「細毛布とも云へし 絨一字にてもびらふど也」と解説し、唐物に比べてはるかに質が良い、という見解も示していることから、江戸時代中期頃までには国産と輸入の優れた織物が出回っていたことがわかる。

一方で、染色の「びろうど色」を示す言葉が同時期の別の文献資料に見られるのは周知の通りである。例えば、寛文6年(1666)の『紺屋茶染口傳書』上巻第二十では「ひろうとう」について次のように説明している。

したそめをこんにそめて。うへをかりやすにて五六ぺん程つけ。右とくさのことくに染申候。もしこんびろうとうといふときは。したぞめなるほどこくそめ。うは色は右之ごとくあくにてあげ申候。<sup>23)</sup>

『紺屋茶染口傳書』はその名の通り、各種染物の染法について記している文献である。この記述内容からは「ひろうとう」は染色のびろうど色を示し、下地を紺に染めた後に刈安の染料を重ねることにより染められ、「こんびろうとう」ならば下染めを濃く行う必要があることが分かる。「びろうど」を染物と捉えることのできる記述は他にも確認できる。元禄6年(1693)刊の『萬染物張物相伝』には「こんびろうどう」と「ちゃびろうどう」の染法が記されている。元禄9年(1696)刊の『當世染物鑑』にも「びろうど」の染法が記される。いずれの染法も、『紺屋茶染口傳書』と同様で、特別な地紋などのない無地染と考えられる。このような染色の「びろうど」が江戸時代前期に実際に流通していたことは今回『染代覚帳』の存在によっても明らかとなった。ここに記される「びろうど」の代金は、絹紬地の無地びろうど(上:4匁8分、中:4匁5分5厘、下:4匁3分5厘)や木綿麻布地の無地びろうど(上:3匁5分、中:3匁3分、下:2匁2

分)である。『染代覚帳』中のビロード染の価格は、「呉服物相場書上」の黒ひろうとの価格(春4匁、盆前4匁、秋4匁8、9分)に近く、安価である。つまり「呉服物相場書上」に記された黒ひろうとは織物のビロードではなく染色の「びろうど色」と考えられる。

「びろうど」の表記は小袖雛形本にも見ることができる。1600年代の雛形本では、『御ひいなかた』(寛文7年〈1667〉)「地びろうど」、『当世流行雛形(新板当風御ひいなかた)』(天和4年〈1684〉)では地色に「びろうど色」という記載が認められる。1700年代になると『雛形染色の山』(享保17年〈1732〉)で、「地びろうど」「地もへぎびろうと」など複数丁にビロード染の地色が提案され、ほか『雛形水濃色』(元文3年〈1738〉)や『雛形軒の玉水』(元文4年〈1739〉)にも「地もへきひろうと」「地もへぎびろど」「地あいびろど」等の記述が見られる。いずれも小袖の地色を示す記述であり、染色の「びろうど色」ということがわかる。現存する文献資料に収載される言葉をたどる限りでは、織のビロードから約半世紀遅れてこれを追随するように染色の「びろうど」が現れ、以後双方が同時に存在したと考えられる。

西鶴作品においては、織物と解釈できるビロードが服飾品に使用されている例は3箇所であった。卵色の縮緬で取り上げた『好色一代男』の大臣は黒いごろふくれんの羽織の裏地が縞天鷲絨、前出の『好色五人女』の34、5歳の女は、3枚の紬の小袖を重ねた上に敷瓦の折びろうどの帯を締める。『男色大鑑』では、歌舞伎若衆小瀑が天鷲兎の羽織を纏う。大臣の羽織は表地が舶来物のごろふくれんであるから、裏地にもそれにつり合う贅沢な縞天鷲絨を合わせていたと見える。また、紬の着物を3枚も重ねる女性の折びろうどの帯もそれなりに贅沢で人目を引いた織物であったに違いない。羽織の虎膚天鷲兎の表現からは、虎の毛皮のように斑紋を織り出したビロードと考えられる。西鶴作品中に描かれるこれら3種類のビロードはいずれも高価な織物のビロードのように見受けられるが、価格の検討資料としている「呉服物相場書上」の黒ひろうとは染色の「びろうど」と考えられるため、西鶴作品中の3例を価格面から検討する事が出来ない。

以上ビロードについてまとめると、江戸時代前期以降に日本に流通していたビロードには織物と染物の2種類があったことが明らかとなった。織物のビロードには国産品と輸入品があり、地質は国産の方が優れており、西鶴作品に描かれているビロードはその表現から織物のビロードと考えられる。一方で染色

の「びろうど」は、織ビロードより約半世紀遅れて、1600 年代後半より小袖雛形本や染色技法書などで見ることができる。いずれも萌黄や藍などの濃色の染であるから、高価な織のビロードの雰囲気を実似て染められるようになった可能性が高い。「呉服物相場書上」に記録された黒ひろうとはその価格から、染色の「びろうど」と考えられる。

#### (10) その他

西鶴作品中には他にも、輸入染織品と見られる名称がある。奥嶋、ごろふくれん、ちょろけん、から物、緞子などである。これらの染織品の名称は「亥七月店落残」、「呉服物相場書上」、『唐船輸出入数量一覧』のいずれかに見られるものの、価格を決める決定的な資料が揃わず、現状では考察が困難である。

#### 5. 結語

以上、『宗感覚帳』「亥七月店落残」「呉服物相場書上」と西鶴作品に共通して描かれる毛類、繻子、紬、綸子、龍文（竜門）、紗綾、縮緬、羽二重、ビロードについて、その価格と受容の面から考察した。

個々の染織品について結論を述べる前に、当時の人々の金銭感覚について実際の物価を例に挙げ指標としたい。近世は物価の相場変動が激しく、小袖など服飾品の価格となると着用者による身分の違いも影響するため、近世と現代との単純な服飾品の価格の比較は好ましくない。そこで本研究では、日本人にとって最も身近な米の当時の価格に着目することで、当時の染織品の価格が果たして高いのか、安いのかという位置づけを試みる。

江戸時代前期の物価の研究は経済史においても資料が些少であるため困難なのが現状である。そこで、『15～17 世紀における物価変動の研究』<sup>24)</sup>を参照すると、正保 4 年(1647)には米 1 石で銀 24. 5 匁である。米価に関する記述は西鶴作品に見ることができる。新米 1 石につき、『日本永代蔵』(貞享 5 年〈1688〉)巻五ノ二<sup>25)</sup>では 60 匁、『世間胸算用』(元禄 5 年〈1692〉)巻四ノ三<sup>26)</sup>では 45 匁である。わずか 50 年足らずの間に 1 石あたりの米価は 24. 5 匁～60 匁と幅があるが、この価格を一つの指標として、染織品の価格を考察することとする。

一反当たりの価格が 550 匁から 700 匁という羅紗の価格は最も高価で、当時の米 1 石につき 60 匁の相場と比較すると米約 9 石から 11 石ものの価格に相当する。西鶴作品中、羅紗を身に着けていたのは、歌舞伎女方竹中のみであった。

江戸の金持や成功した商人、裕福な女主人が敷物として使用する猩々緋は1間あたり150匁程度、価格の明らかな毛氈も輸入品であったことから高価であったと思われる。当時の商人が得た給銀の全容は明らかではないが、たとえば『宗感覚帳』に記される「褒美金」(2丁表～3丁裏)の記録より、越後屋呉服店の手代へ渡した褒美金の額面を知ることができる。これによれば、最高額は銀3貫目(3000匁)、最低額が300目(300匁)である。豪商三井家の手代として働いていても、十数石もの米価に相当する金額を猩々緋の敷物代などの遊興のみに費やしてしまうのは現実的ではない。このように、高価な輸入毛類である敷物が遊興の場面でも多く使用されており、毛類は西鶴作品にも絵画にも、“金持ち” “成功” “人とは違う華やかさ”の象徴として描かれていた。

毛類の次に高価な縹子は1反あたり190匁、最も高価なものは白本縹子の350匁で、西鶴作品の中に最も多く描かれる染織品である。西鶴作品中の縹子について国産品と輸入品の区別は困難であるが、『萬金産業袋』からは、1700年代前半までには唐に勝る優品が日本でも織成されるようになっていたことがわかった。このような縹子を小袖として身に着けることが出来たのは、太夫、売れっ子の女郎、歌舞伎若女方、非常に裕福な家の女性で、金銭的に余裕のある人々である。彼らの多くは縹子地に繡紋や描き絵、切り付けと刺繍など、手間をかけた贅沢品として身に纏ったのであった。西鶴作品では、御所方の女郎のきどく頭巾や足袋、茶屋女の帯のように服飾品の一部として縹子地を使用する様子を描くことで、贅沢感を表現している。

紵は60匁から75匁であるから当時の米1石の価格と比較しても決して安価とはいえない。『萬金産業袋』で京織物類に分類されている一方で、『唐船輸出入品数量一覧』にも記載がみられ、国産と輸入品が同時に存在したと考えられる。加えて、『訓蒙図彙』や『萬金産業袋』では紵の解説に綾の文字をあてており、江戸時代の紵が必ずしも縹子組織とは限らないこともわかった。西鶴作品では金銭的にやや余裕のある町人層が身に纏ったことが描かれているが、用例が些少であるため今後更に検討を進める必要がある。

綸子と紗綾は、どちらも国産品と輸入品の双方が多く出回っており、幅、長さ、地紋についても種類が豊富である。綸子の価格帯は20匁～72、3匁で小袖・帯・腰巻・褌として使用されていた。綸子は、客を迎える太夫の肌着や腰巻、妾になるために借り着する女性の小袖などである。縹子には到底手が届かない立場でも、綸子ならば可能であった人々であろう。そのほか西鶴作品中では綸

子の帯や褌が町人の最も贅沢に装う姿として描かれていた。紗綾の価格帯は綸子よりさらに安価で 16 匁～45 匁で、西鶴作品では茶屋女や 15、6 歳の非の打ちどころのない美少女の腰巻として使用されていた。町人層が紗綾を身に着けることができたとしても、限られた使い道であったと推察される。

竜門は現代ではなじみのない名称である。しかし西鶴作品、「呉服物相場書上」、『萬金産業袋』の記述により当時帯などに使用されていた輸入織物であったことが明らかとなった。価格は 40 匁台と決して安価ではないが、西鶴作品では衆道の通人の小袖、男性や風呂屋女の帯に竜門が使用されている。若女方や若衆、裕福な美人女性といった華やかな登場人物の服飾品として描かれることはなく、『萬金産業袋』の「素紬」や「染色後の艶に欠ける」という説明と矛盾しない描写である。

縮緬は西鶴作品の中で、大臣の小袖、太夫の腰巻、揚屋の客の下帯、太鼓持ちの頭巾、歌舞伎役者や大臣の小袖、町人の羽織など、使用者の立場や用途も様々であった。「呉服物相場書上」によれば、長さのある縮緬は 90 匁～115 匁と非常に高価で、これは縮緬の中でも優品の価格といえる。それに対し、15 匁～20 匁の安価なものもあり、この場合は明らかに中品以下あるいは反物の長さが短い場合と考えられる。様々な立場や用途の人々が縮緬を身に着けていたのは、経済状況によって上品から下品まで豊富な種類や質の縮緬から選択することができたためであろう。最も安価な縮緬であれば、経済的にゆとりのある町人層ならば入手可能な織物価格であった。

羽二重については 1600 年代前半から相当量の輸入をしていたが、早くから日本でも織られ、『萬金産業袋』からは種類も豊富であったことがわかる。羽二重の価格は「呉服物相場書上」に見ることはできないが、『世間胸算用』からは当時、羽二重が 1 反 45 匁もの贅沢品であったことが記されている。西鶴作品においては、若女方、武士、遊女好みの男性、27、8 歳の女、奉公人の女が着用しており、着用者が幅広い立場に及ぶことがわかる。しかし『西鶴織留』では、奉公で得る給金 50 匁とは釣り合わない白羽二重の肌着を着ている女性を描いており、分限相応の染織品を身に着けるべきであるとの考えが見て取れる。

ビロードは江戸時代前期に織物と染物の 2 種類が存在した。織物のビロードは毛羽があり、一寸四方で切り売りされるほどの高級品であった。また、国産品と輸入品があり、寛永期には輸入の織ビロードが日本にも入っていたこと、1600 年代後半には輸入品をしのぐ質の良い国産ビロードが織られるようにな

っていたことがわかる。西鶴作品に描かれるのはいずれも織物のビロードで、縞、虎膚、敷瓦を織り出してあることから人目を引く装いを表現している。1500年代後半に高級織物として日本に入り、はじめ武将の間で着られていた珍しい織物が、100年を経て歌舞伎若女方や町人層まで広がったと考えられる。一方で染色の「びろうど」すなわち「びろうど色」は、文献には寛文6年(1666)以降見ることができ、価格は1反当たり4匁台と非常に入手しやすい設定であった。びろうど色の染色は小袖雛形本や染色技法書の解説から、いずれも濃色の無地である。輸入品として既に存在した価格の高い織物のビロードを真似て濃色の「びろうど色」が染められるようになり、そのまま定着した可能性が考えられる。このように、これまでビロードといえば織物と解釈し、びろうど色との関連性を意識することはなかったが、本研究により1600年代に織物のビロードと染色の「びろうど色」が存在し、安価な「びろうど色」は織物のビロードに触発される形で後に出てきた可能性があることが明らかとなった。これら2種のビロード(びろうど)が以降どのような展開を見せるのか、今後の研究課題としたい。

本研究では、江戸時代前期の町人層や歌舞伎役者、太夫、茶屋女といった現存資料が残らず研究対象とするのが困難とされてきた階層の人々の服飾事情について特に経済面を通して具体的に捉えることができた。当時、毛類、繻子、紬、綿子、竜門、紗綾、縮緬、羽二重、織ビロードといった染織品は一般庶民には到底手の届かない、非常に高価なものであった。高価な染織品を敷物や小袖として贅沢に使用できたのは、裕福な夫人、歌舞伎女方、歌舞伎若衆、若衆、高級女郎である太夫など金銭的に余裕のある人々である。彼らにとっては、身に着ける染織品が輸入品か国産品ということよりも、使用する高級生地の方量の多さが裕福さを表出していた。さらに贅沢さを強調する手段として、描絵・切付・刺繍などの加飾技法が選ばれていた。高級染織品は帯や頭巾などの小物にも用いられた。井原西鶴が丹念な服飾描写を行っていることは既に認識されていることではあったが、登場人物の立場と経済状況をある程度考慮した染織品の選択が行われていたことが新たに明らかとなった。

『宗感覚帳』『呉服物相場書上』には他にも多くの染織品の名称が記されている。それらについて、今後どのように検証していくのか、新たな資料を見出すことも含めて取り組んでいくことが、当該期の染織史のさらなる解明のために課題となる。

表 2－1 選書言う品の名称と価格に関する対照表 ※原文にて記載

①『好色一代男』天和 2 年(1682)

②『好色五人女』貞享 3 年(1686)



③『好色一代女』貞享 3 年(1686)

④『男色大鑑』貞享4年(1687)



⑤『日本永代蔵』貞享 5 年(1688)

⑥『世間胸算用』元禄 5 年(1692)

⑦『西鶴織留』元禄 7 年(1694)

注) 本表は『宗感覚帳』および井原西鶴 7 作品(本文参照)より筆者作成

※表中の[染色名称をふくむ記述][用途][注目用語]は西鶴作品(本論第 1 章 注 14 〈p.19〉)から、

[対照染織品][価格]は『宗感覚帳』『呉服物相場書上』より抽出した。

表 2－2 染織品の種類と『宗感覺帳』『呉服物相場書上』の価格・『西鶴作品』の用途 対照表

※原文にて記載

注) 本表は『宗感覺帳』および井原西鶴 7 作品(本文参照)より筆者作成

※表中の染色名称は本文同様、同一の表記に改めた。

〔 〕内の服飾用語についても同様。

註

<sup>1)</sup>永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年』創文社、1987 年

舶載された寛永 14 年(1637)から天保 4 年(1833)の唐船貨物改帳と帰帆貨物買渡帳についてまとめたもので、外来染織品の詳細、輸入総量、舶載船名、反物価格を知ることができる。ただし、明らかにされている反物価格については、輸入した際の複数の評価額・売渡額が存在し、評価者も長崎奉行・町年寄など様ではないことに留意が必要である。

<sup>2)</sup>三宅也来『萬金産業袋』享保 17 年(1732)序

衣服および染織品を含む商品・製造知識全般について詳細を記した書籍。特に巻四には織物、布地、染物類、巻五には綿、呉服寸法、法被類が記される。

(田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編江戸期第 2 冊』収載、渡辺書店、1969 年)

<sup>3)</sup>小笠原小枝「近世初期風俗画に顕れたインド更紗―東洋館開館三十周年記念特集陳列から―」『MUSEUM』563 号、pp.59-73、1999 年

1600 年代初期の小袖の形状とインドネシアに伝来した完全な形のインド更紗から、若衆が着用している小袖が更紗 2 枚で作られること、また、更紗 1 反は更紗 1 枚に当たる大きさであることが明らかにされた。

<sup>4)</sup>本論第 1 章 (p.11) 参照

<sup>5)</sup>註 4 に同じ

<sup>6)</sup>伊勢貞丈『貞丈雑記』天保 14 年(1843) (『貞丈雑記 1』平凡社、1985 年)

本書は伊勢貞丈(1717-1784)が宝暦 13 年から天明 4 年の間(1763-1784)に記した雑録を、没後 60 年の天保 14 年に伊勢貞友らが編集刊行した。

<sup>7)</sup>『萬金産業袋』巻之四 衣服門 唐物類 では、長さの単位について以下の様に説明している。

「此條下に有る所の諸品な丈尺何レもみなかねざしを用ゆ 曲尺壺尺くしらさし八寸也」  
全ての唐織類について、長さについては曲尺(かねざし)を用い、曲尺 1 尺は鯨さし(鯨尺)8 寸に等しい。

同 京織物類 では、

「此條下に有物は丈尺みなくじらさしを用ゆ。但唐物に似せ和にて織所の品はかねざし之。に此▲しるし有はかねざし也」

京織物については鯨尺を使用する。但し、唐物の模倣をして国内で織ったものについては曲尺を使用し、▲印が曲尺である。

なお、曲尺 1 尺=33.303cm、鯨尺 1 尺=曲尺 1 尺 2 寸 5 分=37.9cm である。

(広辞苑第 6 版より)

<sup>8)</sup>本稿では原文および該当年代の表記に準じ、「女方」の表記を用いる。

<sup>9)</sup>「歌舞伎図屏風」(重文、17 世紀、東京国立博物館蔵)は、菱川師宣最晩年の傑作とされる。

<sup>10)</sup>「平田素子長崎唐人貿易にみる毛氈に関する研究―「唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年 復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳」「毛氈製造手続并道具繪圖」を通して」文化環境研究、長崎大学環境科学部文化環境研究会、p.40-49、2009 年

<sup>11)</sup>『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.198、校注 2、岩波書店、1960 年

<sup>12)</sup>毎日届文ひとつの山をなし、紋付の送り小袖其まゝに重ね捨し。…(中略)…高麗橋の古手屋もぬちは成まじ。

(『好色五人女』巻一ノ一、「日本古典文学大系 47 西鶴集上」p.221、岩波書店、1957 年)  
気に入りの相手に文と共に小袖を贈る慣習があったことが西鶴作品の他の場面で窺える一例である。ここでは、美男で知られる商人和泉清佐衛門が遊女から届けられた紋付の小袖を着ずに重ねている様子を描いている。西鶴はこの様子を、大坂高麗橋の古着屋でも多すぎて値段がつけれないと表現している。

<sup>13)</sup>小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』p.237 至文堂、1998 年

<sup>14)</sup>中村惕斎『訓蒙図彙』寛文 6 年(1666)7 月序

あや又今の綾子也 今按花綾 俗云紋りんず光綾 俗云ぬめりんず(巻七)

(『訓蒙図彙集成 第 1 巻』大空社、1998 年収載)

<sup>15)</sup>本論第 1 章 (p.12) 参照

<sup>16)</sup>河上繁樹・藤井健三『織りと染めの歴史 日本編』p.80、昭和堂、1999 年

<sup>17)</sup>前掲書註 2) 唐紗綾と飛紗綾については以下の通り説明されている。

○唐紗綾 花紬 紋ざやの事なり、幅一尺四寸位丈三丈二三尺より四丈のうへまでもあり、ひがき紋に菊あるひはいなづま縞も有、是をしまざやと云。

○飛紗綾 絲紬 幅一尺五寸位丈三丈一二尺、地もんあるをとびざやといひ、無紋なるを

ぬめとびといふ、白ばかりわたる。（通俗経済文庫巻 12『萬金産業袋』pp. 125-126）

<sup>18)</sup> 前掲書註 2)

○縮緬 穀、縞、紗其外字多し 上品中品しな数々有、幅二尺ぐらゐる丈段々有、三丈七八尺より四丈そのうへも有を、俗に八形といふ、三丈四五尺六尺までを九尋といふ、三丈二三尺までを八尋といふ、右三品地合はいづれにも高下有、その内八かたには地すぐれたる斗次なるはすくなし、渡る所しろ斗、但し本唐緋・唐の紛緋わたる、本緋は至極の上品はなはだ色よし（後略）（通俗経済文庫巻 12『萬金産業袋』p. 125）

○縮緬 京ちりめん二品有、名乗て京縮緬といふは、惣體皺こまかにそろひとうつくし、幅▲二尺丈五丈より六丈のうへまでも有、又京にて唐紛に織たるは、幅唐の通、しばも同前にして、八尋九尋のわかちをまで似するな、その外紋ちりめん丈六丈の内外、鐵色の島ちりめん、丈三丈二三尺等品々、逼縮緬といふは幅▲一尺二寸位、丈七丈の内外京織なり、福島縮緬といふはふくしまいとにとて織たるなり、美しけれどもつよからず。

（通俗経済文庫巻 12『萬金産業袋』pp. 128-129）

<sup>19)</sup> 前掲書註 16)P. 75

盛岡藩南部家伝来のピロード胴服は開祖である南部信直（1546～99）あるいは利直（1576～1632）の頃のものとしてされる。河上はこの南部家の胴服と徳川家康所用の陣羽織、加賀前田家の名物裂に含まれるピロードのいずれも、織成上の特徴から中国製であるとしている。

<sup>20)</sup> 吉田雅子「慶長遣欧使節請来の祭服に関して」『MUSEUM』No. 552、pp. 57-75、東京国立博物館、1998 年

<sup>21)</sup> 註 4 に同じ

<sup>22)</sup> 『訓蒙図彙』巻之七 10 丁裏「絨」

細毛布也剪絨今按俗云びろうど其美者名天鷲絨褐…（中略）…皆毛布也

（『訓蒙図彙集成 第 1 巻』大空社、1998 年収載）

<sup>23)</sup> 『紺屋茶染口傳書』上巻、寛文 6 年（1666）（後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』pp. 578-596 染織文化社、1931～1936）

<sup>24)</sup> 『15～17 世紀における物価変動の研究』、京都大学近世物価史研究会編、読史会、1962 年  
1451 年から 1650 年における京を中心とした近畿地方の物価変動が掲載され、単位が銀経済圏の「匁」であることから『宗感覚帳』（1683 年）に最も近い年代の米価を比較の対象とした。本論第 3 章ではより詳細な価格考察のため、一部抜粋し表を作成している（表 3-2）。

<sup>25)</sup> 井原西鶴『日本永代蔵』巻五ノ二、「日本古典文学大系 48 西鶴集下」p. 146、岩波書店、1960 年

<sup>26)</sup> 井原西鶴『世間胸算用』巻四ノ三、「日本古典文学大系 48 西鶴集下」p. 184、岩波書店、1960 年



### 第3章 『染代覚帳』記載の染色価格

#### 1. はじめに

本研究では『染代覚帳』（天和3年〈1683〉）に記載されている染色・加工名称について価格面に着目し考察する。これにより、あまり明らかにされてこなかった江戸時代前期最後の四半世紀、天和年間を中心とした中流・下級武士・町人といった人々の服飾に関わる事項について、その具体像に迫ることを目的とする。考察に際し、比較的近い年代に出版された小袖雛形本、染色の指南書・技法書、井原西鶴の作品、絵画資料を用いて比較検討し、『染代覚帳』の性格・役割についても明らかにしていく。これらを総合し、現存遺品の見られない天和年間頃の小袖服飾に更に近づいていく。

#### 2. 『染代覚帳』の内容

『染代覚帳』の書誌学的な見解については第1章第3項において述べ、全内容を表1-2にまとめた。表1-2では染色名称の表記については『染代覚帳』に準ずることとし、価格を表す数字は算用数字とした。また、染色名称については、本文中では必要に応じて漢字表記に改めている。尚、考察の便宜上、丁数と表裏・通し番号を新たに加えた。以下、本文中の〔 〕内の番号は表1-2の通し番号とする。

本文においてまず明らかな特色として、二部構成の本文が絹紬と木綿・麻布の部に大別されることが挙げられる。絹紬や木綿・麻布は、天和3年(1683)2月の禁令において、百姓・町人・その妻子が分限相応に着るものと定められている<sup>1)</sup>。これは最も贅沢な町人の装いでも絹紬までという制限を示した奢侈禁止令である。『染代覚帳』が写されたのはそのすぐ後（天和3年12月、天和4年1月）のため、禁令を意識した形で記された可能性がある。『染代覚帳』を詳細に研究することで、現存資料の空白期で実態が不明とされる天和期の町人層を対象とした染織史の側面が見えてくることになるのである。以下、その内容を更に詳しく見ていくことにする。

『染代覚帳』は、本文の前半が絹紬染代の部、後半が木綿麻布の部の二部構成から成り、染物商品の種類と価格が詳細に記載されている。価格については染の種類が100種類近く、これに加工賃ほかを付け加え合計120近い項目がある。染賃については各項目上品・中品・下品とし、商品レベルによる

価格の違いを記している。また、絹紬染代と木綿麻布の部それぞれの最終丁には幾種類かの染色の追加料金の名称とその代金も記されている。染物だけでもこれだけ多くの種類を扱った呉服屋となると、当時としては相当大的な規模で呉服店を展開していたと考えられる。

本文には染の代金がどの位の分量あたりなのかは明記されていないが、いくつかの理由から 1 反あたりの価格と解釈するのが妥当である。例えば、絹紬染代と木綿麻布それぞれの冒頭の数項目と途中に、染色の名称に続いて「五所紋付」[1、4、5、20 ほか]と明記されていることに着目する。通常五所紋付きとは、背中央、左右の後ろ袖、両胸に家紋が入った小袖の呼称である。紋が五ヶ所につくことで 1 着の五所紋付が完成するわけだから、この染代は 1 反あたりのものと捉えて差し支えない。また、絹紬染代の部と木綿麻布の部双方の後半を中心として「紋所 1 つニ付手間代 6 分」「御紋所 1 つニ付 代五分」など[51～53、59～63、81、82、114～117]の手間賃に関する記述がある。基本の染の代金があり、これに紋を幾つ付けるかで染代が決まるならば、1 反あたりの価格を記すことがごく自然であろう。呉服店において染屋に発注する際の参考に、または客に価格を提示する際に使用したものと推察される。

染の項目は絹紬染代で 50 項目、木綿麻布の 48 項目、計 98 項目、これに諸加工の費用が絹紬染代 8 項目、木綿麻布 6 項目、計 14 項目、更に絹紬染代の部では地質を縮緬・紬・綸子・羽二重・紗綾等に変えた場合に割増になるという価格設定[54～58]が加えられている。染色の追加料金や反物変更以外の染代に関しては、雑多に書き並べられているものの、その内容はいくつかの種類に分けられるので、以下種類ごとに大別し紹介していく。

#### (1) 小紋と五所紋付

絹紬染代・木綿麻布共にまず多く目につくのが五所紋付と小紋である。小紋に五所紋付、小紋のみ、無地に五所紋付の 3 種類が見られる。小紋に五所紋付の組み合わせは、絹紬染代の部では、地色が浅黄の濃淡（濃・中・薄）[1～3]、青茶[5]、赤・黒・茶なんきん、口めひき、すゝ竹、室まちすゝ竹、かきかへし[21～27]と種類が多いのに対して、木綿麻布の部では「きちんこもん」に五所紋[88]の 1 項目である。小紋のみの項目は、絹紬染代の部では渋茶、きちん[17、18]、紺めひき[36]、花色めひき[38]、けんふ、吉岡、茶

めひき[42～44]の 7 項目、木綿麻布の部では浅黄（濃・中・薄）、あを茶、渋茶[65～69]、もへき、せん筋つなき形[71、72]、紺めひき[97]、藍ねずみ[102]、けんほ[107]（絹紬では「けんふ」と同様と判断）、茶めひき[110]の 11 項目である。最後に無地染に五所紋付の項目は絹紬染代の部で「よし岡五所紋」[20]、木綿麻布の部で「無地紺五所紋」[64]のそれぞれ 1 項目である。

## (2) 無地染

模様をつけない単色の無地染は、絹紬染代の部では紺、花色、とくさ、中浅黄、薄浅黄、江戸茶、から茶、三ふ茶、とびいろ、びろうど、青茶、もよぎ（もえぎ）[6～14]とまとめて記載され、ほか、無地藤色[32]、あいみる茶、せんさい茶、との茶、こひ茶、くろかき、桑染[45～50]がある。計 16 項目 19 色である。木綿麻布では濃い浅黄、とくさ、中浅黄、薄浅黄[76～78]、青茶[80]、びろうど[99]、あいみる茶[105]、とのちゃ[106]、せんさい茶[109]がある。計 8 項目 9 色である。そのほか、無地と表記されていないものの無地と判断することが可能な染の名称が、絹紬染代では黒茶紺下地染[15]、梅・柿・鼠[19]、しゃれ柿・あらい柿[31]、とうろくいろ・あいしゃれ[41]、木綿麻布の部ではあらい柿・しゃれ柿[91]、梅・柿・薄浅黄・鼠色、上るり紺、中るり[111～113]である。しかし木綿麻布では薄浅黄が重複して見られる上[78 と 111]、一方が上品で 4 分、他方が上品で 6 分 45 文と異なる価格設定が存在するため、無地と表記されない薄浅黄[111]を無地とすることには多少の疑問も残る。なお、黒茶紺下地染[15]は、紺を下染した黒茶つまり藍下の黒茶である。

## (3) 特定の技法を示す染の名称

絹紬染代の部と木綿麻布の部にはしゃむろ・しもふり・染さらさという 3 種類の染色技法が共通してみられる（[28～30、33～35]および[92～96]）。しゃむろの地色は絹紬染代の部で浅黄、柿、鼠、ひわだ、もへぎ、すゝ竹、藤色、江戸茶の 8 色、木綿麻布ではすゝ竹、藤色、江戸茶、ひわだ、とくさの 5 色である。木綿麻布の部には茶むろという項目もある[90]。ちゃむろでは染色名称として意味を成さないため、これをしゃむろと解釈するのであれば、木綿麻布の部のしゃむろに浅黄・柿・鼠を加えて 8 色となる。しもふりは絹紬・木綿麻布共に下地色が鼠と柿である。染さらさはさらさ染を指し、

二重形・三重形という型に関する表記がなされているが、地色については書かれていない。また、ゆかた染は木綿麻布の部のみに浅黄地、白地、紺地がみられる[73～75]。

#### (4) その他の染色名称

上記(1)から(3)の分類に入れることができない染色名称をまとめると、絹紬染代では玉虫[37]、けんほ山鳥[39]、花色山鳥めひき[40]、木綿麻布の部では玉虫色[98]、けんほ山鳥[100]、花色山鳥めひき[101]、花色めひき[104]である。

#### (5) 染色の追加料金ほか

絹紬染代と木綿麻布の部それぞれの後半部分と木綿麻布の部中ほどに染色の追加料金と反物変更代金に関する項目がある。絹紬染代では紋所紺入[16]、かのこ付代、上小紋付代、上絵書代[51～53]、紋所一つニ付手間代、かな薄浅黄百め付、中浅黄同、同花色百目ニ付、同紺同断[59～63]、木綿麻布の部では、手綱手間入一筋ニ付、なみ手綱 1 筋ニ付[81、82]、御紋所一つニ付、かな薄浅黄百めニ付、かな中浅黄同断、かな花色同断[114～117]、ここにあげた項目は全て加工のための手間賃を記したものである。また、絹紬染代では縮緬地、絹、紬地、さらし地、縷子、羽二重、紗綾の生地を使用した場合の割増代金が記されている[54～58]。

### 3. 価格に関する考察

#### (1) 価格単位

『染代覚帳』で使用されている価格単位は「匁」「分」「厘」「文」で、これは銀貨と銭貨の使用を示している。近世社会では貨幣は金貨・銀貨・銭貨の三貨が流通していたが、関東では金を、上方では銀を使用し、これを金遣い、銀遣いと呼んだ。銀貨は取引時に計量が必要な秤量貨幣で 1 貫文 = 1000 匁、1 匁 = 10 分、1 分 = 10 厘 (10 進法) であったのに対し、金貨はそのまま使用することができる定位・計数貨幣であった。また、「文」を単位とする銭貨は主素材が銅で、1 枚 = 1 文とし、1000 枚 = 1 貫文とした<sup>2)</sup>。使用貨幣が異なると貨幣の円滑な流通に支障があったため、市中には両替商があった。冒頭でも述べた通り、銀遣いの単位で記される『染代覚帳』は上方で使われた

ことがわかる。

## (2) 染代金[染価格]の考察

価格の設定について考察を始める前に『染代覚帳』中の書き間違いの可能性について指摘しておきたい。絹紬染代・木綿麻布の部双方とも、後半の加工賃を除くほとんど全ての染物について、上品・中品・下品の3段階の価格設定がなされている。上品が3段階の中で最も良い染であるから、上品が最も高く下品が最も安い設定が順当という見方からすると、絹紬染代「紋所紺染め入」の中品に9匁5厘とあるが、上品が1匁、下品が9分であることからすると、9分5厘の書き間違いと思われる。また、「紺めひき小紋」は上品が5匁7厘では中品の5匁6分より安価になってしまうため5匁7分がおそらく正しい。木綿麻布・中浅黄小紋では上品9分、中品8分5厘であるのに下品で8匁とあるのは矛盾する。下品は本来8分が正しい価格であろう。

これらの訂正を前提として染代全体（加工賃や地質変更を除く）を改めて検証していく。表1-2で示したとおり、染代には商品レベルにより上・中・下の価格設定が成されているのだが、その価格の違いが何を基準にするものであるのか、たとえば使用する染料の質や量、出来上がりの染めむらなどによる価格設定など、可能性はいくつかあげることができる。しかし、個々の染について上品と下品の価格の差を見ると、絹紬染代では最大9分・最小1分、木綿麻布では最大5分5厘・最小900文となり、いずれの項目も上品と下品の価格の差異は染の種類による価格の差異に比べ断然小さいことがわかった<sup>3)</sup>。そのため、本稿では一律に全ての染代の上品に着目して価格の高下について検討を進める。

染代金の上品に着目し価格の高い順に並べた結果を表3-1に示した。全体的な傾向として価格の上位を絹紬が占めており、下位ほど木綿麻布地の割合が高くなる。これは地質の違いを考えれば想定内の結果である。全項目中最も高価なのは染さらさ三重形の6匁5分で、染代が6匁を超える設定は他にないことから当時特別な染であったと解釈できる。次に、5匁以上の染代は全て絹地で、順に挙げると紺めひき小紋、黒なんきん小紋五所紋、赤なんきん小紋五所紋、しゃむろ（ひわだ・もへき）、花色山鳥めひきである。絹地の小紋や小紋五所紋が絹紬染代上位の多くを占める。さて、5匁から4匁にかけては、小紋・五所紋以外では絹紬の桑染、しゃむろ（ひわだ・もへき）、

無地びろうど、せんさい茶、玉虫がある。びろうど<sup>4)</sup>やせんさい茶については『染代覚帳』より 20 年近く古い『紺屋茶染口傳書』<sup>5)</sup>において既に技法が紹介されており、1680 年代には新しい染ではなかった。それにもかかわらず上位の価格として位置づけられているのは、染料が高価・希少である、技法自体が広く知られておらず、限られた染屋で染められていた、などの理由が考えられる。しゃむろ染に関しては同じ絹紬でも地色がすゝ竹・藤色・江戸茶または浅黄・柿・鼠となると価格が抑えられるため、地色による価格の違いが如実であった。また注目すべきは、絹紬が上位を占める中で木綿麻布として最初に出てくる染さらさ三重形（さらさ染）は 4 匁 2 分で、わずかだが絹紬の染さらさ二重形の価格を上回る。さらさ染については地質よりも型の枚数が多いことに対して付加価値がついたことがわかる。

価格設定が安価な項目に注目すると、木綿麻布の部の占める割合が圧倒的に高くなるにも関わらず、絹紬染代の項目が 1 匁台前後の値で散見される。無地染（薄浅黄・梅・柿・鼠・萌黄）、小紋（中浅黄・薄浅黄・渋茶）などである。同じ地質でも価格設定に幅がある。

### （3）天和年間における『染代覚帳』の価格の位置づけ

次に『染代覚帳』記載の価格が当時の価格として果たして高いのか安いのか更に考察を進める。近世は相場がめまぐるしく変動したこともあり、現代の物価との単純な比較は本来好ましいとは言えない。相場の変動に関して、例えば米の相場について西鶴作品から例を挙げると、『日本永代蔵』（貞享 5 年〈1688〉）巻五ノ二では新米 1 石 610 目(匁)<sup>6)</sup>とあるのに対し、巻六ノ五では 45 年前には米 1 石が 14 匁 5 分の時代だった<sup>7)</sup>ということであるから、50 年を待たずして相場が 4 倍ほどに急騰したことになる。また、『世間胸算用』（元禄 5 年〈1692〉）巻四の三<sup>8)</sup>では 1 石につき 45 匁という記述も見られる。このように西鶴作品の記述からはわずかな期間でも米相場の変動が大きかった事が窺える。小袖など服飾品の価格については、着用者により身分や年齢の違いもあり、一様に相場変動を捉えることは困難である。しかしながら、物価の考察において、米のような消費生活の基本となる商品の物価と染代との単純な比較をあえて行うことでその当時における染代の位置づけを試みる。比較資料だが、貨幣・経済に関する近世の研究はかなり厚い研究蓄積がなされているものの、近世前期、特に 1600 年代後半に限っていえば考

察できる資料が殆ど残っていない。本稿では『染代覚帳』の天和 3 年(1683)に最も近い年代の物価を収録した『15～17 世紀における物価変動の研究』<sup>9)</sup>に掲載された中から 1650 年頃の各物価のなかで現代の生活にも見られる商品を中心に抽出(表 3-2)、ここに記載された価格との比較により、当時の染代について考察を行うことにする。尚、『染代覚帳』の価格に付けられた単位から、これが上方・京周辺の呉服屋で扱われたとの見解は既に示した。比較資料とする『15～17 世紀における物価変動の研究』についても京周辺の物価をまとめたものであることから、年代に多少の開きがあるものの、地域的には条件が一致するため、現段階では最善の比較資料といえる。

表 3-2 より、米 1 石あたりの買値銀 24.5 匁に着目する。米 1 石は成人が 1 年間に消費する米の量とされる<sup>10)</sup>。1 カ月あたり約 2 匁。『染代覚帳』上品でこの染代は絹紬・無地中浅黄、木綿麻布・すゝ竹五所紋などである。小袖を入手するには、染代だけでなく反物代・仕立て代がかかるので、1 カ月の米代と同等ではこれらの小袖は入手できない。ましてや染代だけで 6 匁 5 分の染めさらさ三重形など染代が上位のものは、家計にそれなりの余裕が無いと仕立てられなかったのではないかと推測される。染さらさ三重形と同じ 6 匁前後の価格では、新酒 5 匁と古酒 7 匁(1 斗あたり)が近い値である。これも個人差を抜きに考え、約 1 年分の酒代<sup>11)</sup>と解釈するならば、6 匁代から 5 匁代、それに次ぐ染代の反物は日頃の消費生活の経済感覚からすると決して安価とは言えない。以上、表 3-2 に抜粋した物価との比較考察の結果、『染代覚帳』に並ぶ染代は、日常生活に必要な物品の価格よりは高い設定であることがわかる。

#### (4) 西鶴作品による検討

更に具体的に理解する助けとして、次に西鶴の作品に描写された町人の姿から更なる一考を加えたい。西鶴の作品は、1600 年代後半当時の町人風俗や金銭感覚・嗜好を如実に捉えて描写したことで知られる。『世間胸算用』巻一ノ一では、大坂を舞台として、裕福で金に糸目をつけない問屋の女房の贅沢ぶりを次のように描いている。

ことに近年は、いづかたも女房家ぬし奢りて、衣類に事もかゝぬ身の、其ときの浮世模やうの正月小袖をたくみ、羽二重半疋四十五匁の地絹よりは、

千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一両宛出して、是さのみ人の目だゝぬ事に、あたら金銀を捨ける。帯とてもむかしわたりの本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ、小判二両のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石あたりにいたゞき、襦も本紅の二枚がさね、白ぬめの足袋はくなど、むかしは大名の御前がたにもあそばさぬ事、おもへば町人の女房の分として、冥加おそろしき事ぞかし。<sup>12)</sup>

米 1 石 40 匁・金 1 両 60 匁<sup>13)</sup>としてこの記述を解釈すると、近頃の贅沢な一家の主婦が作る正月の流行の小袖は、羽二重が 1 反分で 45 匁、贅を尽くした千草の細染が 60 匁、さらにさし櫛の 120 匁は本俵 3 石分に相当する。この女性が正月の晴れ着として用意した小袖は『染代覚帳』で最も価格の高いさらさ染三重形の 10 倍もの価格である。続いて同じく『世間胸算用』巻三ノ一「都のかお見せ芝居」では加賀藩お抱えの金春座が京で勧進能を興行した時にその栈敷料が 1 間につき丁銀 10 枚（430 匁）であるのにもかかわらず、江戸の金持ちは 4 日間 2 間分を借りた上に羅紗の敷物<sup>14)</sup>を敷き、大勢の出入りの仲間を連れての見物であったという<sup>15)</sup>。当時は 1 間につき 6 名が座ることができ、ごく普通の芝居見物は平土間なら銭 33 文であった<sup>16)</sup>というから、単純計算して 1 人の栈敷代金が 4 日で 710 匁余りとは当時の庶民感覚からかけ離れた価格であることがわかる。「江戸の金持ち」という設定自体が漠然としているが、このような金持ちにとっては『染代覚帳』にある品揃えは簡単に購入できる価格であることがわかる。

一方で、質素に生活する人々の暮らしについても多くの記述を見ることが出来る。『日本永代蔵』巻六ノ五「智慧をはかる八十八の升搔」では、当時の大坂での庶民の生活が少しずつ良くなる様子を詳しく描いている。

・・・江戸・大坂のはしゞゝ、明地・野原まですこしの明所もなく、人家に立つゞき、何して世をわたる共見えねど、五人・三人の子供に正月きるもの綿入て、盆は踊ゆかたも拵へ、はしがの子の後帯ひとしほ身よげなり。亭主は日用とり、或は釣瓶縄屋、または童子すかしの猿松の風車をするなど、やうゝゝ 1 日に、丸とりにしてから三十七八文・四十五六文、五十迄の仕事するかせぬうちにて、四五人口を過て、いづれも身のさむからぬは、是みな母のはたらきなり。同じ五人口にて、一日に三匁五分づゝ入るも有、又は六匁



づゝ入もあり。世帯の仕かた程、格別に違ふ物はなし。人の渡世はさまゝゝに替れり。<sup>17)</sup>

今の世の中が昔に比べて楽になり、京に限らず、江戸や大坂に至るまで人家が立ち並び、子供たちの正月の着物は綿入れを、盆には踊ゆかたも拵えることができる程度には生活が上向いたようである。そして一家の主人は1日に37、8文から50文ほどの仕事をして家族4、5人暮らしの生計を立てられるようになったとしている。1カ月30日で換算すれば、1カ月につき11匁から15匁の収入があり、この範囲で家族4、5人暮らしができたのである。『世間胸算用』巻三ノ三「小判は寐姿の夢」では、「雲つくような食たきが、布迄織まして半季が三拾貳匁<sup>18)</sup>」とあり、力がありよく働ける大女（食たき）が木綿布まで織って半季で32匁の給金を受け取るのだという。半季とは半季奉公の略で、半年を契約期間として奉公することを言うので奉公6カ月で35匁つまり1カ月に換算すれば6匁にも満たないため、『染代覚帳』の中でたとえば6匁を超える更紗染のような価格が上位のものは、入手困難であったと考えられる。

#### 4. 結語

本章では、『染代覚帳』の内容について、各項目の把握を行い、記載された価格が天和年間当時にとってどのような位置づけであるのかを、西鶴作品などに描かれる物価や給料などを通して考察した。

『染代覚帳』は価格単位が銀貨使用の「匁」「分」「厘」「文」であることから上方で使用されたことが明らかである。絹紬染代と木綿麻布について収載された染色価格を高い順に並べた結果、絹紬染代の染さらさ[更紗染]三重形の6匁5分が最も高価であった。全体的な傾向としては価格の上位を絹紬が占めている。しかし、染代が6匁を超える反物は他にないことから、当時特別な染であったと解釈できる。この、6匁5分という染代が日常生活において果たして高価であったかどうかであるが、米1石あたりの買値銀24.5匁や新酒5匁・古酒7匁（1斗あたり）と比較すると決して安価とは言えないことがわかった。

西鶴作品との比較では、江戸の大金持ち（芝居小屋での出費）、問屋の女房

（服飾代金）、大坂庶民の生活費（日雇いの給料）、働き者の食たき女（奉公の給金）の4例を取り上げた。江戸の大金持ちの桁外れな豪遊や問屋の女房の贅沢ぶりは、一般庶民の生活からは想像もつかない金銭感覚の世界である。そのような彼らにとって、『染代覚帳』の価格設定は非常に安価なもので、決して負担を感じる額面ではない。一方で、家族4、5人で1カ月15匁未満の収入で暮らす庶民層や半季奉公で1カ月につき6匁未満の稼ぎの女性にとっては、『染代覚帳』の価格は決して安くはない。むしろ贅沢なものであった。しかし絹紬地の小袖を正月などの晴れ着用で購入する程度の贅沢であれば、決して不可能ではなかったことが伺える。また、奉公などに出る人々は、勤め先の主人からお仕着せを与えられて着用した可能性も考えられる。このように西鶴の作品からは、生活水準の大きな違いが具体的な価格を通して垣間見ることができた。

以上より、『染代覚帳』は、支配階級の武家層や富裕町人階級よりもむしろ、中流から下級武士、町人、職人層および一般町人女性など幅広い中間層が着用した呉服関係の染色資料と位置づけられる。

表 3－1 『染代覚帳』 価格の考察

※原文にて記載

注) 本表は表 1－2 をもとに筆者作成

表中の染色名称は本文同様、統一の表記に改めた

表 3－2 今日を中心とする 1650 年頃の物価表(『15－17 世紀における物価変動の研究』より抜粋)

※原文にて記載

注) 本表は『15－17 世紀における物価変動の研究』より

筆者作成

註

1) 天和三年亥年二月 町中之者共衣服之儀御触書

百姓町人之衣服、絹紬木綿麻布、以此内、応分限、妻子共ニ可着用之事

(『徳川禁令考』前集第 5、pp.355~356、創文社、1959 年)

- 2) 中田易直「近世貨幣の基礎知識」『歴史教育』、13 卷第 10 号、日本書院、1965 年参照
- 3) 上品と下品の価格差については全ての染代について(上品)-(下品)の式により算出した結果をもとに検討している。
- 4) びろうどについては第 2 章第 3 項 (9) にて詳しく考察した。
- 5) 『紺屋茶染口傳書』寛文 6 年 (1666) (後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』染織文化社、1931~1936 において、「せんさいちや」については p.584、「びろうとう」については p.586 に記されている。)
- 6) 『日本永代蔵』巻五ノ二『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.148、岩波書店、1960 年
- 7) 『日本永代蔵』巻六ノ五『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.184、岩波書店、1960 年
- 8) 『世間胸算用』巻四ノ三『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.281、岩波書店、1960 年
- 9) 『15~17 世紀における物価変動の研究』京都大学近世物価史研究会編、読史会、1962 年

掲載されている物価は 1451 年から 1650 年に至る 200 年間の京都を中心とした近畿地方の物価変動である。表 3 作成に際し、山椒、胡麻、生姜といった香辛料・蠟燭・炭・柴などの単位売りや、現代の消費生活において使用料が想定しにくいものは省いた。

- 10) 1 石=10 斗=100 升=1000 合。1 升=1.8039L より、1 石=180.39L1 合を 1 食とする場合、成人が 1 年間に消費する量を 1 石とした。
- 11) 1 斗=100 合、1 合=180ml より、3~4 日に 1 合と換算すると 1 斗はおおよそ 1 年分にあたる。
- 12) 『世間胸算用』巻一ノ一『日本古典文学大系 48 西鶴集下』pp.197-198、岩波書店、1960 年
- 13) 『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.512 (補注 315)、岩波書店、1960 年
- 14) 羅紗(毛類)が当時最も高価な染織品であったことは、第 2 章第 3 項 (1) の毛類の考察において詳述している。
- 15) 「・・・江戸の者、われひとり見るために銀十枚の棧敷を二軒とりて、猩々皮の敷もの、道具置の棚をつらせ、・・・(中略)・・・医者・ごふくや・儒者・唐物屋・連歌師など入まじり、・・・(中略)・・・此人大名の子にもあらず、只金銀にてかく成事なれば、何に付ても銀もうけして、心任せの慰みすべし。」  
(『世間胸算用』巻三ノ一『日本古典文学大系 48 西鶴集下』pp.245-6、岩波書店、1960 年)

檜谷昭彦「〈付〉近世の貨幣と物価について」『西鶴選集 世間胸算用 翻刻』p.176、おうふう、1993 年

- 16) 註 15 檜谷氏前掲論文
- 17) 『日本永代蔵』巻六ノ五『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.185、岩波書店、1960 年  
本文中では繰り返しの記号は「く」であるが、本論は横書きのため「ゞ」と記した。
- 18) 『世間胸算用』巻三ノ三『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.256、岩波書店、1960 年

## 第4章 『染代覚帳』記載の染色名称

### 1. はじめに

『染代覚帳』（天和3年〈1683〉）については第1章第3項において書誌学的検討を行い、第3章ではその内容を大別して紹介し、主に価格について考察した。本研究では『染代覚帳』に記されている染色・加工名称について考察することで、江戸時代前期の小袖服飾に更に近づくことを目的としている。

考察に際し使用する資料は、『染代覚帳』と比較的近い年代に出版された染色の指南書・技法書、井原西鶴の作品、絵画資料、江戸時代前期の小袖雛形本（表1-6）である。

### 2. 五所紋付、小紋、小紋五所紋

#### （1）五所紋付と小紋

五所紋付はもともと、武家の間で袴下である小袖に付けられていたが1600年代後半には徐々に裕福な町人階級に広まっていたものと思われる。井原西鶴の『日本永代蔵』（貞享5年〈1688〉）巻五ノ二「世渡りには淀鯉のはたらき」では、山城の淀の里で親の代から油屋をしていた男がついに両替屋の店を出したその時の様子を次のように描いている。

・・・あまたの手代を抱へ、・・・(中略)・・・風俗も自から都めきて、新在家衆の衣装をうつし、油屋絹の諸織をけんぼう染の紋付、袖口薄綿にしてみつ重ね、小妻高からず裾長く、同じ羽織ゆたかにみえて、歴々とはいはでしける。<sup>1)</sup>

油屋絹とは室町通鯉山町の羽二重大坂呉服問屋油屋太兵衛方から売り出した絹物で、諸織すなわち経緯共に諸撚りの生糸で織った最上級の羽二重を憲法染にした紋付羽織を裾を長く着流して<sup>2)</sup>、いかにも金持ちを示す当時流行の着こなしをする姿には紋付が不可欠であったことがわかる。ここでは、商売に成功してある程度裕福になった町人が、紋付きの羽織を着用する姿が描かれている。憲法染は吉岡憲法が始めた黒茶染で、吉岡染ともいわれる<sup>3)</sup>。『染代覚帳』には「よし岡五所紋」の項目があり、これは黒茶色地に白上げの五所紋付を指すため、西鶴作品中の紋付と同等の商品であることがわかる。

次に小紋について考察する。小紋とは、紙型と糊防染による型染めをさす。型染にはいくつかの種類があるが、その名の通り特に小さな文様染を「小紋」と呼ぶ。狩野吉信によって描かれた「職人尽絵<sup>4)</sup>」において型付職人の姿が見られることは周知の通りで、天和期においては既に人々の間でよく知られた文様染だったことは間違いない。また、桃山時代の肖像画「西谷藤兵衛像<sup>5)</sup>」は浅黄地に小紋の肩衣袴を着けた姿として年代のわかる最も古いものである。武将が着用した実物資料では、上杉謙信所用の小紋帷子<sup>6)</sup>が最も古く、次いで豊臣秀吉所用と伝えられる小紋胴服<sup>7)</sup>や徳川家康所用の小紋胴服<sup>8)</sup>などがある。いずれも桃山時代から江戸時代初頭のよく知られた武将が所用した作例である。ところが江戸時代前期頃、およそ元禄期ごろまでとなると、小紋の現存資料はごく限られ、細川忠利所用の袷や単衣<sup>9)</sup>、徳川綱吉の袴<sup>10)</sup>などわずかな例があげられるのみである。

残された紙型の研究も進められている。紙型の中には紀年銘が記されているものも存在する。例えば最も古いとされる鈴鹿市所蔵の伊勢型紙は元禄 5 年（1692）の紀年<sup>11)</sup>で、小紋に通じる細かな文様で斜め筋の文様である。ほかにも元禄（1688～1704）頃、正徳年間（1711～16）頃の紙型<sup>12)</sup>も数は少ないが現存する。

これらの染織資料と現存する紙型、文献などから、先学の諸氏により様々な見解が示されてきた。まず小紋を早い時期に身に着けたのは、現存資料の存在から武士の中でも支配者層に当たる一部の武将であった。小紋が極小さを強めていったのが江戸中期に当たる正徳頃<sup>13)</sup>、袴に小紋染が用いられるようになったのは宝暦（1751～64）の頃<sup>14)</sup>、さらに江戸後期、寛政（1789～1800）になると裕福な町人階級の間でも小袖や羽織に小紋を染めることが流行した、などである<sup>15)</sup>。現存資料がほとんど見られない江戸時代前期の小紋と町人との関わりについて、長崎は、江戸時代前期から男性の袴や小袖、羽織、下着に広く用いられていたこと、略服として男性に用いられていた小紋や縞が、宝暦頃に女性にも用いられるようになり、江戸後期には女性の小袖に用いられるようになったと述べている<sup>16)</sup>。

以上、ここにあげた実物資料（染織と紙型）・絵画・先行研究を把握したうえで、『染代覚帳』に小紋が多く記載されている意味を改めて考察する。まず時期的な問題だが、『染代覚帳』が書かれた天和 3 年（1683）当時は前述した中でも現存資料の少ない江戸前期にあたる。しかし『染代覚帳』の全 98 項目のう



ち、三分の一近い 31 項目が小紋であるところからすると、現存資料が少ないことがそのまま需要が少なく小紋が生産されなかったとは言い難い。また、町人が小紋を身に着けるようになったのは江戸時代後期とする考え方に疑問を抱かざるを得ない。なぜなら、『染代覚帳』よりも更に十数年遡る『紺屋茶染口傳書』下巻（寛文 6 年〈1666〉）には、つねの茶小紋、みる茶小紋、きがらちや小紋ほか十数種類の小紋の名称が見られるためである<sup>17)</sup>。

では同時期の西鶴作品中において、小紋はどのように描かれているのだろうか。『好色一代男』（天和 2〈1682〉）巻二では「との茶小紋の引かへし」<sup>18)</sup>、巻七では「浅黄のあさ上下に茶小紋の着物、小脇差の仕出し、常とはかはり少し知恵の有やうにして、此世の人とも思はれず。・・・」<sup>19)</sup>とし、通常とは異なり頭が良さそうに見える身なりが浅黄の麻袴の下に小紋の小袖姿だという。また、『日本永代蔵』巻五ノ三では形見分けの内容を示す記述の中に「・・・吉野の下市に住し弟の方へ、三星小紋<sup>20)</sup>の布子にもじの肩衣、是をおくるべし。<sup>21)</sup>」とあり、木綿の綿入れに三星の小紋がほどこされていることがわかる。同じく巻五ノ五では「世は何染・何嶋が時花共かまはず、浅黄の七つ星小紋に黒餅、着物は花色より外は、紅葉も藤色もしらず、・・・<sup>22)</sup>」とあり、質素な商人が流行に左右されずに着る物を身に着ける姿として、七つ星小紋に黒い円形の餅紋の小袖をあげている。これら西鶴作品から導かれる小紋の着用者層については、小紋の小袖を麻袴と組み合わせて着られるような裕福な町人層から、形見分けとして小紋の木綿の綿入れを大切に扱う質素な人々までと幅がある。

前述の『紺屋茶染口傳書』と『染代覚帳』、西鶴作品を通じて導かれるのは、江戸時代前期に多くの小紋が既に町人の間でも着用されていたという見解である。小紋の人気はこれまで言われてきたように江戸時代中・後期から一気に高まるのではなく、江戸時代前期から中・後期を通じて需要があり、供給されていたと考えられる。

## （２）風俗画による検討

五所紋付や小紋の着用者を巡り、次に絵画に注目し、『染代覚帳』に記載された五所紋付・小紋・小紋五所紋がどのような人々に着用されているのか、同時期の風俗画に描かれる服飾を見て行くことにする。描かれた服飾が果たして実存したものであるか否かという議論は常に起こることであるが、一方ではその時代や染織品の特徴をかなり忠実に描いているとの研究もすでに示されてきた

23)。そこで本研究では、景観年代や制作年代が一致するのであれば、服飾においてもおよそその時代性を表すことを前提とし、『染代覚帳』と同時期・同地域の絵画との検討を試みる。既に筆者は 3 章で、『染代覚帳』に記された貨幣単位などからこれが上方で使われた江戸時代前期の資料であるとの考えを示した。そこで京を題材とした「都鄙図巻」（興福院蔵）と「洛中洛外図巻」（東京国立博物館蔵）を検討資料として取り上げる。いずれも伝統的な絵巻形式の画面に、京の公家屋敷、武家屋敷、町並みを描き、職人の姿も描かれる。その落款や印章、独特の画風から住吉具慶<sup>24)</sup>の最晩年、元禄（1688～1674）頃の作といわれている<sup>25)</sup>。

まず五所紋付を見て行く。「都鄙図巻」では、屋敷内での作業に従事する武士が袴下に黒や茶の五所紋付の小袖を着用している（図 1）。扇屋で品物を選ぶ武士（図 2）や文使いをする下僕（図 3）も五所紋付の小袖姿である。「洛中洛外図巻」では、連れ立って歩く二人の人物（図 4）のうち一方がやや色白で、袴下に五所紋付、足袋と草履を履き太刀を帯びていることから、やや身分の高い武士であることがわかる。下僕と見られる伴の男性も五所紋付の小袖を纏う。これらの武士や下僕が着用する五所紋付は、総じて黒を中心とした濃色地に白抜きで描かれている。五所紋は防染による白上げとみられ、『染代覚帳』絹紬染代の部「よし岡五所紋」がこれに相当すると考えられる。

五所紋付の小袖を着ているのは武士ばかりとは限らない。「都鄙図巻」では人形師（図 5）、「洛中洛外図」では呉服屋で煙管を片手にくつろぐ男（図 6）、楽器屋で琴を扱う男（図 7）、酒屋の主人（図 8）、本屋で製本作業する男（図 9）、弓師（図 10）、盲目の三味線弾き（図 11）など、五所紋付の小袖を着用する人物は多く描かれている。「都鄙図巻」では、儒者らしき人物の黒地の羽織の背に紋所が一つ見える（図 12）。武士だけでなく町人や職人層、儒者などの人々が白上げの紋付を着用していたことがわかる。ただし町人や職人層の小袖の地色は武士のような黒地などの濃色地に限られたものではなく、また、紋所は武士の小袖につけられているものより幾分大ぶりに描かれていることが多い。

次に小紋に五所紋が付いた小袖（小紋五所紋）を着用する人物を見ていく。「都鄙図巻」では図 1 と同様、屋敷内で立ち働く武士の小袖が小紋五所紋である（図 13、14）。小袖により五所紋の描き分けが成されているのと同様、図 14 の武士の小紋は松葉模様までもが丁寧に描写されている。「洛中洛外図巻」では、呉服屋の二階でくつろぐ儒者（図 15）、腰に楽器のようなものを差し、笠を被

図 1 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 2 同 部分

図 3 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 4 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 5 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 6 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 7 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 8 同 部分

図 9 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 10 同 部分

図 11 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 12 都鄙図巻 部分 奈良・興福院



図 13 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 14 同 部分

図 15 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 16 同 部分

図 17 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 18 同 部分

った男（図 16）、本屋（図 17）、冠師（図 18）の小袖も小紋五所紋である。ただし図 18 の五所紋付に関しては、武士の小袖に見るような白抜きの紋所ではなく、その表し方から、描き、繡、型染ならば摺り込みといった技法によりつけられた後づけの紋とみられる。『染代覚帳』絹紬染代の部には「紋所紺染入」の項目がある。これは白抜きの紋ではないことから、町人や職人層の小袖に施された可能性がある。小紋は小袖だけでなく紋の入った肩衣にも使用されていることも確認できる（図 1、図 13）。

『染代覚帳』の品揃えから自分の小紋五所紋の小袖を注文するには、絹紬染代中の小紋五所紋を選ぶ、好みの小紋と紋を組み合わせで選ぶという 2 通りの方法が考えられる。また、肩衣用の小紋五所紋を注文するには、木綿麻布の部の小紋を選択し、加工賃から「御紋所一つニ付」の手間賃を必要に応じて支払えば良い。紋所を追加する注文については、無地染めの小袖に紋所を付ける場合も同様の注文で可能である。絵画において描かれている五所紋付や小紋の種類と組み合わせの豊富さは、『染代覚帳』の品揃えの豊富さと別途加工を注文できるというしくみがあることにより説明できる。「洛中洛外図巻」の型染屋では染め終わった反物が干してあり、そのうち一枚が赤系の地色に白い紋所が染め抜かれていることがわかる（図 19）。客が呉服屋で注文し、これが染屋で繁荣されていることを伺わせる一場面である。

図 19 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

紋所の付かない小紋の小袖も見られる。「都鄙図巻」では羽織屋の男性が浅葱地の小紋（図 20）、「洛中洛外図巻」では若衆（図 21）や仏師（図 22）などが着用している。ここで確認できる限りでは、描かれている小紋は総じて、地色が茶・黒・緑・青などの暗色系であり、これは『染代覚帳』に記載される小紋の色合いとも一致する。暗色系の地色の小紋が江戸時代後期に江戸を代表とする「粋」の文化として好まれたことは盛んに言われてきたことである。しかし本研究では、現存資料として残されることがほとんどない、中流から下級武士、町人、職人層において、暗色系を地色とする小紋が 1600 年代後半にすでに上方で着用されていたことが明らかとなった。ただし、『染代覚帳』、西鶴作品、そしてこれらの絵画に描かれる人々の着用する小紋は、大名家伝来の室町から桃山時代の精緻な小紋に代表される作例とは隔たりのある、より素朴な小紋の可能性はある。

図 20 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 21 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 22 同 部分

ここまでは様々な身分の男性の姿であったが、一方で女性の小袖についてはどのように描かれているのだろうか。身分と小袖の装飾性の関連性について分かりやすい例が「洛中洛外図巻」中にある。武家の子女あるいは裕福な町人女性と思われる身分の高い女性が二人のお伴を従えて歩く姿である（図 23）。主人である色白の女性はこの時代特有の模様小袖、いわゆる寛文小袖を着用している。目にも鮮やかな小袖を纏い、被衣をかぶる。そのすぐ後ろの女性は、手に風呂敷包みを持ち主人に従う。眉を剃っているのが既婚女性と見られる。この女性の小袖は、山吹色地で裾に何本かの白い筋模様が斜めに入り、背中と右袖後ろに桜の紋所が黒く入る。描かれている 2 つの紋の位置から、五所紋付であることは容易に想像がつく。3 番目に歩く女性は縞模様の小袖である。3 人の女性の小袖のうち、『染代覚帳』の染色名称に該当するのは 2 人目の紋所入りの小袖である。最も贅沢な模様小袖でも縞模様の小袖でもない。「都鄙図巻」でも、紋所入りの小袖を着た女性の姿が描かれる（図 24）。小袖の地色は薄い水色で、藍色の大ぶりの紋所が付く。また、「洛中洛外図巻」では、女性が明るい色のよろけ縞様の地模様の小袖にやはり大ぶりの「梅」の文字紋を配したものを着用している（図 25）。この二人の女性の小袖の紋所は、前述の図 18 と同じく描き・繡・型染ならば刷り込みの技法により表されたものと考えられる。そして図 25 の女性が着る小袖の地色は暗色系ではなく、図 26 のように薄鼠色地の小紋小袖を着用した女性も見られる。このように、男性に比べ紋付小袖や小紋の小袖を着用する例は断然に少ないが、五所紋付や暗色系の地色の小紋を男性に限らず女性も着用していたこと、身分が決して高くなくても明るい色目の小袖を着用した例もあったと考えられる。

以上、「都鄙図巻」「洛中洛外図巻」に描かれる五所紋付・小紋・小紋五所紋について得られる見解をまとめる。まず、五所紋付や小紋五所紋の小袖は、1600 年代後半に武士に限らず町人層にも確かに着用されていた。ただし武士や下僕の五所紋付は総じて黒を中心とする濃色地の小袖に白抜きで表現されている。白抜きの五所紋付は町人・職人層も着用しているが、小袖の地色が武士層ほどには限られていない。次に、職人男性の一部や女性の五所紋付はその描き方から後付けの紋所であることが分かる。技法の可能性としては、描き・繡・型の摺り込みがあげられる。また、武士層よりも町人男女の小袖の五所紋は総じて大ぶりに描かれている。最後に小紋については着用者層が武士・町人に加え、女性にも広がりがあることが分かった。つまり、江戸時代前期に小紋の小袖が

男性対象であり江戸時代後期になり女性を含む町人の間で着用されるようになった、という従来の考え方を再考する必要が出てきた。またこれらの見解から『染代覚帳』の品揃えは、中流から下級武士・町人男性、更には女性を含む幅広い着用者層を想定していたことが導かれる。ただし、西鶴の『世間胸算用』（元禄 5・1692 年）の記述<sup>26)</sup>から、当時は手代や下僕などの使用人が自前の衣服でなく与えられたお仕着せを着る習慣も存在したことがわかるため、購入した客自身が着用しなかった可能性があることも否定できない。

図 23 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館



図 24 都鄙図巻 部分 奈良・興福院

図 25 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

図 26 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

### 3. 『染代覚帳』の地色の考察

#### (1) 『染代覚帳』の無地染の名称

『染代覚帳』に表れる無地染めの名称（憲法染、紺、花色、とくさ、浅黄、江戸茶、から茶、とびいろ、びろうど、青茶、三ふ茶、もへぎ、桑染、藤色、あいみる茶、せんさい茶、との茶、濃茶、柿、黒柿、梅、鼠、るり紺、あらい柿、しゃれ柿、すゝ竹、るり）の中には、現代では馴染みの薄い染色名称が見られるが、その多くは当時の染色技法書で同じ名称または染法を確認することができる。

せんさい茶、とびいろ、とくさ、とのちゃ、びろうどの染法は『紺屋茶染口伝書』上巻（寛文6年〈1666〉）に記されている。『當世染物鑑』（元禄9年〈1696〉）には「ひろうと」<sup>27)</sup>のほか「桑染」についても記されていることが確認できた。ほか、とびいろ、とくさ、との茶についても同様に詳しい説明がなされている。憲法染は『毛吹草』（寛永15年〈1645〉）の山城の項に「吉岡染憲法染」とある。また、『紺屋茶染口伝書』上、第十七では「けんぼう」、第二十三では「けんぼう よしをか家口伝」の2項目があり、それぞれ染法が説明されている<sup>28)</sup>。『當世染物鑑』では下染が紺であるところが『紺屋茶染口伝書』と相違点で、染法はやや簡略化したものとなっている<sup>29)</sup>。また、『雍州府志』（貞享元年〈1684〉）巻七、土産門下（服器部）吉岡染では、京都西洞院四條の吉岡憲法という人物が黒茶色の染を始めたために吉岡染というようになったこと、つまりこれを憲法染とも呼ぶということなどが記されている<sup>30)</sup>。

#### (2) 『染代覚帳』と小袖雛形本の比較考察

次に『染代覚帳』の全ての染色名称を対象とした地色について考察していく。

筆者は第3章において、『染代覚帳』が中流から下流武士・町人・職人層および一般町人女性といった中間層が着用した小袖服飾に関する呉服屋資料である可能性を指摘した。一方で、小袖雛形本は第1章第5項で述べた通り、武家や富裕町人階級が呉服屋での注文の際の見本帳として、または単純に見て楽しむファッションブックとしての役割もあった木版刷りの本である。そこで使用者の社会的地位が異なる2種類の資料、『染代覚帳』と江戸時代前期刊行の小袖雛形本（表1-5）について染色名称に注目し、相違点・共通点を見出すことにより、『染代覚帳』の特質をより詳しく捉えていく。小袖雛形本に見られる染色名称に注目した研究としてはこれまで、長崎による小袖雛形本の地色の色彩

傾向の研究<sup>31)</sup>や、河村・吉中による小袖雛形本の色彩・文様研究<sup>32)</sup>があげられる。しかし前者は江戸時代前期から後期前半にかけての地色の変遷に焦点をあてたものであり、後者は江戸時代中期以降を研究対象としたものである。よって江戸時代前期の小袖の地色に限定した小袖雛形本と呉服史料『染代覚帳』との比較は新たな試みである。

小袖雛形本と『染代覚帳』を取り上げるに際し、留意すべき点がある。第一に、小袖雛形本については、出版された地が江戸や京とばらつきがあるのに対し、『染代覚帳』は上方で使用された資料ということである。第二に、小袖雛形本は例えば『源氏ひなかつ』のように物語の登場人物に模様小袖を纏わせた頁を設けるなど、場合によっては読み物としての性格が強いものもあるが、『染代覚帳』は現実の呉服資料であったという点である。また、上述の通り対象とする使用者層の違いもある。しかし、たとえこのような資料の位置づけの相違が見られても、当時存在した染色技術については対象を限定的に問うものではない。また、小袖雛形本に記載された染色名称が『染代覚帳』に含まれていれば、実際に存在した染色技術の指標として捉えることも可能となる。

実存する染色名称に関する文献としては、『染代覚帳』のほかにも染色技法について紹介した文献が多少残っている。本章では『毛吹草』、『紺屋茶染口傳書』（寛文6年〈1666〉）、『女重宝記』（元禄5年〈1692〉）といった1600年代後半を中心とする染色技法書・指南書を『染代覚帳』と同様、実存の染色名称を示す資料として随時参照する。

## （２）－１ 『染代覚帳』と小袖雛形本の系統色

ここでは無地染に限らず、『染代覚帳』と小袖雛形本に記載された全ての染色名称を対象として地色の傾向を見ていく。まず、『染代覚帳』を絹紬染代と木綿麻布の部に分け、小紋五所紋・小紋・五所紋・無地・しゃむろ・しもふり・ゆかた染・さらさ染・技法不明の項目に分け、これらを五十音順に並べた結果が表4-1である。

次に小袖雛形本の染織名称を抽出する。表1-5に示した研究対象の小袖雛形本9種類の記載事項（文字資料）をまとめた表1-6①～⑨から、染色名称の記述を全て抜粋した後、同一の文献で染色名称が重複するものを割愛し、全ての染色名称を五十音順に並べた（表4-2）。

表 4－1 『染代覚帳』の地色と技法の分類 ※原文にて記載

註) 本表は『染代覚帳』一覧(表 1－2)より筆者作成

表 4－2 小袖雛形本の染色名称一覧（五十音順） ※原文にて記載

註）本表は表 1－6 より筆者作成

## (2) - 2 『染代覚帳』と小袖雛形本の色系統の比較考察

前項で作成した表 4-1 および表 4-2 をもとに、色系統を基準に分類し対照すると表 4-3 の通りとなる<sup>33)</sup>。

『染代覚帳』の無地染を系統色で分類すると、多い順に茶系統(せんさい茶・とびいろ・江戸茶・唐茶・藍みる茶・との茶)、青系統色(びろうど・浅黄・花色・るり)、橙系統(柿・あらい柿・しゃれ柿)、緑系統(萌黄・とくさ)、黒(憲法染・黒柿・黒茶紺下地染)、紫系統色(藤色)、鼠系統(鼠)、赤系統(梅)となり、黄系統色は見られなかった。

小袖雛形本の系統色数が『染代覚帳』の系統色数を上回るのは、基本となる資料の数異なるため当然の結果であり、ここでは両資料の系統色数については重要視しない。しかし本研究において『染代覚帳』の色系統と『小袖雛形本』の色系統を比較して新たに明らかとなるのは、小袖雛形本において見られる赤・黄系統色および白の地色が『染代覚帳』には見られないということである(表 4-3 参照)<sup>34)</sup>。すでに述べた通り、小袖雛形本は武家や富裕町人階級を対象とした資料であるのに対し、『染代覚帳』は中流から下流武士・町人・職人層および一般町人女性を対象とした内容であることから、赤・黄系統色を染め出す染料は貴重で高価なものであった。赤や黄色系統、白い地色の小袖は、身分の高い人々または経済的に余裕のある人々に着用された可能性が挙げられる。

橙・緑・青・紫系統色については、表記に仮名や漢字の違いが認められるものの、ほぼ同じ色名が揃う。茶系統色が他の系統色に比べ格段に色数が多いことについては既に先行研究で指摘されている<sup>35)</sup>が、本研究の比較では茶系統色には共通して見られる色(青茶・江戸茶・あいみる茶・から茶・との茶・鳶色)と小袖雛形本のみ、『染代覚帳』のみに見られる色があった。その多くは既に『紺屋茶染口傳書』に見られ、江戸時代前期には富裕層・町人層問わず一般的に広まっていたと考えられる。黒系統色については、表 4-3 の『染代覚帳』の憲法・吉岡・くろかき・くろ茶の 4 色全てが小袖雛形本に含まれる色である。他に、黒紅・びんろうじ・黒鳶といった黒系統色があり、これが富裕層における小袖の黒系統の地色であったか否かは今後検討すべき課題である。

表 4－3 『染代覚帳』と小袖雛形本の系統色比較表 ※原文にて記載

註) 本表は表 4－1 および表 4－2 より筆者作成



#### 4. 特定の技法を示す染色名称

##### (1) 『染代覚帳』記載の特定の染色技法

『染代覚帳』の中で染色技法からなる染の名称は「しゃむろ」「しもふり」「染さらさ」「ゆかた染」の4種類であった(表4-2)。

しゃむろ染は現在でもその技法など詳細が明らかなでない染の一つである。文献では、『毛吹草』巻四 山城・畿内の項で「紗羅染」という表記が見られ、おそらくこれが遡る範囲としては最も早い。小袖雛形本の『当世早流雛形』(天和4年〈1684〉)の序には、

此頃世上に惣鹿子金糸縫入の衣装すたり近き頃よりものずきかはり成ほど軽きを本とす 是によつて当風の物すきの雛形改ル或は唐染正平しほり しゃむろさらさ霜ふり・・・

とある。小袖雛形本は女性や若衆の服飾が対象となっている。その本の冒頭で、惣鹿子・金糸・繡は流行遅れとなり、唐染・正平染・絞り染・しゃむろ・さらさ・霜ふりが新しくもてはやされている旨が紹介されていることは周知のことである。天和3年(1683)という年は、金紗・繡・惣鹿子を禁じる奢侈禁止令が出た年でもある<sup>36)</sup>。『染代覚帳』はこの『当世早流雛形』の前年、すなわち奢侈禁止令が出たのと同じ年に写され、すでに取引が行われていたわけで、『染代覚帳』が時代性を反映した呉服屋の資料である事がわかる。また、『当世早流雛形』中ただ1ヶ所、29丁表の技法の記載に「しゃむろ染」が見られる。描かれている小袖の文様は中程度の大きさの輪違いと桜花文様が散らされたものである。地色はとび色、輪違いを浅黄鹿子やひわ鹿子で表わし、その縁を金箔で縁取り、花(桜花)を「しゃむろそめ、からそめ、正平そめにしてよし」との解説がある。つまりしゃむろ染は、一枚の小袖上で同時に他の染め技法と併用できると考えられる。しかしそれ以外に特に記述が無く、技法の面で具体的なことを知ることができないばかりか、小袖の意匠表現の面でも同雛形本の他頁と比べ、しゃむろ染としての明らかな特徴を見出すことはできない。

『京羽二重』(貞享2年〈1685〉)<sup>37)</sup>巻一 南北洛中の部 油小路通の諸織商家の中に「四條 しゃむろ染」の記述が見られる。油小路通にあげられている諸職商屋で染織・呉服関連の店はほかに「小袖表」しかない。しかし別の通りには「紺屋」(車屋町通)、「絹布屋」(烏丸通)、「巻物呉服屋」「上下帷子屋」「呉

服問屋」(室町通)、「茶染や」「茶宇平」(西洞院通)、「木綿島織」(小川通)などが記されている。これらの店名を見る限り、「しゃむろ染」屋はしゃむろ染を染める専門店であったと解釈できる。また、前述の『毛吹草』で山城・畿内の部に「紗羅染」と記されている点とも合致し、京周辺で染められていたことはより確かであるといえる。『雍州府志<sup>38)</sup>』(貞享3〈1686〉)では「佐羅佐染」と「暹羅染」があげられ、当時の様々な染が各染屋により染められていたとしている。ほか、『源氏ひなかつ』(貞享4〈1687〉)では上巻目録中に「しゃ室染」の表記があり、『女重宝記』巻五では女用絹布染色の「萬染め色の名」に「暹羅染」という記述がある。ここではわずかに女性用の絹地に施した染であるという情報を得られる。このように、これまでのところ文献や小袖雛形本からはしゃむろ染の染法について核心に迫ることができないのである。

「さらさ染」については、前述した『当世早流雛形』『女重宝記』『雍州府志』のほかに『御ひいなかた』(寛文6・7年〈1666～7〉)中にも「沙羅染」「更紗染」などの文字は散見できるが技法については手がかりがない。これまで「さらさ染」と「しゃむろ染」については元をたどれば同じ技法ではないかという考え方が一般的であった。しかし『染代覚帳』の記述によると、さらさ染については地色の記載がなく、二重形・三重形の二項目があることから、さらさ染が2枚あるいは3枚の型を使用した型染であることが明らかである。一方でしゃむろ染については型の使用を示唆する記述はなく地色のみ書かれている。つまり、さらさ染が型染めであるのに対してしゃむろ染は別の染技法であったことがわかる。加えて西鶴の『男色大鑑』(貞享4〈1667〉)の中で「さらさの置形」という記述が見られる<sup>39)</sup>。「置形」という記述からもさらさ染が型を使った染あるいは摺染(捺染)を指すのではないかと考えられるのである。『男色大鑑』ではさらさ染が舞台衣装の小袖である。舞台衣装に更紗染を選んだのは、当時更紗染がそれなりに人目を引く染法だったのに違いない。

「ゆかた染」は木綿麻布の項にのみ記載される名称である。「ゆかた染地浅黄」「地白ゆかた染」「同地紺染め貫」とあるので、ゆかた染の品揃えは地色が浅黄・白・紺の三色であったことがわかる。『御ひいなかた』におけるゆかた染は地色が白、浅黄、薄柿である。地質については『御ひいなかた』では言及がないが、『染代覚帳』では木綿麻布に限定されている。

「しもふり」は絹紬染代の部、木綿麻布の部双方とも下地色が鼠と柿の二種類でさらさ染やしゃむろ染よりも安価である。「しもふり」の名称は『当世早流

雛形』の序のほか、『御ひいなかた』、『女重宝記』巻五「女様絹布染色の名」でも「霜降染」が確認できるものの、ゆかた染同様 1600 年代後半の文献から「しもふり」独自の特徴は見出せなかった。

以上述べてきたように、これらの染色名称は 1600 年代後半の文献に多く残されていることがわかるが、『染代覚帳』に記されていたことにより更に現実的に存在した染色名称としてその特徴を捉えることができた。『染代覚帳』から新たに分かったことをまとめると次の通りである。まず、しゃむろ染・しもふり染・さらさ染は地質に関係なく絹紬にも木綿麻布にも染められていたが、ゆかた染は木綿麻布に染められていた。また、しゃむろ染には地色による価格設定が成されていたのに対し、さらさ染には「二重形」か「三重形」かにより価格が異なる。染型が型を使用した防染あるいは摺染であったかは断定できないものの、さらさ染が型染めであったことは確かである。

## （２）小袖雛形本の特定の技法を示す染色名称との比較

表 4-2 と同じく、表 4-4 においても小袖雛形本の〔特定の技法を示す染色名称〕をまとめている。小袖雛形本で〔特定の技法を示す染色名称〕の集計数が多いのは『源氏ひいなかた』で掲載される染色名称が多い（表 4-3）ためだが、これも同様に天和の禁令が反映された故と考えられる。また、『女重宝記』でも〔特定の技法を示す染色名称〕が数多く見られることは本章第 4 項（１）で言及したが、このことにより、当時はまだ小袖染色の技法が友禅染一辺倒ではなかった事がわかる<sup>40)</sup>。しかしながら、これらの〔特定の技法を示す染色名称〕については、一部を除き未だその技法が明らかでないものが多いのが実情である<sup>41)</sup>。そこで、『染代覚帳』と『小袖雛形本』に共通して記載されている染色技法について、両資料を比較しながら更に考察を進めていく。

『染代覚帳』（表 4-2）の〔特定の技法を示す染色名称〕（ゆかた染・更紗染・しもふり染・しゃむろ染）がいずれも小袖雛形本（表 4-4）に含まれていることは、幅広い階層の小袖染色に使用されていた技法であると考えられる。それぞれの染色名称については前項で考察し、更紗染が型を用いた染で、しゃむろ染とは別技法による染であることを指摘した。そこでこの更紗染について、小袖雛形本を加えて更に詳しく考察していく。

小袖雛形本に見られる「更紗染」の記述を順に見て行く。『御ひいなかた』では上巻の 40 丁表、下巻の 5 丁裏、6 丁表（図 27）、16 丁表、22 丁表（図 28）

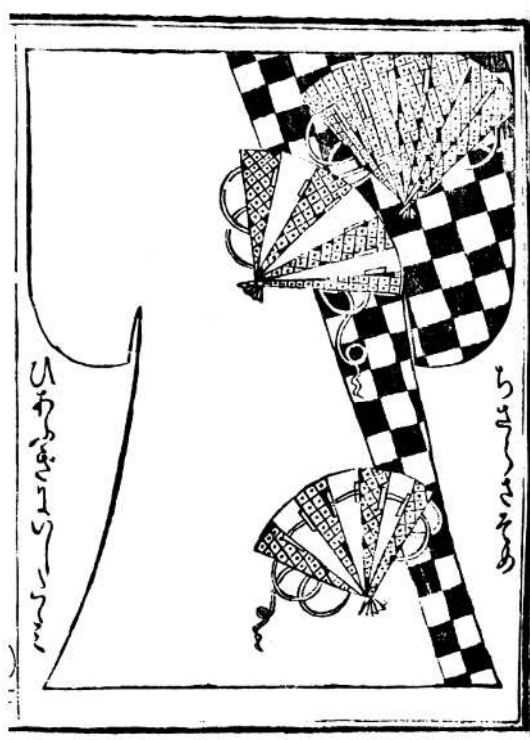


図 27 御ひいなかた下 6 丁表

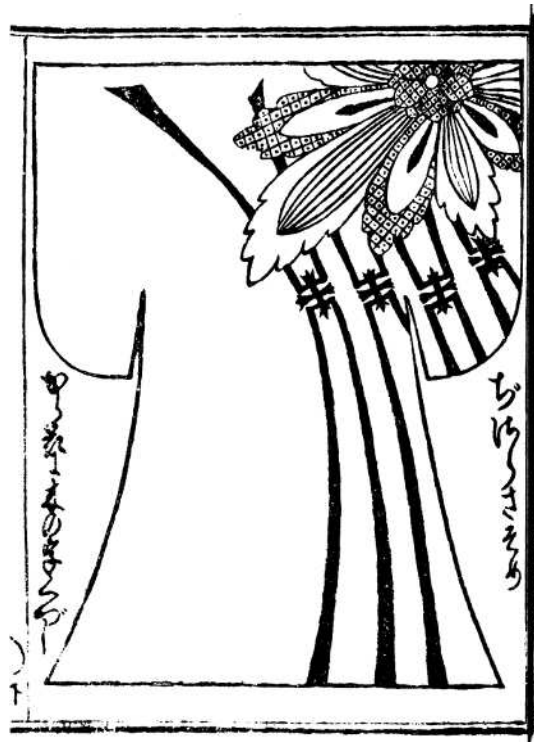


図 28 御ひいなかた下 22 丁表

の計 5 頁に更紗染の記述がある。いずれも頁の右側に更紗染の使用を示す「ぢさらさそめ」の言葉書きが見られ、左側は「ひあふぎにいしたゝみ」「から花に木の字くづし」といった雛形図の文様に関する記述である。つまり更紗染についても上紋についてもそれ以上の情報は得られない。前述の通り『当世早流雛形』では、序で更紗染の名称が記載されているが、図案の中では正平染・唐染・しゃむろ染のように「更紗染」の言葉を見出すことは出来ないのである。しかし、『源氏ひなかつた』では中巻目録品定の一項目「おく糊盆色とる繪の具のさらさ染 そめ屋がふちにうき舟もやう」より、さらさ染には糊が使用された事が窺える。ほか、『女重宝記』巻五 女用絹布染色の名の項では「沙羅染」の名称のみ確認できるだけである。

さて、『染代覚帳』の記述から得られる更紗染の特徴については、2 枚あるいは 3 枚の型を使用する、絹紬地にも木綿麻布地にも染められる、『染代覚帳』に掲載される小紋染や小紋五所紋等のあらゆる染色の中で最も高価である<sup>42)</sup>、ということが挙げられる。型の使用に関しては井原西鶴の『男色大鑑』中の「さらさの置形」の記述がこれを更に裏付けることがわかった。以上より更紗染は、1600 年代後半には一般的に行われ、その技法は糊を使った型染であること、中流から下級武士が着用した小紋染や五所紋付に比べて染代のかかる贅沢なものであったことがわかる。ただし、小袖雛形本『御ひいなかた』では、更紗染の地に上文様を重ねるという提案が見られたことから、この場合の更紗染は上文様を左右しない程度の型染とも考えられる。一方で『染代覚帳』に見られるように、更紗染のみでそれ以上の文様をつけない小袖も存在した。つまり、更紗染は独立した文様染から更に上紋を施す以前の地文様まで幅広い扱いが可能な染色であったといえる。最後に着用者の性別については、『女重宝記』で女性に限られた記載が成されているものの、小袖雛形本は武家の子女や富裕町人階級が対象、『染代覚帳』は男女、『男色大鑑』では男性の舞台衣装としての記述であることから、現段階では男女問わず使用された文様染としてまず間違いない。

## 5. そのほかの染色名称

ここでは、上記の無地染めや特定の技法を示す染色名称以外の、何らかの染法を示唆する名称について考察する。

『染代覚帳』の記述からは「めひき」は無地染や小紋染に併用されているこ

とがわかる。めひきについては染織が施された布に更に染めるという解釈がある<sup>43)</sup>ことから、小紋に「めひき」の場合、本来白く染め抜かれた小紋の型染め部分に別の色が上染めされて白上げではない小紋が染め上がると考えられる。「めひき」以外の染色用語としてはもう一種類、絹紬染代の「鵜目返し五所紋」「かきかへし同断」、木綿麻布の「とんすかへし」など、「～かへし」という言葉がいくつか見られる。よく似た言い回しが、平安時代末頃から鎌倉時代の物語などに見られる。例えば、軍記物語『保元物語』では鎧の緞糸に小桜文様が使われていた様子を「小桜を黄にかへしたる」と表現している<sup>44)</sup>。言葉だけ解釈すると、通常の型染めならば白抜きになる小桜文様の部分を黄色に染め上げることになる。さて、『紺屋茶染口傳書』下巻には「かばかへし」「ねずみかへし」の染法の解説がある。「かばかへし」はかば色の下染を行った後に型をつける<sup>45)</sup>、「ねずみかへし」はあさぎ色の下染の後に型をつける<sup>46)</sup>と解説されていることから、いずれも下染めとして無地染を行った後に改めて型をおくことがわかる。つまり染め上がりは、型で防染した箇所に出染めの色が出るのである。このように「～かへし」という言葉が古くから同様の意味を持って江戸時代前期に伝えられていたことが伺える。第2項(2)において取り上げた「洛中洛外図巻」において、繡物屋を訪ねる乳飲み子を抱いた女性の小袖(図29)を見ると、通常の小紋ならば本来白く染め抜かれる文様部分に暗色系の色がかかっている。これは「めひき小紋」または「～かへし」の技法により染められる小袖であろうか。

そのほか、現段階では染色技法が解明できないものもある。「玉虫」は絹紬染代・木綿麻布双方に見られる名称だが、染織において「玉虫」というと、異なる色の経糸と緯糸で構成される織物と理解する。しかし、『染代覚帳』の場合は染物であるという前提のもと、玉虫色がどのような色または技法なのかという答えは見出せない。また、「山鳥」は染色名称と解釈できるが、「けんほ山鳥」では憲法と山鳥色、「花色山鳥めひき」、では花色(青系統)と山鳥色という重ね合わせの色とするのか、現段階では結論付けられない。

図 29 洛中洛外図巻 部分 東京国立博物館

## 6. 染色の追加料金と反物の変更代金

第 3 章第 2 項 (5) に分類・紹介した染色の追加料金の項目のうち「紋所紺入」「かのこ付代」「上こ紋付代」「上絵書代」「紋所壺つニ付手間代」は、反物を染める際に併せて注文することで発生する料金を記したものと考えられる。鹿子染については天和 3 年 (1683) に既に総鹿の子の使用が禁止されているため部分的な鹿子染を指すと考えられるが、どの程度の分量を基準にしたのかは明らかではない。しかしその手間賃は「上絵書代」の 2 倍、「上小紋付代」の 3 倍であるから、やはりそれなりの手間を要したことは確かである。紋所については一つ当たりの手間代が設定されている [59]。最初から五所紋付が入っている反物商品 [表 1-2 : 1~5、64] 以外の反物を選び、ここに描き、繡、型による刷り込みのいずれかの方法で紋所を加えるとすれば、注文の自由度は高くなる。第 2 項 (2) において述べた職人の小袖 (図 18) もこのような注文の仕方で作ることができる。

「かな薄浅黄・中浅黄・花色百めに付」[115～117]については、絹紬染代では1匁以上、木綿麻布では4分から1匁1分の価格である。「かな」を「仮名」とすると、小袖を表す文字文様の鹿子の数100粒につき、と解釈できる。一方で、機織の用語「滕」とするならば、4筋の経糸を一つにしたものを表し、滕100めは経糸400本分ということになる。「かな」と「百目」の語の解釈により意味合いは全く異なり、現段階では答えを見出すことができない。

また、「手綱手間入一筋二付」「なみ手綱一筋二付」の加工については、『有職故実大辞典』によると染色における「手綱」とは「布地には筋で綵に染めるのを例とし・・・(後略)<sup>47)</sup>」とあることから、筋を絞り染あるいは描くことで表したものの捉え方ができる。

そのほか、絹紬染代の部の生地を取り揃えと価格についての記述は、縮緬地、絹、紬地、さらし地、綸子、羽二重、紗綾に生地を変更した場合の割増代金の価格と解釈できる。これら変更の場合の染織品の名称のうち、縮緬、綸子、羽二重、紗綾については『宗感覚帳』『呉服物相場書上』の一覧(表1-1)において同様の名称が見られる。客(消費者)はこれらの反物代金に各染代と地質の変更代金を支払ったことが推測される。

## 7. 結語

以上、『染代覚帳』に記載された内容について染色・加工名称を中心として様々な面から考察を試みた結果、いくつかの見解を得るに至った。

『染代覚帳』の中で、五所紋付、小紋、小紋五所紋は全体の約3分の1を占めた。この事実は、江戸時代前期頃にこれらの染色を施した小袖服飾の需要が確かにあったことを示している。特にこれまで小紋については、江戸時代後期に入って町人階級に「粋」の文化を表現する染色の一つとして広まり、女性も着用するようになったとする考え方が一般的である。しかし本研究では、同じ江戸時代前期頃の文学作品や絵画に、『染代覚帳』に記載されている小紋や五所紋付の小袖や羽織といった服飾を数多く見出すことができ、その着用者層が中流から下級の武士、町人、職人層、さらには女性にも広がる可能性があることがわかった。これは同時に、『染代覚帳』が対象としていた客層を示すと共に、男性のみならず女性も注文し得た物であった事を示す。また、絵画資料の検討



から、武士が着用する五所紋付が総じて黒や茶の濃色地に白上げであるのに対し、町人・職人や一部の女性の小袖の紋所は描き、繡、型染などの別技法の可能性が認められた。

江戸時代前期の小袖染織に関する資料としてはこれまで、わずかな現存資料と小袖雛形本が度々取り上げられてきた。その中で小紋や五所紋付は歴史にその名を刻んだ武将が着用したとされるもの、豪商家に残ったものなどであるし、そのほかの小袖服飾も寺社に伝えられるなどして現代に遺された、いわば当時の最高級品が殆どである。西鶴作品や風俗画に見られるような中間層の人々が着用した小袖や羽織は消耗品として日常生活の中で使用され、後世に伝える機会を持たなかったと考えられる。このような「残らない」染織品の存在が『染代覚帳』を通して見て行くことで現実的となった点は本研究の収穫の一つである。また『染代覚帳』と同時期の小袖雛形本では、大胆な意匠構成のいわゆる寛文小袖とよばれる独特のスタイルの小袖が大半を占める。小袖雛形本が呉服屋などでデザインブックとしての役割を果たし、この時期の小袖服飾の流行を示す資料であるという認識がなされて久しいため、江戸時代前期の小袖服飾は寛文小袖一色のように捉えてしまいがちである。しかし『染代覚帳』や絵画・文学作品を通して考察することで、小袖雛形本に見られるような意匠形式の小袖はこれまで考えられていた以上に限られた、武士ならば支配者層、町人なら富裕層、または遊女や歌舞伎女方といった特別な立場の人々だけに許されたもので、中流から下級武士、町人、職人層にとって最も贅沢なものと言えば小紋や五所紋付の小袖、そして更紗染などであった。これに付随して、使用者層の違う小袖雛形本と『染代覚帳』の地色の色系統の比較から、赤・黄系統色は小袖雛形本のみに認められることがわかった。色系統の違いが見られ、特にそれが赤・黄という貴重な染料による色であるということは、小袖雛形本と『染代覚帳』使用者層の端的な相違を示している。また、茶系統色については当時既によく知られていた色が一般的に着用されていたと考えられ、黒系統色については、富裕層だけに許された地色が存在したかどうか、今後検討する必要が出てきた。

特定の染の名称として分類したしゃむろ染とさらさ染については、これまで様々な文献にその名称を見ることができたが、その違いや具体的な染法は不明であった。本論では全容の解明には至らないものの、少なくともさらさ染が2枚あるいは3枚の型と糊を使用した型染であり、しゃむろ染とは別の染である

ことがわかった。『染代覚帳』の中で、絹紬地の「さらさ染三重形」の上品は全項目中もっとも高い価格が記されている。また本来、更紗の本場であるインドで染められ日本に渡ってきた更紗は木綿布であるのに対し、『染代覚帳』では絹紬にもさらさ染が施されていた。ここに、名称がそのままでも日本ならではの展開が見られる。更紗染の小袖を着用するのは『男色大鑑』に登場する男性役者であった。一方で、小袖雛形本では、小袖の地色に更紗染を提案している。更紗染めそれ自体が独立した文様染として使われていたが、富裕層にとっては上紋を付ける前の地文様でもあった。

『染代覚帳』では、小袖反物の染代以外に「染色の追加料金」の設定や「反物変更の場合の割増料金」があることも注目に価する。第2章において研究した『宗感覚帳』の存在を合わせて考えると、たとえば注文者の好みに応じた地質を選び、反物の色を指定し、五所紋付や鹿子絞、手綱、文字、上絵などを組み合わせて選ぶことが、少なくとも『染代覚帳』を扱った呉服店においては可能であり、人々は自由な注文の組み合わせを楽しむことができたと考えられる。

最後に禁令と『染代覚帳』との関連性について言及する。『染代覚帳』が写されたのは天和3年(1683)であるが、同じ頃衣服に関する禁令が出されたことは既に述べた。この年には、百姓や町人が着用するものが絹紬・木綿・麻布でその妻子も同等である、との御触書も出ている<sup>48)</sup>。禁令の内容が小袖雛形本に影響を与えたように、『染代覚帳』に記載されているさらさ染・しゃむろ染・しもふり染、また無地染や小紋などの項目も、御触書の内容を十分に考慮してのものであることがわかった。呉服店は流行を意識すると共に、禁令に反することのない範囲で多様な品物を揃える努力をした、その結果としての『染代覚帳』なのである。

註

- 1) 『日本永代蔵』巻五ノ二 『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.148、岩波書店、1960 年
- 2) 『日本永代蔵』巻五ノ二 『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.148、注 10～16、岩波書店、1960 年
- 3) 憲法染については第 3 項にて詳述する。
- 4) 職人尽絵（重要文化財 埼玉・喜多院）の型置師の場面では職人が型付作業をする職人の姿が描かれており、江戸時代初期頃の作と考えられている。
- 5) 香川・多聞院。西谷藤兵衛は讃岐西方の小領主で、弘治四 4 年(1558)頃没したとされる。
- 6) 山形・上杉神社
- 7) 重要文化財、片倉家伝来、宮城・仙台市博物館
- 8) 重要文化財、栃木・日光東照宮
- 9) 縹地星亀甲小紋袷および萌黄地九曜紋付輪繫小紋単衣、江戸時代、17 世紀、東京・永青文庫
- 10) 松葉小紋袷、元禄時代、東京国立博物館
- 11) 『伊勢型紙展』（三重県立美術館、1993 年）図録には染型紙が収載されている。鈴鹿市所蔵の斜め変り筋の染型紙は紀年銘（元禄 5 年）の残る染型紙としては最も古いものの一つである。
- 12) 前掲図録註 11) いずれも鈴鹿市教育委員会所蔵。
- 13) 福井泰民「江戸小紋小史一着物と型紙による小紋の発生と展開一」（『江戸小紋と型紙』 渋谷区松濤美術館、1999 年）
- 14) 丸山伸彦氏は『青標紙』（天保 11 年）の記述「都而色相の事は定なし。古へは無地を本式とし、たまたま小紋を用ひたるもの也。享保(1716～1736)の頃までは殿中多く無地を用ひたるものなるが、宝暦(1751～1764)の頃より追々小紋を用ゆ」より、袷の装飾について「無地を本義とする物の小紋を施すものも多く、袴には前述のように縞柄も好まれた」との見解を示している。（『日本の美術』340 号「武家の服飾」p.63、至文堂 1994 年）
- 15) 大滝幹夫 『日本の美術 343 号 染の型紙』pp.24～26、至文堂、1994 年
- 16) 長崎巖氏は『日本の美術 341 号 町人の服飾』において、「江戸前期において小紋や縞は、黒無地・色無地に次ぐ略服として専ら男性の小袖などに広く用いられていたが、宝暦(1751～64)頃から女性にも用いられるようになったこと、特に小紋については江戸時代前期から男性の袷や小袖・羽織・下着などに広く用いられてきたが、江戸後期には女性の小袖にも用いられることが多くなった」と述べている。
- 17) 『紺屋茶染口傳書』に見られる小紋染の名称は、つねの茶小紋、みる茶小紋、きがらちゃ小紋、江戸茶小紋、唐茶小紋、あを茶小紋、こび茶小紋、との茶小紋、萌葱小紋、かばがえし、ねずみ返し、黒茶憲法小紋、柿小紋、栗梅小紋の 14 種類である。
- 18) 『好色一代男』巻二『日本古典文学大系 47 西鶴集上』p.76、岩波書店、1957 年
- 19) 『好色一代男』巻七『日本古典文学大系 47 西鶴集上』p.195、岩波書店、1957 年
- 20) 山形に並べた三星点を散らした模様。
- 21) 『日本永代蔵』巻五ノ三『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.154、岩波書店、1960 年
- 22) 『日本永代蔵』巻五ノ五『日本古典文学大系 48 西鶴集下』p.161、岩波書店、1960 年
- 23) 小笠原小枝 「近世初期風俗画に顕れたインド更紗—東洋館開館 30 周年記念特集陳列から—」『MUSEUM』563 号、東京国立博物館、1999 年
- 24) 住吉具慶（1635～1705 年）
- 25) 「都鄙図巻」伝住吉具慶筆（17 世紀、奈良・興福院）  
「洛中洛外図巻」伝住吉具慶筆（17 世紀、東京国立博物館）  
内容・解説についてはそれぞれ、『近世風俗図譜』第 1 巻・第 12 巻（小学館、1983 年）を参考にした。
- 26) お仕着せに関する記述は次の通りである。「おまつお仕きせは定めて柳すゝ竹に、みだれ桐の中がたで御座る。同じ奉公でも、こんなお家に居合すが其の身の仕合、・・・」（『世間胸算用』巻三ノ二『日本古典文学大系 48 西鶴集下』pp.250・251、岩波書店、1960 年）
- 27) 「ひろうと」については、第 2 章第 3 項（9）で詳述した。
- 28) 『紺屋茶染口傳書』上巻、第十七にはけんぼう染について、「かわ三しほつけて。くろみ一ぺんかけ。ぬれながら水にてすゝぎほしつけて。又かわ三しほそめてくろみをかけ。右之ごとくほしつけてくりかへい二三べん程そめつけ申候」とある。また、同じく上巻第二十三のけんぼう・よしをか乃家の口伝の項には「かわ三しほそめ。其うへにかね一ぺんそめほして。すなわち右之かねのつけしるの余にて又一ぺんそめ。ぬれながらすゝぎ。そのうへをかわ三しほそめ。又右之ごとくにかねをかけ申候。又其上にかわ三しほそめ。右之

- ごとくにかねかけすゝぎほし申て。うへのとめにかわ一ぺんかけ申候へば、はげめ御座なく候。以上に。かわ十ぺん。つねのかね三しほ。そのつかひしる三しほ。以上六ぺんにて候」と記されている。(後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』pp.585-586、p.587 染織文化社、1931~1936)
- 29) 丸山伸彦氏は憲法色について着目し、憲法染について書かれた諸文献について述べた上で「黒染における藍の下染は 17 世紀も半ばを過ぎた頃から徐々に普及ていった」との見解を示している。(『江戸モードの誕生』pp.105~107、角川学芸出版、2008 年)
- 30) 「吉岡染 西洞院四條吉岡氏人始染黒茶色故謂吉岡染 倭俗毎事如法行之称憲法斬染家吉岡祖毎事如此故世称憲法染 此人得剣術此称吉岡流而行于今也」(『雍州府志』巻七 土産門 下服器部より)
- 31) 長崎巖「小袖雛形本に見る小袖の地色の色彩傾向」『風俗』21 巻 2 号、pp.53~70、1982 年
- 32) 河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 1—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』40 号、pp.1~8、1994 年  
河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 2—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』41 号、pp.25~29、1995 年  
河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 3—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』42 号、pp.1~8、1996 年
- 33) 色の系統の分け方については、片岸博子「江戸時代の染色技法書に現われた色名について—茶色に関する一考察—」『家政学研究』vol.32 No.2、奈良女子大学家政学会、1986 年において分類された九系統(赤・橙・黄・緑・青・紫・茶・鼠・黒)を参照した。
- 34) 表 4-2 (『染代覚帳』の系統色分類)において、梅は梅染であれば茶系統色、紅梅に準ずる色を表す言葉と解釈すれば赤系統色となる。そのため、赤系統色および不明色の項目で(梅)の記載とし、梅を赤系統色と確定しなかった。
- 35) 註 33 に同じ
- 36) 天和三年亥年二月 女衣類制禁之品々  
一、金紗  
一、縫  
一、惣鹿子  
右の品、向後女之衣類ニ製禁之、惣而珍敷織物染物、新規に仕出候事、無用たるへし、小袖之表沓端ニ付而、式百目より高直ニ売買仕ましき者也、  
(『徳川禁令考』前集第 6、p.199、創文社、1959 年)
- 37) 『京羽二重』(『京都叢書』10 巻、京都叢書刊行会、1915 年)
- 38) 『雍州府志』(『続々群書類従』第 8、pp.207~208、国書刊行会、1906 年)
- 39) 『男色大鑑』巻五 「それ迄は舞台衣装も、唐木綿にさらさの置形、地衣装は加賀絹に中紅の裏をつけ、浅草嶋にむらさき付れば、見る人おどろき、この上またも有まじきと、沙汰する程の事なりしに・・・」(新編日本古典文学全集 67『井原西鶴集②』p.462、小学館、2000 年)
- 40) 苗村丈伯：女重宝記、元禄 9 (1696) 巻 5 女用絹布染色の名 では、沙羅染・麴塵染・正平染・友禅染・吉長染・千草染・菅原染・朧染・御所染・加賀染・万年染・八文字屋染・暹羅染・霜降染・鶴目返などが見られる。
- 41) 河上繁樹らは「江戸時代の小袖に関する復元的研究」(関西学院大学アート・インスティテュート)において正平染と唐染を用いた小袖の復元を行った。関連論文として、河上繁樹：復元から見た『当世早流雛形』の染織技法、民族芸術、26、民族芸術、pp.79~85、2010 及び高木香奈子：『当世早流雛形』に見られる正平染・唐染と同時代の染色技法の検討、服飾美学、47、19-36 (2008) がある。
- 42) 絹紬地の更紗染三重形の上品は『染代覚帳』の中で最高値の 6 匁 5 分である。
- 43) 『服装大百科事典 下』(p.428、文化服装学院出版局、1969 年)では、「目引き」について「和服の染直し方法の一種。色抜きをせず、現物の色と同系色あるいは異系色でもう一度染める」、また、『江戸語の辞典』(前田勇編、p.986、講談社、1979 年)では「布帛をその元来の縞・模様の隠れぬように更に染めること」と説明している。
- 44) 『保元物語』上『日本古典文学大系 31 保元物語 平治物語』p.69、岩波書店、1961 年
- 45) 「下地を。むめ二へん引。もゝかわ一ぺん引。又其上をかりやすにみゃうばんを少くわへ一ぺん引。ぬれながらすゝぎほしあげて。其上にかたつけて其上をしろまめこく候を一ぺん引・・・(後略)」『紺屋茶染口伝書』下巻、第 15
- 46) 「下染あさぎにそめ。其上にかたつけてしろまめこく候を一ぺん引。中ねずみほなるま

---

めーぺん引申候」(『紺屋茶染口伝書』下巻、第 17)(後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』  
p.593、染織文化社、1931～1936)

<sup>47)</sup> 鈴木敬三編『有職故実大辞典』p.466、吉川弘文館、1996 年

<sup>48)</sup> 天和三年亥年二月

町中之者共衣服之儀御触書

一、百姓町人之衣服、絹紬木綿麻布、以此内、応分限、妻子共ニ可着用之事

(『徳川禁令考』前集第 5、pp.355～356、創文社、1959 年)

## 第 5 章 結論

本研究では、現存する染織資料の空白期とされる江戸時代前期天和年間、すなわち 1600 年代最後の四半世紀の染織品に関して、三井文庫本『宗感覚帳』および『染代覚帳』を染織資料として初めて取り上げ研究を行った。新しく紹介したこれらの呉服史料は、実際に店頭に並べられ、また染められた染織品に関する記録であり、当時の人々の小袖服飾や染織品の実態を知る手がかりとして貴重な文字資料である。この、呉服史料という新しい側面から、これまで研究対象とされてきた井原西鶴作品・小袖雛形本・各種染色技法書から、服飾・染織（色）に関する描写を網羅的に抽出し比較検討することにより、これまで染織史において語られてきた武家の支配者層ではなく、町人など庶民に近い側の人々の服飾・染織を対象として、天和年間を中心とした時期における新たな見解を得ることができた。『宗感覚帳』・『染代覚帳』の 2 史料を染織史研究に新たに加えたことは、本研究の特筆すべき成果である。

以下、各章ごとの成果を挙げる。

第 1 章では、本研究の主要資料である『宗感覚帳』・『染代覚帳』の解読および書誌学的考察を行い、あわせて創業期の越後屋呉服店を把握することで史料の時代背景を把握し、研究資料としての意義を述べた。また、比較・検討資料の中心である西鶴作品中の服飾・染織関連描写および小袖雛形本の記載事項（文字資料）を網羅的に抽出して整理し、2 章以降の研究のための基礎資料とした。これらの基礎調査をもとに 2 章から 4 章の研究を行った。

第 2 章では、『宗感覚帳』「呉服物相場書上」に収載されている染織名称を中心として、井原西鶴の好色物・町人物計 7 点の服飾・染織関連の記述と対照した。その中で、両資料に共通して見られる毛類（羅紗・毛氈・花氈など）、繻子、紬、綸子、竜門、紗綾、縮緬、羽二重、ビロードについて、当該時期における染織品の解釈・価格・受容の面から考察を行い以下の複数の新知見を示した。

1. 最も高価な毛類の羅紗は 1 反当たり 550 匁から 700 匁で当時の米 9 石から 11 石分に相当する。西鶴作品中、羅紗を身に着けていたのは、歌舞伎若女方のみであった。羅紗の次に高価な猩々緋はこの当時輸入品のみで、江戸の

大金持や成功した商人、裕福な女主人が毛氈と同様に敷物として使用する。その様子は同時期の初期風俗画にも確認することができた。毛類は西鶴作品にも絵画にも、“金持ち” “成功” “人とは違う華やかさ”の象徴として描かれていた。

2. 毛類の次に高価な繻子は1反あたり190匁から350匁、最も高価な白本繻子は西鶴作品で多く描かれる染織品の一つである。繻子地の小袖を着ることが出来たのは、歌舞伎若女方や売れっ子の女郎、非常に裕福な家の女性で、繻子地に描絵、切付、刺繍などを施した極上の贅沢品として身に纏った。茶屋女や女郎、若衆、近頃の贅沢な女性は、帯・足袋・頭巾といった服飾品を身に着ける姿が贅沢な装いの象徴として描かれていた。

3. 紬は天和期当時、国産品と輸入品が同時に存在したと考えられる。また、『訓蒙図彙』や『萬金産業袋』では綾の文字をあてていることから、江戸時代の紬が必ずしも繻子組織とは限らないこともわかった。西鶴作品では用例が些少であるため今後更に検討を進める必要がある。

4. 綸子と紗綾は、国産品と輸入品の双方が大変多く出回っており、長さ、地紋についても種類が豊富であった。西鶴作品では小袖としての着用例も見られるが、肌着・帯・腰巻・褌などの服飾品として多く使用されている点が前出の繻子や紬と異なる。また、綸子や紗綾の小袖を表着として着用する歌舞伎若女方は描かれず、太夫、妾候補として借り着する女性、町人女性が綸子の小袖を着ることは特別な場面での装いを意味していた。

5. 竜門は現代ではなじみのない名称だが、西鶴作品より天和期当時は男性や風呂屋女の帯、男物の小袖などに使用されていた。価格は安価ではないものの、西鶴作品では華やかな場面や人物の服飾品として描かれることはなく、『萬金産業袋』での「素紬」や「染色後の艶に欠ける」という説明と矛盾しない。

6. 縮緬は「呉服物相場書上」から価格の幅が広いことがわかる。西鶴作品では、下帯・腰巻・頭巾・帽子・小袖・広袖といったあらゆる服飾品に使用され、着用者の立場も多岐にわたる。幅広い価格帯の商品があったために様々な用途・立場において使用可能であったと考えられる。

7. 羽二重については1600年代前半から相当量の輸入をしていたが、早くから日本でも織られ、『萬金産業袋』からは種類も豊富であったことが窺える。羽二重の価格は「呉服物相場書上」に収載されていないが、『世間胸算用』で

は元禄 5 年（1692）当時、1 反につき 45 匁で、これは綸子と同程度の価格である。また『西鶴織留』では、白羽二重の肌着を着ている奉公女に対し給金 50 匁とは釣り合わないとしており、この記述から価格と収入に見合った分限相応の染織品を選択するべきとの考え方の一端を見ることができる。

8. ビロードは江戸時代前期に織物のビロードと染色の「びろうど色」の 2 種類が存在した。1500 年代後半より武将の間で着られていた織物のビロードは、1600 年代後半になると歌舞伎若女方や裕福な町人層にまで広がっていた。西鶴作品において人目をひく縞、虎膚、敷瓦の文様のビロードはいずれも織物で、一寸四方で切り売りされるほどの高級品であった。一方で、染色の「びろうど色」が同時期の染色技法書『紺屋茶染口傳書』（寛文 6 年〈1666〉）により紺に刈安を重ねた濃色の無地染であることは既に知られていたが、その実態は明らかではなかった。本研究では、「呉服物相場書上」のびろうどおよび『染代覚帳』記載の絹紬地「無地びろうど」が 1 反当たり 4 匁台という比較的安価な価格から、これが染色の「びろうど色」のことで、織物のビロードと比べると入手しやすい価格設定であることがわかった。『御ひいなかた』（寛文 6・7 年〈1666・1667〉）以降の小袖雛形本では小袖の地色として「びろうど色」が提案される例が複数見られる。これらの検討から、先行する高級輸入染織品の織物のビロードが早くから存在し、これに憧れ追随する形で濃色の染色である「びろうど色」が始まり、そのまま定着した可能性が考えられる。天和期はその中で双方が同時に存在した時期である。これまでビロードといえは織物と捉えるのが一般的であったが、本研究により「びろうど色」との関連性について提示することができた。

第 3 章では、『染代覚帳』に記された染色名称について記載内容の解説と内容整理を行い、価格面に注目して当時の『染代覚帳』の使用者層の位置づけを行った。

『染代覚帳』は上方で使用された呉服関係資料である。天和 2 年(1683)の禁令では百姓・町人とその妻子の着る物として絹紬と木綿・麻布が挙げられている。『染代覚帳』が写されたのがそのすぐ後である上に、内容構成が絹紬地と木綿・麻布地の部であることから、客層として、町人層を対象に含む資料であると考えられる。

収載された絹紬染代と木綿麻布の染色価格の傾向として、価格の上位を絹



紬が占める。中でも絹紬染代の染さらさ[更紗染]三重形の 6 匁 5 分が最も高価であった。この、6 匁 5 分という染代は米 1 石、新酒・古酒（1 斗あたり）と比較すると決して安価ではない。西鶴作品との比較考察では、価格に関する描写に注目し、江戸の大金持ち（芝居小屋での出費）、問屋の女房家ぬし（服飾代金）、大坂庶民の生活費（日雇いの給料）、働き者の食たき女（奉公の給金）の 4 例を取り上げた。一般庶民の生活からは想像もつかない金銭感覚の世界に生きる江戸の大金持ちや問屋の女房家ぬしにとって、『染代覚帳』の価格設定は非常に安価なもので、負担を感じる額面ではない。一方で、家族 4、5 人で 1 カ月 15 匁未満の収入で暮らす庶民層や 1 カ月あたり 6 匁未満の稼ぎの奉公女にとっては、『染代覚帳』の価格は安くはない。しかし絹紬地の小袖を正月などの晴れ着用に購入することも決して不可能ではなかったことが窺える。また、奉公などに出る人々は、お仕着せを与えられる可能性もある。このように『染代覚帳』の価格を西鶴作品を通して考察することで、生活水準の大きな違いを具体的な数字で捉えることができた。その結果、『染代覚帳』の使用者層は支配者層の武士ではなく、町人を含む社会の中間層を対象としていることが明らかとなった。

第 4 章では、『染代覚帳』に記載された染色・加工名称について、小袖雛形本、絵画資料、染色技法書などを検討材料とし、染色技法と着用者層、色系統、加飾技法、禁令といった様々な面からの考察を行った。

1. 『染代覚帳』の中で、五所紋付、小紋、小紋五所紋は全体の約三分の一を占めた。この事実は、江戸時代前期頃にこれらの染色を施した小袖服飾の需要が確かにあったことを示す。また、同じ江戸時代前期頃の文学作品や絵画に、『染代覚帳』に記載されている小紋や五所紋付の小袖や羽織といった服飾を数多く見出すことができ、その着用者層が中流から下級の武士、町人、職人層、さらには女性にも広がる可能性があることがわかった。これは同時に、『染代覚帳』が対象としていた客層を示すと共に、男性のみならず女性も注文し得た内容であった事を示す。

2. 小紋についてはこれまで、江戸時代初期頃までは主に武士の着るもので、町人男性が正装して着用するようになったのが江戸時代中期以降、そして江戸時代後期になりようやく女性も着用するようになったという考え方が一般的であった。このような考え方の要因として、江戸時代前期の町人層由来の

現存資料が見当たらないことがあげられる。しかし『染代覚帳』の研究により、天和年間当時に、中流から下級の武士、町人、職人層、さらには女性といった中間層が小紋を着用していたことが明らかとなった。

3. 五所紋付については、武士の五所紋が総じて黒や茶の濃色地に白上げであるのに対し、町人・職人や一部の女性の小袖の紋所は描き、繡、型染などの別技法の可能性が認められた。

4. 小袖雛形本と『染代覚帳』の地色の色系統の比較からは、貴重な染料を使用する赤・黄系統色は小袖雛形本のみ認められ、『染代覚帳』では青・茶系統が多くを占めていた。これは小袖雛形本と『染代覚帳』の使用者層の相違を端的に示している。また、江戸時代後期の町人の色と言われてきた青・茶系統色が 1600 代後半、既に京周辺では一般的に着用されていたと考えられる。黒系統色については、富裕層だけに許された地色が存在したかどうか、今後検討する必要が出てきた。

5. 「しゃむろ染」と「さらさ染」については、これまで様々な文献にその名称を見ることができたが、その違いや具体的な染法は不明であった。第 4 章では全容の解明には至らないものの、少なくともさらさ染が糊と 2 枚あるいは 3 枚の型を使用した型染であることがわかった。また、本来、更紗の本場であるインドで染められ日本に渡ってきた更紗は木綿布であるのに対し、『染代覚帳』では絹紬にもさらさ染が施されていた。ここに、名称がそのままでも日本ならではの展開が見られた。『染代覚帳』の中で最も高価なのは絹紬地の「さらさ染三重形」であった。これは町人の正装であった五所紋付や小紋よりも高価である上に、当時舞台衣装に使用されるような独立した華やかな染であった。一方で小袖雛形本に記載される更紗染は地染めであり、その上に更に上紋を施す提案をしていた。更紗染には、単独の文様染、無地染と同等の地染めの 2 通りの役割があったと考えられる。

6. 『染代覚帳』では、小袖反物の染代以外に「染色の追加料金」の設定や「反物変更の場合の割増料金」があることも注目に価する。注文者の好みに応じた地質を選び、反物の色を指定し、五所紋付や鹿の子紋、手綱、文字、上絵などを組み合わせて選ぶことが可能であった。

7. 『染代覚帳』が写された天和 3 年（1683）と同じ頃、衣服に関する禁令が複数出された。その内容は、金紗・繡・総鹿の子といった奢侈を禁ずると共に、百姓や町人、その妻子が絹紬・木綿・麻布を着用する、というものであ

る。絹紬の部と木綿麻布の部での構成が、この史料が町人層を対象に含んだものであることは第 1 章及び第 3 章冒頭に示した。また、禁令を受けて小袖雛形本に「さらさ染」・「しゃむろ染」・「しもふり染」が登場することはこれまで度々指摘されてきたが、同じ頃に記された『染代覚帳』の染色名称が実際に存在し使用されたものであり、『染代覚帳』の各項目は、禁令の内容を十分に考慮してのものであることがわかった。呉服店においては流行を意識するだけではなく、禁令に反することのない範囲で町人層向けに多様な品物を揃えたことが明らかとなった。

以上、『宗感覚帳』および『染代覚帳』を江戸時代前期の染織史の研究資料に新たに加えることで、これまで明らかにされることのなかった、町人層を含む階層に関する小袖服飾や染織品に関して新しい見解を得ることができた。その中でも特に、以下の 4 点を染織史研究における顕著な成果として提示する。

- ①『宗感覚帳』の染織価格と西鶴作品に記載の染織品を比較した結果、西鶴が服飾描写において人物の経済面にも則して記していたことを、当時の価格をもとに具体的に呈示することができた。
- ②「小紋」について、小紋が『染代覚帳』の項目の三分の一を占めるほど、当時すでに社会の中間層に普及していたことを明らかにした。これは小紋が江戸時代中・後期に町人層へ広く普及したとする従来の説に再検討の必要性を提示するものである。
- ③地色系統の比較において、小袖雛形本に最も多い赤・黄系統は『染代覚帳』には全く見られず、それに代わって藍・茶色系統が一番多かった。これは赤・黄系統がいかに高価な染料であったかを示すと同時に、当時から町人層などの社会の中間層が着装できる天然染料による色の色相というものが藍と茶系統であったことを示すものである。
- ④染色技法において、当時の「びろうど」には舶載の「織ビロード」と和製の染色である「びろうど色」があったこと、また「さらさぞめ」は二枚三枚の型を用いて木綿に限らず絹紬に染める型染であったことを明らかにした。これら従来小袖雛形本の文字表記の中で納得いく説明がなされなかった「ちびろうど」や「ちさらさ」の意味の解明は、小袖雛形本研究にも寄与するものである。

最後に、従来その実態を捉えることができなかった天和期の小袖服飾と染織品に関して、新たな資料の発見と分析を行い、既存資料との比較検討によって詳細に実証することができた。この成果は、江戸時代前期の染織史に新しい局面を見出すものである。

これら 17 世紀末に着実に京に芽生えていた社会の中間層の服飾や染織品がその後どのような展開を見せるのか、またこのような商品が江戸に普及するのはいつ頃なのか、そして、依然として実態が明らかではない染織品について具体的な検証を行うことを今後の研究課題としたい。

## 図表一覧

### 第 1 章

図版 1	『宗感覚帳』（天和 3～元禄 3〈1683～1690〉）表紙	19
図版 2	『宗感覚帳』4 丁裏～5 丁表「亥七月店落残」	
図版 3	同上 5 丁裏～6 丁表	20
図版 4	同上 6 丁裏～7 丁表	
図版 5	『宗感覚帳』10 丁裏～11 丁表「呉服物相場書上」	21
図版 6	同上 11 丁裏～12 丁表	
図版 7	同上 12 丁裏～13 丁表	22
図版 8	同上 13 丁裏～14 丁表	
図版 9	同上 14 丁裏～15 丁表	23
図版 10	同上 15 丁裏～16 丁表	
図版 11	同上 16 丁裏～17 丁表	24
図版 12	同上 17 丁裏～18 丁表	
図版 13	同上 18 丁裏～19 丁表	25
表 1-1	『宗感覚帳』 ①「亥七月店落残」 ②「呉服物相場書上」一覧	26
図版 14	『染代覚帳』表紙	30
図版 15	同上 1 丁表	
図版 16	同上 1 丁裏～2 丁表	31
図版 17	同上 2 丁裏～3 丁表	
図版 18	同上 3 丁裏～4 丁表	32
図版 19	同上 4 丁裏～5 丁表	
図版 20	同上 5 丁裏～6 丁表	33
図版 21	同上 6 丁裏～7 丁表	
図版 22	同上 7 丁裏～8 丁表	34
図版 23	同上 8 丁裏～9 丁表	
図版 24	同上 9 丁裏～10 丁表	35
図版 25	同上 10 丁裏～11 丁表	
図版 26	同上 11 丁裏～12 丁表	36
図版 27	同上 12 丁裏～13 丁表	
図版 28	同上 13 丁裏～14 丁表	37
図版 29	同上 14 丁裏	
表 1-2	『染代覚帳』（天和 3〈1683〉）一覧	38

表 1-3	井原西鶴 服飾・染織描写一覧・・・・・・・・・・	40
①	好色一代男（天和 2 年〈1682〉）	
②	好色五人女（貞享 3 年〈1686〉）同上	
③	好色一代女（貞享 3 年〈1686〉）同上	
④	男色大鑑（貞享 4 年〈1687〉）同上	
⑤	日本永代蔵（貞享 5 年〈1688〉）同上	
⑥	世間胸算用（元禄 5 年〈1692〉）同上	
⑦	西鶴織留（元禄 7 年〈1694〉）同上	
表 1-4	小袖雛形本一覧（上野佐江子）解題より・・・・・・・・	43
表 1-5	江戸時代前期刊行の小袖雛形本・・・・・・・・・・	46
表 1-6	江戸時代前期の小袖雛形本の記載内容・・・・・・・・	47
①	四季模様諸礼繪鑑（万治 3 年〈1660〉カ）	
②	御ひいなかた 上・下（寛文 6・7〈1666・1667〉）・・	48
③	御雛形萬女集（延宝・天和頃〈1673～1684〉）・・	52
④	新板小袖御ひいなかた（延宝 5 年〈1677〉）・・	54
⑤	新撰御ひいなかた（元和元年〈1681〉カ）・・	56
⑥	新板当風御ひいなかた（当世流行雛形）（元和 4 年〈1684〉）・・	58
⑦	今様御ひいなかた（貞享 2 年〈1685〉）・・	59
⑧	諸国御ひいなかた（貞享 3 年〈1686〉）・・	60
⑨	源氏ひなかた（貞享 2 年〈1685〉）・・	64

## 第 2 章

図 1	「歌舞伎図巻」重文、部分、菱川師宣カ、江戸時代前期、東京国立博物館 ・・・・・・・・・・	71
図 2	同上・・・・・・・・・・	72
表 2-1	染織品の名称と価格に関する対照表・・・・・・・・	85
①	好色一代男（天和 2 年〈1682〉）	
②	好色五人女（貞享 3 年〈1686〉）同上	
③	好色一代女（貞享 3 年〈1686〉）同上	
④	男色大鑑（貞享 4 年〈1687〉）同上	
⑤	日本永代蔵（貞享 5 年〈1688〉）同上	
⑥	世間胸算用（元禄 5 年〈1692〉）同上	
⑦	西鶴織留（元禄 7 年〈1694〉）同上	

表 2-1 染織品の種類と『宗感覚帳』『呉服物相場書上』・『西鶴作品』の用途対照表	93
-------------------------------------------	----

### 第 3 章

表 3-1 『染代覚帳』価格の考察	106
表 3-2 京を中心とする 1650 年ごろの物価表(『15-17 世紀における物価変動の研究より抜粋』)	108

### 第 4 章

図 1 「都鄙図巻」部分、住吉具慶、元禄（1688～74）頃、奈良・興福院蔵	114
図 2 同上	
図 3 同上	115
図 4 「洛中洛外図巻」部分、住吉具慶、元禄（1688～74）頃、東京国立博物館蔵	
図 5 「都鄙図巻」同上	116
図 6 「洛中洛外図巻」同上	
図 7 同上	117
図 8 同上	
図 9 同上	118
図 10 同上	
図 11 「洛中洛外図巻」同上	119
図 12 「都鄙図巻」同上	
図 13 同上	120
図 14 同上	
図 15 「洛中洛外図巻」同上	121
図 16 同上	
図 17 同上	122
図 18 同上	
図 19 同上	123
図 20 「都鄙図巻」同上	124
図 21 「洛中洛外図巻」同上	125
図 22 同上	
図 23 「洛中洛外図巻」同上	127
図 24 「都鄙図巻」同上	128
図 25 「洛中洛外図巻」同上	

図 26	同上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	129
表 4-1	『染代覚帳』の地色と技法の分類・・・・・・・・	132
表 4-2	『染代覚帳』の系統色分類・・・・・・・・	133
表 4-3	小袖雛形本の染色名称一覧（五十音順）・・	134
表 4-4	小袖雛形本の系統色分類・・・・・・・・	135
図 27	御ひいなかた下（寛文 6・7〈1666・1667〉）6 丁表・・	139
図 28	同上 22 丁表・・・・・・・・	140
図 29	「洛中洛外図巻」同上・・・・・・・・	142



## 参考文献

### ◆ 史料

- 『雁金屋雛形帖』万治4・寛文3年(1663) 大阪市立美術館所蔵
- 『四季模様諸礼繪鑑』万治3年(1660)、東京国立博物館蔵
- 『紺屋茶染口傳書』寛文6(1666)、(後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』pp. 578-596 染織文化社、1931～1936)
- 『御ひいなかた上・下』寛文6・7年(1666・1667)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 『御雛形萬女集』延宝・天和頃、東京大学総合図書館蔵
- 『新板小袖御ひいなかた』延宝5年(1677)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 『新撰御ひいなかた』延宝9年(1681か)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 『新板当風御ひいなかた(当世早流雛形)』天和4(1684)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 『今様御ひいなかた』貞享2年(1684)、高田装束研究所／大丸松坂屋染織参考館蔵
- 『諸国御ひいなかた』貞享3年(1686)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 『源氏ひなかた』貞享4年(1687)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974
- 井原西鶴『好色一代男』天和2年(1682)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957
- 井原西鶴『好色五人女』貞享3年(1686)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957
- 井原西鶴『好色一代女』貞享3年(1686)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957
- 井原西鶴『日本永代蔵』貞享5年(1688)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960
- 井原西鶴『世間胸算用』元禄5年(1692)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960
- 井原西鶴『西鶴織留』元禄7年(1694)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960
- 井原西鶴『男色大鑑』貞享4年(1687)、新編日本古典文学全集 67 井原西鶴集②、小学館、1996
- 松江重頼『毛吹草』寛永15(1644)、(岩波文庫、1943)
- 中村楊斎『訓蒙図彙』寛文6年(1666) (『訓蒙図彙集成』第1巻、大空社、1998)
- 『京羽二重』貞享2年(1685) (『京都叢書』10巻、京都叢書刊行会、1915)
- 『女用訓蒙図彙』元禄元年(1688) (田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編 江戸期第8冊』渡辺書店、1970)

『雍州府志』元禄 2 年（1689）（『続々群書類従』第 8、国書刊行会、1906）

『京羽二重織留』元禄 2 年（1689）（『京都叢書』10 卷、京都叢書刊行会、1915）

苗村丈伯『女重宝記』元禄 9（1696）

『人倫訓蒙図彙』元禄 9（1696）（田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編江戸期 IX』渡辺書店、1969）

寺島良安『和漢三才図会』正徳 2 年（1712）（島田勇雄『和漢三才図会 7』平凡社、1987）、

三宅也来『萬金産業袋』享保 17 年（1732）（田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編江戸期第 2 冊』渡辺書店、1969）

伊勢貞丈『貞丈雑記』天保 14 年（1843）（『貞丈雑記 1』平凡社、1985）

『徳川禁令考』前集第 6、創文社、1959

『御触書寛保集成』岩波書店、1958

#### ◆ 単行本ほか

##### 一 小袖服飾、染織

神谷栄子『小袖』日本の美術 67、至文堂、1971

上野佐江子「小袖雛形本集成（1）解題」学習研究社、1974

上野佐江子「小袖雛形本集成（2）解題」学習研究社、1974

上野佐江子「小袖雛形本集成（3）解題」学習研究社、1974

上野佐江子「小袖雛形本集成（4）解題」学習研究社、1974

西山松之助『江戸町人の研究』第 3 卷、吉川弘文館、1974

丸山伸彦『武家の服飾』日本の美術 340、至文堂、1994

長崎巖『町人の服飾』日本の美術 341、至文堂、1994

大滝幹夫『染の型紙』日本の美術 340、至文堂、1994

小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』p. 237 至文堂、1998

河上繁樹・藤井健三『織りと染めの歴史 日本編』昭和堂、1999

丸山伸彦『江戸モードの誕生』角川学芸出版、2008

朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』東洋文庫 519、1990 年

##### 一 三井家関連

山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964

田村栄太郎『江戸時代 町人の生活』雄山閣出版、1966

『三井事業史』本篇第 1 卷、三井文庫、1981

『三井事業史』資料篇第 1 卷、三井文庫、1973

『カリフォルニア大学バークレー校所蔵 三井文庫旧蔵 江戸版本書目』ゆまに書房、書誌書目シリーズ、1990

『三井家文化人名録』三井文庫、2002 年

##### 一 経済、貨幣

『15～17 世紀における物価変動の研究』、京都大学近世物価史研究会編、読史会、1962

永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年』創文社、1987

『日本史小百科 貨幣』瀧澤武雄・西脇康編、東京堂出版、1999

檜谷昭彦「〈付〉近世の貨幣と物価について」『西鶴選集 世間胸算用翻刻』p.176、  
おうふう、1993

#### 一文学

- 『日本古文書学講座』**[8]**近世編Ⅲ、雄山閣出版、1980年  
野間光辰『西鶴年譜考證』p.45、中央公論社、1983  
谷脇理央、西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社、1993  
『井原西鶴集①』新編日本古典文学全集 66、小学館、1996  
『井原西鶴集②』新編日本古典文学全集 67、小学館、1996  
『井原西鶴集③』新編日本古典文学全集 68、小学館、1996  
『保元物語 上』日本古典文学大系 31、岩波書店、1961

#### ◆論文

- 恵美須屋ツル「寛文時代の小袖―「新撰御ひいながた」に関する研究―」和洋女子  
大学紀要 2号、pp.14-20、1957  
岡田陽子「小袖にみられる雪模様について」『服飾美学』9号、pp.65-82、1980  
岡林裕子、横川公子「小袖に見る松文様の展開―小袖雛形本を中心として―」『衣の  
民俗館・日本風俗史学会中部支部研究紀要』13号、pp.1-18、2003  
岡松恵「夜着における猊紋様―万治から元禄期の小袖模様雛形本を資料として―」  
『服飾美学』45号、pp.37-54、2007  
岡松恵・清水久美子「浴衣の歴史とデザイン―寛文から元禄期の雛形本を中心に―」  
『日本服飾学会誌』20号、pp.18-26、2001  
小笠原小枝「近世初期風俗画に顕れたインド更紗―東洋館開館三十周年記念特集陳  
列から―」『MUSEUM』563号、1999  
奥村萬亀子「寛文小袖の成立について」『京都府立大学学術報告理学・生活科学』31  
号、pp.39-50、1980  
片岸博子「江戸時代の染色技法書に現われた色名について―茶色に関する一考察―」  
『家政学研究』vol.32 No.2、奈良女子大学家政学会、1986  
神谷栄子『小袖』「日本の美術第67号」至文堂、1971  
河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その1―本学所蔵の小袖雛形本を中心と  
して―」『共立女子大学家政学部紀要』40号、pp.1-8、1994  
河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その2―本学所蔵の小袖雛形本を中心  
として―」『共立女子大学家政学部紀要』41号、pp.25-29、1995  
河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その3―本学所蔵の小袖雛形本を中心  
として―」『共立女子大学家政学部紀要』42号、pp.1-8、1996  
河上繁樹「女院御所と島原 江戸時代前期における小袖をめぐる」『美術フォーラ  
ム 21』15号、pp.116-119、2007  
河上繁樹研究代表「江戸時代の小袖に関する復元的研究」『関西学院大学アート・イ  
ンスティテュート』中間報告書、研究成果報告書、2009年  
河上繁樹「復元から見た『当世早流雛形』の染織技法」民族芸術 26、pp.79-85、民  
族芸術、2010  
河原由紀子「近世小袖文様水車について」『金城学院大学論集家政学編』20号、  
pp.99-102、1980  
切畑健「元和・寛永銘小袖裂打敷（真珠庵蔵）について―江戸時代前期の染織資料  
―」『MUSEUM』376号、pp.18-26、東京国立博物館、1982  
口井知子「江戸における花車の流行とその起源」『民族芸術』22巻、pp.65-71、2006  
倉盛三千代「江戸時代前期の遊女の服飾形態について」『和歌山大学教育学部紀要(人  
文学部)』23号、pp.71-85、1973

- 小出（末久）真理子「近世初期における小袖意匠形式の変遷」『日本家政学会誌』、日本家政学会 63、pp. 591-603、2010
- 小寺三枝「小袖文様の発想法—寓意性について—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』17 卷、pp. 19-124、1964
- 佐藤泰子「『松浦屏風』にみられる小袖もようについて」『文化女子大学研究紀要』2 号、pp. 60-69、1970
- 佐藤泰子「近世模様小袖考—模様配置に関する考察—」『文化女子大学研究紀要』11 号、pp. 163-179、1980
- 清水久美子・岡松恵「浴衣の歴史とデザイン—江戸時代前期を中心に—」20 号、pp. 9-17、2001 年
- 高木香奈子「『当世早流雛形』に見られる正平染・唐染と同時代の染色技法の検討」服飾美学 47 号、pp. 19-36、2008
- 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治 4 年・寛文 3 年）の研究（一）—しきうつしによる復元の試み—」『群馬県立女子大学紀要』第 28 号、2007
- 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治 4 年・寛文 3 年）の研究（二）—下前図復元と背・上前・下前連結図—」『群馬県立女子大学紀要』第 29 号、2008
- 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治 4 年・寛文 3 年）の研究（三）—年次別復元一覧表と文様の漸次以降的整理案—」『群馬県立女子大学紀要』第 30 号、2009
- 塚本瑞代「雁金屋御絵帳（万治 4 年・寛文 3 年）の研究（四）—方連結図、見頃連結図、図内文字の読み—」『群馬県立女子大学紀要』第 31 号、2010
- 中田易直「近世貨幣の基礎知識」『歴史教育』、13 巻第 10 号、日本書院、1965
- 長崎巖「小袖雛形本に見る小袖の地色の色彩傾向」『風俗』21 巻 2 号、pp. 53~70、1982
- 長崎巖「染織資料としての小袖雛形本」『MUSEUM』373 号、pp. 20-30、東京国立博物館、1982
- 中村綏子「江戸時代幕府法における衣服規制の変遷」『岡山大学教育学部研究集録』48 号、pp. 41-56、1978
- 中村綏子「江戸時代幕府法における」『岡山大学教育学部研究集録』第 49 号、pp. 133-149、1978
- 中屋弘子「盛岡短期大学研究報告」第 14 号、pp. 24-40、1963
- 西田政恵「近世前期の小袖文様に於ける王朝風の考察—御簾文様小袖について—」『学葉（金沢女子短期大学紀要）』10 号、pp. 43-61、1968
- 西田政恵「小袖雛形の文様構成—日常的主題の展開—」『学葉（金沢女子短期大学紀要）』13 号、pp. 31-45、1971
- 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—岡山藩の場合—」『岡山大学教育学部研究集録』32 号、pp. 131-153、1971
- 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—鳥取藩の場合—」『岡山大学教育学部研究集録』33 号、pp. 139-175、1972
- 西村綏子「江戸時代における衣服規制について—盛岡藩の場合（1）（2）—」『岡山大学教育学部研究集録』46 号、pp. 97-122、47 号、pp. 97-110、1977
- 橋本澄子「相応寺屏風にみる小袖意匠—上—」『MUSEUM』、No. 273、pp. 27-30、東京国立博物館、1973
- 橋本澄子「相応寺屏風にみる小袖意匠—下—」『MUSEUM』、No. 277、pp. 14-21、東京国立博物館、1974
- 花房美紀「江戸時代前期の小袖意匠における「嶋」文様の変遷—雁金屋関連資料を中心に—」『服飾美学』34 号、pp. 17-32、2002
- 花房美紀「雁金屋関連資料『衣裳図案帳』にみられる二条姫の小袖意匠について」『服飾美学』35 号、pp. 17-32、2002
- 花房美紀「雁金屋関連資料『衣裳図案帳』における人名の特定について—小袖意匠

- との関連から一」『奈良女子大学大学院人間文化研究科年俵』17号、pp. 55-65、2002
- 花房美紀「雁金屋関連資料における小袖の「筋」文様について」『美術史』156号、pp. 315-332、2004
- 平田素子「長崎唐人貿易にみる毛氈に関する研究--「唐船輸出入品数量一覧 1637～1833年 復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳」「毛氈製造手続并道具繪圖」を通して」文化環境研究、長崎大学環境科学部文化環境研究会、p. 40-49、2009年
- 福井泰民「江戸小紋小史―着物と型紙による小紋の発生と展開―」『江戸小紋と型紙』、渋谷区松濤美術館、1999
- 藤井享子「「菊に蜘蛛の巣」文様とその周辺―近世前期小袖文様の主題を巡る一考察―」『服飾美学』35号、pp. 1-16、2002年
- 藤井享子「蝶に薄文様とその周辺―近世前期小袖文様を中心に―」『服飾美学』38号、pp. 19-36、2004
- 馬場まみ「寛文小袖の文様表現に関する一考察」『日本服飾学会誌』10号、pp. 70-77、1991
- 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』に関する研究―その一・小袖にみる文様・加工技法などの分析および延宝期の服飾について―」『風俗』31巻第4号、pp. 46-65、1993
- 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』記載小袖に関する一考察―実物遺品資料との対比を通して―」『日本服飾学会誌』14号、pp. 27-34、1995
- 馬場まみ「『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』に関する研究―その二・帷子にみる文様・加工技法などの分析および延宝期の服飾について―」『風俗』35巻第3号、pp. 32-50、1996
- 前川喜重子「日本服飾史上における小袖の位置」福井大学学芸部紀要Ⅲ社会科学9号、pp. 69-80、1959
- 前原祥子「工芸にみる文様その2 近世小袖の文様―雛形本を中心として―」『武蔵野女子大学紀要』22号、pp. 123-135、1986
- 丸山伸彦「小袖雛形本研究序章―近世の流行における出版の役割を中心に―」『日本美術史の水脈』、ぺりかん社、1993
- 三橋佐江子「模様雛形本集成」『天理大学学報』39号、pp. 304-323、1962
- 吉田伸之・西坂靖「『宗感覚帳』―創業期三井越後屋の動向―」三井文庫論叢24号、pp. 243-297、1990
- 吉田雅子「慶長遣欧使節請来の祭服いに関して」『MUSEUM』No. 552、pp. 57-75、東京国立博物館、1998
- 横川公子「西鶴町人物における服飾」金蘭短期大学研究誌20号、pp. 1-25、1989
- 横川公子「西鶴町人物における服飾」風俗、第29巻第4号、pp. 1-24、1990
- 横川公子「西鶴町人物における服飾」『金蘭短期大学研究誌』20号、1989
- 横川公子「西鶴町人物における服飾 - 2 - 」『風俗』第29巻、pp. 1-24、1990
- 筆者・小笠原小枝「小袖文様考―邸内遊楽図屏風（サントリー美術館蔵）を中心に―」『日本女子大学家政学部紀要』47号、pp. 95-105、1999
- 拙稿「刺繍―小袖雛形本にみる「すぬい」について―」『日本女子大学大学院紀要（家政学研究科・人間生活学研究科）』12号、pp. 69-80、2005
- 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察（上）―江戸時代前期の染色価格について―」『MUSEUM』635号、pp. 7-23、東京国立博物館、2011
- 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察（下）―染色および加工名称について―」『MUSEUM』636号、pp. 7-21、東京国立博物館、2012
- 拙稿「江戸時代前期の染色名称の考察―小袖雛形本と『染代覚帳』を中心に―」『日

本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第 18 号、pp. 151-159、  
2012

◆ 図版

『近世風俗図譜 6 遊里』小学館、1982

『近世風俗図譜 10 歌舞伎』小学館、1983

◆ 図録

『伊勢型紙展』三重県立美術館、1993

『江戸小紋と型紙』渋谷区松濤美術館、1999

『花洛のモード』京都国立博物館、1999

『大川功氏寄贈 日本古金銀貨図録』東京国立博物館、2002

◆ 辞典類

鈴木敬三編『有職故実大辞典』吉川弘文館、1996

『服装大百科事典 下』文化服装学院出版局、1969

『江戸語の辞典』前田勇編、講談社、1979

## 江戸前期天和年間における染織品の実態研究 —三井文庫本『宗感覚帳』・『染代覚帳』の染織史的考察を基に—

江戸時代前期の染織品に関する研究は、17世紀後半より出版された小袖雛形本や染色関連の技法書、初期風俗画などを手がかりとして、主に小袖服飾における意匠形式や文様に着目して進められてきた。しかし資料の多くは社会的地位の高い支配者層および富裕町人層対象であるために、得られる見解もごく限られた階層に関するものであった。そこで本研究では、新たに公益財団法人三井文庫所蔵の2種類の呉服関係史料『宗感覚帳』および『染代覚帳』を染織資料として取り上げ、既に検討されてきた小袖雛形本、井原西鶴の作品、初期風俗画などを呉服史料の観点から網羅的に見直していく。これにより、江戸時代天和年間すなわち1600年代最後の四半世紀を中心とした京周辺の人々の衣生活に関わる染織品の実態に迫ることを目的としている。

越後屋呉服店は三井高利により延宝元年(1673)に創業された。『宗感覚帳』は高利の6男三井高好により天和3年から元禄3年(1683~1690)に記された私的な記録である。18項目の記載事項のうち染織関連の項目が4項目含まれる。本研究ではこの中から、価格の記録が残る「亥七月店落残」および「呉服物相場書上」を主に取り上げている。『染代覚帳』は三井家の8代または9代当主により収集されたと考えられる染色関連資料である。奥書に天和3年(1683)の紀年と写した人物の署名が残り、多くの専門的な染色名称と価格が記されており、『宗感覚帳』と並ぶ貴重な染織資料である。

本論文の序論では研究の背景および従来の研究を明確にしたうえで、本研究の意義を述べた。

第1章では、主たる資料について、その位置づけと内容把握を行った。三井家の歴史および創業期の越後屋呉服店の状況を把握し、『宗感覚帳』・『染代覚帳』の書誌学的検討を行った上で、染織品に関する全記載内容を表にまとめた。また、江戸時代前期の染色・服飾事情を総合的に捉える手がかりとして、井原西鶴の7作品(『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』『男色大鑑』)に描かれる染織品に関する記述を網羅的に抜粋し表にまとめた。加えて、小袖服飾の研究には不可欠である小袖雛形本について、言葉書きのある天和年間前後の9種(『四季模様諸礼繪鑑』『御ひいなかた上・下』『御雛形萬女集』『新板小袖御ひいなかた』『新撰御ひいなかた』『新板当風御ひいなかた』『今様御ひいなかた』『諸国御ひいなかた』『源氏ひなかた』)を挙げ、記載される文字情報を表にまとめた。これらの基礎資料をもとに2章から4章の研究を展開する。

第2章では、『宗感覚帳』『呉服物相場書上』に記載されている染織品の名称と価格から、江戸時代前期の染織品の実態と価格、受容についてその状況を明らかにした。検討対象は、『宗感覚帳』と西鶴作品に共通して見られる毛類、縺子、紬、綸子、龍文(竜門)、紗綾、縮緬、羽二重、ピロードとした。考察に際し、『万金産業袋』(三宅也来〈1732〉)と『唐船輸出入品数量一覧』(永積洋子編)を反物の特徴および国産品・輸入品の検討資料として用いた。その結果、上述の各染織品は、当時一般庶民には手の届かない非常に高価なものであることが明らかになった。これら高価な染織品を敷物や小袖として贅沢に使用できたのは、太夫や歌舞伎女形役者、裕福な町人層など経済的に余裕のある立場の人々であり、茶屋女や一般町人は、足袋や腰巻な

ど部分的に服飾の中に取り込むことで贅沢感を楽しんだこともわかった。また井原西鶴が丹念な服飾描写だけでなく、登場人物の立場や経済面を考慮した染織品を選択して描いていることも明らかとなった。

第3章・第4章では『染代覚帳』の研究を行った。第3章では全ての記載項目を内容ごとに分類して染代（染価格）に着目し、近い時期の物価や西鶴作品に描写される町人風俗・金銭感覚との比較を通して考察した。その結果、『染代覚帳』は中流から下級の武士、町人、職人層および一般町人女性など幅広い中間層を対象とした呉服関係の染色資料であることがわかった。第4章では、『染代覚帳』に記載される染色・加工名称に着目し、天和年間当時の小袖服飾・染色の実態解明を進めた。考察に際し初期風俗画、小袖雛形本、各種染色技法書・指南書を用い、複数の新知見を得た。まず、江戸時代初期の武家服飾および江戸時代後期の江戸町人の粋の文化とされる小紋については、京周辺では天和年間当時から着られており、着用者層は従来言われてきたよりも幅広い。次に、武士の五所紋付が濃色地に白上げであるのに対し、町人・職人層の紋所は描き、繡、型染などの別技法の可能性が認められた。使用者層の異なる『染代覚帳』と小袖雛形本の地色の比較からは、赤・黄系統色は裕福な人々しか使用できない高価な染料であることを指摘した。これまで技法が明らかでなかった染さらさは2枚以上の型と糊を使用する型染で、輸入の更紗が木綿地であるのに対し、日本では絹紬地にも染められていたことがわかった。また、染色の追加代金・反物の変更代金の項目設定があることから、注文者の好みに応じた地質、色、紋、上絵などを組み合わせた注文が可能であったことが明らかとなった。最後に、当時の呉服関係業界では、禁令を意識した商品の展開を行っていたこともわかった。

第5章結論では、新たな研究資料として取り上げた『宗感覚帳』・『染代覚帳』の資料的価値を見出した本研究の意義を述べ、第2章から第4章で得られた新知見をまとめた。『宗感覚帳』の研究では、西鶴作品記載の染織品と価格を比較した結果、西鶴が服飾描写において経済面にも即して記していたことを具体的に提示することができた。「小紋」については、当時少なくとも京周辺における中間層の人々の間に普及していたことを明らかにした。これは、小紋の町人層への普及が江戸時代中・後期とする従来の説に再検討の必要性を提示するものである。地色系統の比較においては、小袖雛形本に最も多い赤・黄系統は『染代覚帳』には全く見られず、それに代わって藍・茶色系統が最も多く見られた。これは赤・黄系統がいかに高価な染料であったかを示すと同時に、当時から社会の中間層が着装できる天然染料による色の色相というのが藍と茶系統であったことを示すものである。染織技法においては、当時の「びろうど」には舶載の織物のビロードと和製の染色の「びろうど色」があったこと、また「染さらさ」は2枚3枚の型を用いて木綿に限らず絹紬に染める型染であったことを明らかにした。これら従来小袖雛形本の文字表記のなかで納得いく説明がなされなかった「ぢびろうど」や「ぢさらさぞめ」の意味の解明は、小袖雛形本研究にも寄与するものである。

以上 17 世紀末に着実に京に芽生えていた社会の中間層の服飾や染織品が、その後どのような展開を見せるのか、またこのような商品が江戸に普及するのはいつ頃なのか、今後の研究課題としたい。



## Summary

The Actual Situation of Textiles in the Last Quarter of the 17th Century:

Based on a Study of the History of Textiles as Seen through the *Book of Sokan* and the *Book of Dyeing Costs* in the Mitsui Bunko

Research on textiles of the early Edo period has been made with focus mainly on *kosode* styles and patterns using, as reference materials, *kosode* design books and texts on techniques related to dyeing published after the last half of the 17<sup>th</sup> century as well as early genre paintings. However, since most of these reference materials were intended for the socially high ruling class and wealthy townspeople, views presented were also those about a very limited class of people. Thus, in this research historical documents associated with textiles in the collection of the Public Interest Incorporated Foundation, Mitsui Bunko, namely the *Book of Sokan* and the *Book of Dyeing Costs*, were added as new materials for study in addition to a review of such already-studied historical documents as *kosode* design books, works by Ihara Saikaku and early genre paintings from the point of view of the history of textiles. By doing so, it is hoped that an understanding may be reached about the actual situation of textiles as related to the clothing of people in the Kyoto area mostly during the last quarter of the 17<sup>th</sup> century.

Echigoya Gofuku-ten (Echigoya Kimono Shop, the wholesale draper of the Mitsui family) was founded in 1673 by Mitsui Takatoshi. The *Book of Sokan* is a private document noted by Mitsui Takayoshi, the sixth son of Takatoshi, from 1683 to 1690. It contains information on various matters associated with the management of the shop such as the types of textiles sold and their prices, inventory of the stock, gratuities paid to workers, names of merchants and records on sales. Of the 18 headings, 4 are on textiles. In the present research, focus is placed mainly on entries concerning types and prices of textiles. The *Book of Dyeing Costs* contains materials related to dyeing which are thought to have been collected by either the 8<sup>th</sup> or 9<sup>th</sup> head of the Mitsui family. The postscript bears the date 1683 and a signature of the writer. Noted in it are many technical terms associated with dyeing and prices. It is, along with the *Book of Sokan*, a valuable document on textiles.

The introduction to this dissertation first provides a summary of research conducted on the subject until now and then states the significance of the present research.

In Chapter 1, major reference materials are presented and their contents explained. After studying the history of the Mitsui family and the condition of Echigoya Gofuku-ten at the time of its founding, all the entries concerning textiles in the *Book of*

*Sokan* and the *Book of Dyeing Costs* were examined and summarized in a table. Additionally, in order to obtain a comprehensive picture of the state of things related to dyeing and clothing of the early Edo period, all entries concerning textiles as found in 7 of the works by Ihara Saikaku, who was active at about the same time, were also selected and made into a table. In addition, 9 types of *kosode* design books, which are indispensable for research on *kosode* clothing, dating to the last half of the 17<sup>th</sup> century were selected and their entries summarized in a table. These basic materials were used to develop the present research as noted from Chapter 2 to Chapter 4.

Chapter 2 clarifies the circumstances surrounding textiles in the early Edo period as well as their prices and how these textiles were incorporated into the lives of the people, based on the records of market price for textiles in the *Book of Sokan*. Textiles commonly mentioned in the *Book of Sokan* and works by Saikaku, such as wool, silk satin, silk crepe, velvet and so on, were selected for examination. Entries on textiles in *Bankin Sugiwai Bukuro* (Miyake Yurai, 1732) and *To-sen Yushutsunyu-hin Su-ryo Ichiran* (Nagazumi Yoko ed., 1987) were used as reference materials for a study of the characteristics of textiles and examination of domestic and imported textiles. As a result, it became clear that the textiles listed above were so expensive that the common people could not buy them. It was only those who were financially well-to-do that could luxuriously use these textiles for carpets or *kosode* and its accessories. Common people could only partially incorporate these textiles into their clothing, such as in *tabi* (traditional Japanese socks) and *koshimaki* (underskirt), to enjoy a sense of luxury. It also became clear that Ihara Saikaku not only made careful descriptions of clothing but that he also selected the textiles he described, taking into consideration the social status and financial aspects of the characters in his work.

Chapters 3 and 4 are a study of the *Book of Dyeing Costs*. In Chapter 3, all entries were classified according to their contents and attention was placed on the prices for dyeing which were compared with prices in general in those days and the customs and monetary sense of the townspeople as described in the works of Saikaku. As a result, it became clear that the *Book of Dyeing Costs* is a document containing information about dyeing of clothing for a large middle class including middle to lower class warriors, townspeople, skilled workers and common women of the town. In Chapter 4, attention was given to the names of dyes and design techniques as noted in the *Book of Dyeing Costs* in order to clarify the circumstances surrounding *kosode* clothing and dyeing in the last quarter of the 17<sup>th</sup> century. Early genre paintings, *kosode* design books, and various documents on the techniques of dyeing were consulted. As a result, several new findings were obtained. First, it was found that *komon*, which is considered to have been the clothing of the warrior class in the early Edo period and the fashionable culture of

the Edo townspeople in the late Edo period, had been worn in the Kyoto area from the last quarter of the 17<sup>th</sup> century and by a wider group of people than had been conventionally thought. Second, it was found that while *itsutokoro montsuki* worn by the warrior class was white on a dark background, other techniques like drawing, embroidery and stencil dyeing were possibly used among the townspeople and skilled workers. A comparison of colors as noted in the *Book of Dyeing Costs* and in entries related to background color in *kosode* design books, which are targeted for different groups of users, pointed to the fact that reds and yellows were expensive and could be used only by the well-to-do class. It was also found that *sarasa-zome*, for which the technique was not known until now, was stencil dyeing using more than two sheets of stencils and glue and that while cotton was used in imported *sarasa*, silk was also used in Japan. Furthermore, it was found that since prices for textile, dyeing and design seemed to have been individually fixed, it would have been possible to make orders according to taste, combining different textiles, color, family crests and drawings. Finally, it was also found that in the world of Japanese clothing of those days, merchandise was developed so that they would not break any prohibitory decrees concerning types of textiles and decorative techniques permitted to different classes of people.

In Chapter 5, which is the conclusion, newly obtained findings based on a study of the hitherto untouched materials, the *Book of Sakan* and the *Book of Dyeing Costs*, are summarized. Through a study of the types of textiles and prices mentioned in the *Book of Sakan*, the way in which *kosode* was worn in the early Edo period and incorporated into the lives of the people of the time was made clear. A study of the *Book of Dyeing Costs* provided information on *kosode* clothing and dyeing of the middle class, which had not been a subject of study until now, through an examination of the prices and techniques. These findings open a new approach to research on the history of textiles in the last quarter of the 17<sup>th</sup> century. Lastly, the necessity for elucidating the techniques of dyeing, about which there are still unclear matters, and for conducting further study of the *Book of Sakan* is pointed out as a future subject for research.

## 謝辞

本研究を遂行するにあたりまして、終始ご指導と激励を賜りました、日本女子大学大学院人間生活学研究科、佐々井啓教授に深く感謝申し上げます。

研究を完成するにあたり、多くのご教示を頂きました、関西学院大学河上繁樹教授、日本女子大学大塚美智子教授、増子富美教授、森理恵准教授に深く感謝申し上げます。

また小笠原小枝名誉教授には、本研究の遂行はもとより、本論文の作成全てにあたり、終始懇切丁寧にご指導ご鞭撻を賜りました。ここに記し、心より感謝申し上げます。

史料調査にあたり、格別なご配慮を頂きました公益財団法人三井文庫の関係者の皆様、史料解読に際しお力添え頂きました東京国立博物館 池田宏先生、近世の経済史に関してご教示下さいました鶴見大学 石田千尋教授、近世の物価史料に関してご教示下さいました貨幣博物館 関口かをり先生、小袖雛形本調査にご協力くださいました高田装束研究所 高田倭男先生、大丸松坂屋京都染織参考館の掛谷誠三様、馬場正則様に心より御礼申し上げます。

平成 25 年 9 月

沢尾 絵